



龍

ナオミ

目次

パリ	1
ロアール	8
再びパリ	25
パリ～香港	43
香港 1	50
香港 2	61
香港～神戸 1	73
香港～神戸 2	91
神戸	105

パリ

私が初めてこの街を訪れたのは、もう十年以上前のことだ。それから二度訪れた。いつも同じ季節で、友人と一緒にだった。

手に触れる物すべてが冷たくて寒い。けれどもクリスマスの飾り付けが始まり、街も人も急に華やぎ始める頃。私の大好きな季節。しかし今度の旅は訳有りの一人旅。

離婚問題が片付いたのが11月の始めの事だった。

エネルギーを使い果たし、心身共に疲れた私は、旅を思い立った。それがこの季節だった為に、この街を思い付いたのだ。

大好きなこの時期のパリに身を置く事で、疲れた自分をいたわってやろうと思った。それにこの街には、私を知っている人が誰も居ない。一人になった事を実感するには持つてこいのシチュエーションに思えた。

ホテルは迷わずにモンマルトルの傍に決めた。

自分で旅行社へ行き、飛行機のチケットとホテルの予約を取った。いつもは人任せにしよう事だが、今回は傷心の一人旅。誰を頼る訳にもいかない。

この時期のモンマルトルは、空気が澄んでいるせいか、見上げるだけで涙が零れる程の蒼さを持った空と、確かな質感を持った特殊な白のサクレクール寺院が、絶妙なバランスを保ちながら、圧倒的な迫力を見せているはずだ。

見る度に、二十歳の頃初めて見た時と同じ感動を感じさせてくれる。しかし、今の疲れ切った私にも、またあの感動を与えてくれるだろうか。それよりも、今の私にまだ感動するだけの力が残っているのだろうか。

一人で、飛行機のエコノミーの窮屈なシートに体を預けて、12時間あまり飛んだ。

いつもなら、友人との楽しい会話で旅のプロローグとなる時間だ。しかし、今回は終わらせてしまった結婚生活や、別れた夫への、私なりの想いを絶ち切るための作業にその時間を使った。

辛かった思い出だけが幾つも蘇って来た。楽しかった事もあった筈なのに、それを思い出すには、もう少し時が経ち、辛さが思い出になる必要があるのだろう。

悔しさや、情けなさや格闘しただけで、何一つ片付かないまま私の乗った飛行機は、パリ上空に着いてしまっていた。

「まあいい」

ゆっくり時間をかけて片付けてしまえば良い。私には未だ沢山時間が残っているのだから。

着陸準備に入り、シートベルトで体を固定する。私は飛行機の冷たい小さな窓に顔を付けて街を見た。その小さく切り取られた窓枠の中には、私の記憶の中のパリと寸分違わぬ景色があった。トパーズを散りばめたような暖かい色の光が、凱旋門に向かって集まっている。何となく胸が詰まる。一人で見るパリの灯。

空港を出てタクシーでホテルへ向かった。

私はフランス語が判らない。行き先は紙に書いたものを運転手に見せた。彼が「ウィ」と言ったので一安心。

少し肥った中年の運転手は、何処から来たとか、何しに来たのかとか、初めはフランス語で、そしてそれが私に通じないのを知って訛りのある英語で尋ねる。

私は英語も話せない。しかしなんとなく何を尋ねたのかが判ったので、知っている単語を並べて答えた。

「ジャポン」「ミュゼ」そんな感じだ。

陽気な彼は色々と話かけてくれるが、私があまりにも判らないので途中で諦めたらしく鼻歌を歌いながら運転した。

小一時間程で車はホテルに着いた。私は少し多めにチップを渡し、タクシーを降りる。陽気な運転手は何か祝福の言葉の様なものを残して車を発進させた。

ホテルに入り、フロントでパスポートを見せてチェックインする。ロビーには、まばらに人がいた。誰一人として私を知らない人達だ。しかし、その誰もをホテルの暖かい光は迎え入れていた。

ベルボーイに案内されて部屋へ行く。エレベーターに乗り、五階で降りた。彼が鍵を開けてくれ、私は部屋に入る。彼は荷物を部屋に入れると鍵を置いて出て行った。

扉の閉まる音を聞いた途端私は、突然予期しなかった孤独感に襲われた。本当に一人ぼっちだった。それも大好きな、楽しい思い出の沢山詰まったパリの街で。

カーテンを開けて窓から外を見る。そこは石のグレーに覆われたパリの街だった。その窓越しの風景を見ていると胸の辺りに熱くて重い塊があるのを感じた。

私は街を見ながら涙を流していた。その涙が胸に有る塊を更に膨らませる。

夫の浮気を知った時私は、結局最後まで泣かずにすべてを処理した。

強く、冷静で、嫌なことはいつも事務的に処理出来る女性。それが私の働く女性としての一つの理想であった。

もちろん一人の時には枕に顔を埋め、声を立てずに泣いたりもした。眠れない夜も随分過ごした。しかし、朝にはむくんだ顔や腫れた目を氷で冷やし、それを誰にも知られないよう細心の注意をはらっていた。それを見せることは、それまで自分が作り上げて来たものの崩壊に繋がるように思えた。

きっと別れた夫は、そんな可愛げの無い私が、嫌で堪らなかったのだろう。しかし、本当の私は今こうしてパリの街を見ながらたった一人で泣いている。誰にも見られていない。もし見られたとしても、誰も私を知らない街。そしてこの街を出てしまえば、私の生活に何ら影響を与えないと言うシチュエーションの中で、やっと私は私の美意識から解き放たれたのだった。

最初は涙だけが溢れて来て、それが引き金となり嗚咽に変わる。誰にも遠慮することがないことに気付くとそれは大声に変わった。私は子供のように泣きじゃくり、気の済むまで一人で泣いた。そして泣き終わるとおなかがすいていた。

バスルームで顔を洗い、化粧をし直した。誰に会うでもないのに化粧をしている自分がおかしくもあり、少しいじらしくもあった。いつもより優しく見えるように顔を作って、一人でホテルのレストランへ下りた。

泣いた後で頭がボーっとしていた私は、レストランの入り口で東洋人の男の人とぶつかってしまった。

「パルドン」私は謝る。彼は何か言った。私には判らない言葉。

キョトンとした私に彼はもう一度言い直した。

「失礼しました。日本の方ですか？」私は頷く。

「これから食事ですか？」彼が言う。

「ええ、そのつもりです」私は頷いて言った。

彼はとても感じよく微笑んで見せ、言う。「僕も今から一人で食べようと思っていたんです。良かったら一緒にしませんか？」

私は答えを渋っていた。私は元々人見知りをするタイプなのだ。仕事関係以外では、初めての人と話すのは苦手だ。

ボーイが、私達を二人連れだと勘違いしたのか、二人を一緒にテーブルに案内した。私は仕方なくテーブルに着く。彼は「良いですよ」と念を押して私の前に座った。私は曖昧に頷いた。

「何を食べますか？」彼が尋ねた。

「私、メニューを見ても判らないから、あなた、何か軽いものを頼んでくださる？」

いつもなら周りを見回して、美味しそうなものを指差してオーダーするのだ。

彼はじっくりメニューを見ると幾つかの料理をピックアップして私に尋ねる。私は彼がピックアップしたメニューの中に嫌いな物が無かったので、「それでいいわ」と答えた。

彼はボーイを呼んで注文を告げ、最後に私に「ワインは？」と尋ねた。

「少しなら」私は答える。彼はワインをリストの中からボーイに尋ねながら選んだ。

日本と違って手間暇がかかる。私はその間窓の外を見ていた。思考力は完全に麻痺していた。ただ窓の外を通り過ぎる人や車をボーッと見ていた。私は彼のペースに巻き込まれようとしていた。と言うよりも、その時の私には自分のペースが判らなくなっていたと言った方が正しいだろう。

注文を終えて彼は、私の方を向き直ると名乗った。

「エディリー」それが彼の名前だった。私は「タナカヨーコ」と名乗る。彼は香港から来たと言った。初め私を同国人かと思って広東語で話しかけたらしい。

私が言う。「随分日本語がお上手なんですね」

彼はそれに対して答える。「はい。僕は香港で宝石店をやっているのですが、日本からのお客さんが多いので五年前に一年間日本で勉強したのです」

「何処に居たんですか？」

「神戸です」

「私は大阪から来たんですよ。住んでるのも勤めてるのも大阪です。仕事は婦人服のメーカーでパターンナーをしているの」

「そうですか。女性を美しく飾るという意味でよく似た仕事ですね。それにもしかしたら僕が日本に居た時にどこかで擦れ違ったかも判りませんね」彼が言った。

巧く笑えたかどうかは判らないが、私は少しだけ笑って見せた。そして尋ねる。「パリへは何時こられたんですか？」

「昨日着きました」

「何の目的でこちらへ？ お仕事？ それとも休暇ですか？」

「今、僕の店が改装で久しぶりに休みが取れたので、休暇を兼ねて中世の装飾の勉強をしようと思ったのです。ヨーコは何時着いたのですか？」

「私は、さっき着いたところ。つい一時間ほど前かな？」

「一人でですか？」

私は曖昧に頷いた。そしてつぶやくように言う。「ひとり旅がしたかったの」

彼は少し首を傾げると、顔の前で指を組んだ。

私は彼から目を逸らす。まずいことを言ってしまったと思った。見ず知らずの男に何を言ってしまったのだ。私は後悔していた。

彼は指を解くと言った。「ヨーコ、フランス語は出来るの？」

私は首を横に振る。「全然。フランス語も英語もだめ。日本語だけ」

彼はあきれたように言う。「勇気があるのか・・・」

私は笑って言う。「滅茶苦茶なのよ。でもパリは四度目だし、いつもこの時期に来てるから、一人旅をしようと思いたった時にこの街しかないって思っちゃったの」

私は何も考えないことにした。別に何も隠す必要はない。私の頭は今、何かを考えたり嘘をついたりするには疲れ過ぎている。そう思うと少しずつ緊張が取れて行くような気がした。それに彼は何となく懐かしい雰囲気を持っていた。

ボーイがワインを運んできて、エディのグラスに恭しく注ぐ。彼は慣れた感じでテイスティングし、ボーイにフランス語で何か言った。ボーイは大きく頷くと私のグラスにワインを注ぎ、白い布で瓶の口を拭いてエディのグラスにも注いだ。ボーイが行ってしまつて、私達は乾杯した。

「ヨーコの一人旅の無事を祈って」彼はそう言ってグラスの向こうで感じ良く笑った。シンプルなグラスに注がれたボルドー色が、暫くの間目の中に残っていた。

私は尋ねる。「あなたフランス語も出来るのね。住んでいるのが香港だったら英語も話せるんでしょう？」

「はい。ここの大学に居たから。それにハイスクールはロンドンだったし。言葉には不自由しない」

「それに日本語も」私がそう言うと彼は頷いた。私は続ける。「おかげで私はおいしいワインにありつけたわ」そう言ってグラスを口に運ぶ。

「面白い言い方だ」彼は言った。

「あまりエレガントな言い方じゃないわね。でもあなたはなんだか私をリラックスさせるみたい」

「僕もヨーコと初めて会ったような気がしない」

私は笑いながら言う。「ガールハントだったら、もっと若くて可愛い人にしなさいな」

彼はグラスを飲み干すと自分で注いだ。そして目を上げて言う。「やっと笑ったね。でもそう言うつもりじゃない。本当に、昔どこかで会ったような気がするんだ」

私は彼から目を逸らせる。彼の瞳は何か特別な力を持っているように思えた。

彼の瞳とボルドー色が重なった。

私より少し年上だろうか。よく判らない。しかし窓ガラスに映る自分の顔はとても疲れていて、彼よりもずっと老けて見えた。さっき泣いたせいか目も赤い。つくづく自分が

嫌になった。

エディの頼んだ物が次々を運ばれてくる。私は少しづつそれを取り分けてもらって食べ、残りは彼が食べた。ワインもあつと言う間に一本空いてしまった。彼はフランス人について話しながら、良く食べる。東洋人に対して差別感があるとか、ホモの男性に追い掛けられ易いとか、そんな話をしながら気持ちが良い程の食べっぷりをみせた。私は相い槌を打ちながら、少しづつ食べる。彼の頼んだ料理はあまりしつこく無く、私の口には合った。それでもあまり沢山は食べられない。きつとさっき泣いたせいだろう。

私はワインを何杯か飲み、それでおなか一杯になった。結局二人で二本のワインを空けてしまっていた。

酔いのせいか、エディとの会話のせいか、私は気持ちが楽になっていた。

さっきまで一人で泣いていた自分がとてもおかしかった。しかし、泣いたことで自分が、本来の自分に戻るのを望んでいることに気付きかけていた。

彼は食べ終わるとナフキンで口を拭い、言った。「ヨーコは明日からどうするの？」

「ゆっくりと美術館へでも行ってみようと思っているわ。それにショッピングも楽しみたいし」

彼は頷く。そして言った。「ロワールへは行ったことある？」

「ええ、前に来た時に一度だけ。観光バスに乗ったの」

「僕は明日、車を借りて行こうと思っているんだけど、良かったら一緒に行かない？」

私は驚いて、彼から目を逸らせて首を横に振る。彼はじっと私を見つめている。いったいこの男は何を考えているのだろう。確かに彼は今私を誘っている。私にはその意味が良く理解出来なかった。それで私は言った。

「せっかくだけど・・・いろんな意味で危険でしょう？」

彼はいろんな意味について考えていた。そして真剣な目で言った。

「ヨーコ、僕はお金に不自由していないから君を売り飛ばしたりしない。自分で言うのも何だけど、変質者でもないと思う。極くノーマルな人間だと思うよ。

もちろん下心が無いと言えば嘘になるかも知れないけど、その下心と言ってもそんなにたいしたものじゃない。

一人で観光をするより、素敵な女性と素敵なものを見た方がずっと心に残るって言う程度のものだよ。それでお互いの気が合えば、良い友達になれるかも知れない。それは君次第だ。

それに僕の車の運転は君の国のタクシードライバーより丁寧だと思う。その上あんなに愛想も悪くない。危険なんて君が一人でパリを歩き回っている方がずっと多いと思うな」私は日本の愛想の悪いタクシーの運転手を思い浮かべて、妙に納得した。それに反論するのも面倒になっていた。

彼の言う下心という言葉が少し引っ掛かりはしたが、別に失うものは何もなかった。その上、ワインの酔いが私を大胆にさせてもいた。それでほとんどやけっぱちで答えた。

「いいわよ。じゃあ一緒に連れてって」

彼は嬉しそうに微笑んだ。どうせ自由な一人旅だし、まだ時間は沢山有る。

彼はボーイを呼んで精算した。私は「半分払う」と言ったが、彼は笑って「ほとんど僕が食べたよ」と言うので、全部払った。私は丁寧に礼を言った。彼は「気にしなくていい

よ」と言って笑った。そして尋ねる。「ヨーコ、車は何がいい？ やっぱり日本車？」

私は答える。「出来ればフランスらしい車がいいわね。せっかくパリまで来たんですもの」

彼は「判った」と言って席を立つ。私もそれに続いて席を立ちレストランを出た。

彼がボタンを押してエレベーターを呼び、私を先に乗せ、続いて自分も乗った。私が自分の部屋の階を告げると、彼がボタンを押した。そして彼は最上階のボタンを押した。

エレベーターの扉が閉まると彼は言った。「明日9時にロビーで待っているから。もしかしたら一泊になるかも知れないし、必要な物は用意しておいてね」

私は面倒なので何も尋ねなかった。

エレベーターの扉が開き、私は降りた。

「おやすみなさい」彼が言う。

「おやすみなさい」私も言った。

部屋に戻ると私はバスにお湯を張り、着ていた物を脱いだ。そのままベッドに倒れ込み一人で居る事を体中で感じていた。そしてお風呂に入った。

化粧を落とし、髪を洗う。ゆっくりとお湯につかっていると、少しづつ体のこわ張りが取れていくように感じた。長い時間狭い飛行機のシートに座っていたのだ、思ったより体は疲れていた。そのまま眠ってしまいそうなので、シャワーを浴びてバスルームを出た。

テレビのスイッチを入れるとニュース番組だった。私には関係ない国の関係ないニュースを、ふざけて真面目な顔をしたようなキャスターが巧く馴染んでいない表情でしゃべっていた。全く意味の解らない私に、それはとても気楽な感じを与えていた。

髪が乾くまで意味の解らないままテレビを付けていた。そしてスイッチを切りベッドに入る。真っ暗な知らない部屋で一人っきりだった。怖くて眠れないかと思ったけれど、多分上等のワインの酔いのせいだろう、エディの事すら考える暇もなく、すぐに深い眠りに落ちた。

目覚めるとまだ外は暗かった。スタンドを灯して時計を見る。7時前だった。私はもう一眠りしようかと思ったけれど、朝の弱い私にはめずらしく頭がすっきりとしているので起きる事にした。

部屋の灯をつけてカーテンを開ける。外は未だ暗いのに人々はもう活動している。

私は窓を開けて外の空気を部屋に入れた。それは思っていたとおりに冷たくてビシッと張り詰めていた。そのまましばらく外を見ていた。寝起きの顔がお面のように凍り付いた。それから熱いシャワーを浴びると体も完全に目覚めた。

化粧をし、身支度を整え、バッグに化粧品と下着を入れて部屋を出た。それにしても何故エディは一泊するなんて言ったのだろうか。

彼の言う下心のためだろうか。

お金もなく、若くも、美しくもないバツイチの私にどんな興味が有るというのだ。

私はその事についてはあまり深く考えない事にした。もしかしたら彼は酔っぱらっていたのかも知れない。ワインを二本も空けたのだから有り得ないことではなかった。ロワールへ誘った事だって覚えていないかも知れない。

私はそんなことを考えながらレストランへ下りた。

レストランへ入って、窓際の席に座った。

真白いシャツに蝶ネクタイのギャルソンが、コーヒーか紅茶かと尋ねる。

私が「テ・オレ」と言うと銀色に輝くポットを持ってきて、セッティングされてあったカップにたっぷり注いでくれた。

「メルシー」言葉が下手な分笑顔でごまかそうと彼に微笑んでみせた。彼も思ったより幼い笑顔で笑い返し、料理が沢山置かれたテーブルを指さし、取って食べろと言うような身振りをしてみせた。つまりバイキングスタイルと言うことだ。

私は立ち上がり、クロワッサンを三つと、テーブルに並べてある全部の種類の手巻きと、洋梨のペースト、それにヨーグルトを取って席に戻る。パリに来るといつもこれだけは食べる。日本では考えられないほどの食欲だ。

私は一人でそれをとても幸せな気分で食べ終えた。それでもまだ時計の針は8時を指す寸前だった。窓の外はもう明るくなっている。私はフロントに鍵を預けてホテルを出た。モンマルトルの坂道を、白い息を吐きながら登った。一足毎に枯れ葉がかさかさ音を立てる。大きな犬を連れて人と擦れ違う。いつものパリの風景だ。私の中にあるパリの風景。このために長い時間窮屈な思いをして飛行機に乗り、ボーナスを全部はたいてここまで来たのだ。

曲がりくねった坂道を登りきると、思っていたように、いや、思っていたままのサクレクール寺院がそこにあった。真っ青な空に真っ白な屋根が突き刺さっている。私が辛い時にいつも勇気付け続けてくれた風景だ。十年前に初めて来た時のまま、目を閉じて、目を開けても、私には同じ風景が見えた。

時間が早く、まだ観光客は居ない。

私は重い扉を押し開けてサクレクールの中に入る。

薄暗い礼拝堂の中では、何人かの人が神に祈りを捧げていた。

私はその人達の邪魔をしないように後ろの席にそっと座る。

静かに時が流れた。

初めはいろんな事が心に浮かび上がって来た。そしてそれらは悲しみや悔しさを連れていた。しかしそれに構わず、通り過ぎる貨物列車を見るように私はやり過ごした。

離婚までの数ヶ月、離婚してから飛行機に乗るまでの間、そしてパリまでの飛行機の中で、充分過ぎる程その悲しみ達と一緒に過ごした。もう、それを追い掛ける気にはなれなかったのだ。

そうしていくつもの想いをやり過ごしていると、いつの間にか心の中には何も無くなっていた。ただ空間だけがそこあって、想いは何も無い。私は無心になって祈っていた。

「神様 私に祝福を下さい」

仏教徒である事を忘れて私は本当にそう祈り続けた。

外に出ると、暗さに慣れた目に新しく昇ったばかりの太陽の光が眩しかった。その光の中で何もかもが輝いていた。

「これが神の祝福なんだ。私は神の祝福を受けている」

そう思うととても嬉しく、体の奥の方から力が沸いて来る様に思えた。

時計を見ると9時5分前だった。私は急いで坂を下り、ホテルへ戻る。

まるで、何かが始まる予感に急かされて居るようだった。

ロアール

随分急いだにもかかわらず、ホテルに帰り着いたのは9時を大分過ぎていた。

エディはロビーのソファーに座って煙草を吸っていた。酔っぱらって私を誘った訳ではなさそうだ。私が玄関に入るのをみつけると、彼は煙草を消し、立ち上がって微笑んだ。

「ごめんなさい。お待たせしちゃったわね」私がそう言うと彼は首を横に振り、言った。

「いや、そんなに待っていないよ。僕も今来たところさ」私は笑顔を作ってみせた。

彼が尋ねる。「朝早くから何処へいったの？」

私は早く目覚めてしまったのでサクレクルへ行って来た事を話した。とても綺麗だった事や、神に祝福を受けたような感じがしたと言うような事をだ。彼はそれをとても興味深く聞いてくれ、そして自分も帰るまでに是非行ってみると言った。

「そうするといいわ。とても素敵だから」私はそう答えた。

彼はコンシェルジュに車のキーをもらい、私をエスコートすると玄関を出た。

彼がドアを開けてくれた車は、赤と呼ぶよりもルージュとフランス語で呼ぶべき、日本人の思い浮かべる赤とは少しニュアンスの違う色のシトロエンだった。私が車に乗り込むと、彼は静かに体で押すような感じでドアを閉め、運転席に回り自分も乗り込んだ。

「一番フランスらしい車にしたよ」彼はそう言った。私は頷く。

彼は続ける。「でも乗り心地は判らないよ。フランスの車だから」

私は繰り返す「フランスの車ですもの」顔を見合わせて笑った。

彼が言う。「ヨーコは昨日より、元気になった」

私が答える。「良く眠れたからよ。それに神様の祝福を受けて来たんですもの。でも、夕べはそんなにひどかった？」彼は笑って答えない。

そのかわりに尋ねた。「どこか見たい所はない？途中で寄り道できるよ」

私は即座に答えた。「もし、橋を渡るのならポンヌフを渡って」

「OK」そう言うと彼は車を走らせた。

確かに彼の運転は丁寧だった。多分事故に遭う事はないだろう。車は町並みの中を走る。道幅が狭い。確かにパリだ。

信号で止まると彼は言った。「どうしてポンヌフなの？」

「大好きなの」彼は少し首をすくめてみせた。

理由なんてない。ただ、初めてこの街へ来た時にバスで渡り、橋の由来を聞いてそれがとても気に入っただけだ。だから他に説明のしようがなかった。それで、私も真似をして首をすくめた。

ポンヌフの袂で彼は車を止めてくれた。私は自分でドアを開けて下りてみる。新橋と言う名前のくせに一番古くなってしまった橋が、確かにセーヌの流れをまたいでいた。私はそれを確認するとまた車に乗り込んだ。エディは静かに車を発進させる。

人が走る位のゆっくりした速度で橋を渡りながら、彼が言った。

「反対側の袂でもう一度降りるかい？」

「いいえ、いいわ。そのまま行って」彼は橋を渡りきると車を止めずに速度を上げた。ボンヌフはすぐに見えなくなった。

町中を抜けると車は高速道路に入った。

初めは住宅街のような、日本の地方都市のような風景が窓から見えていたが、それはすぐにフランスの田舎の風景に変わった。刈り入れの終わった畑が続き、ミレーの落ち穂拾いのような色合いの山や畑が広がっている。フランスは農業国なのだ。

車の乗り心地は少しふわふわしていたが、渋滞もなく快適なドライブだ。

エディは日本に居た時の話を、あたりさわりなくする。

初め私達はあまりお互いについて尋ねなかった。暗黙の了解のようにそんなルールが出来上がっていたようだ。

それでも二人は結構いろんな話をした。彼が日本に居た時の話や、私が前にパリに来た時の話、そしてお互いの趣味についての話などだ。

尋ねられたことに答えるのではなく、問題のなさそうな事を自発的に話していた。

初めは少し気になった彼の訛りも、その頃にはもう全く気にならなくなっていた。それどころか私は、彼が香港人であるのさえも忘れかけていた。

お昼を少し回った頃、石で出来たオルレ안의町に着いた。石で出来た道に、石で出来た建物。絵の中で見ると近世のフランスの風景がそのままそこにあった。

私達は道端にあるレストランで昼食を取ることにした。フランスの田舎料理だ。

ハーフボトルのワインを二人で分け、素朴なパテのような料理、茸をふんだんに使ったサラダ、それに鴨を赤ワインで柔らかく煮込んだもの。それらと、見た目も味も素朴なパンを、フランスらしくゆっくりと楽しんだ。

二度目の食事を一緒に取ることで随分打ち解け、お互いに昔からの友達のような気がし始めていた。

彼はとても良く気がついて、私はすべて彼に任せていた。料理も、彼が私の好みを尋ねながら幾つかピックアップし、私がそれをチョイスする。欲しいものがある時は彼に言えば、微笑んで頷きオーダーしてくれる。

私がフランス語を話せないからだろうか？彼は完璧に私をエスコートしてくれていた。それが彼にとっては当たり前のことのもようでもあった。

私はとても満足していた。彼にエスコートされていることが、守られているような錯覚を与えてもいた。そのせいなのか、今朝の神の祝福のせいなのか、昨日泣きながら感じていたように、それまで信じてきた自分というものが本来の自分とは違うものだったのではないかという疑問を、うち消せなくなっていた。

体のどこにも力を入れなくても、背筋は伸びるものなのだということに、その時初めて気付いた。何故なら背筋を真っ直ぐに伸ばし、肩の力を抜き、自然に微笑んでいる自分がそこに居たからだ。

食事を終えて私達はカテドラル・サン・クロワに向かった。

車の窓から、銀色の冠を被ったような塔が見え始めた。それはとても美しいのにも関わらず、昼食の時に感じていた幸福感を瞬時に吹き飛ばし、私を重苦しい気分させた。どんどんそれに近づくにつれ、その重苦しさが増してくる。

私はその塔から目を逸らせていた。憂鬱だった。何も気に入らないわけではない。エディが何か嫌なことを言ったわけでもない。ただ、その塔が見え始めた頃から純粋な不安感に捕らわれていた。

エディが駐車場に車を止めて言った。「ヨーコ、着いたよ。サン・クロア大聖堂だ。ジャンヌダルクの所縁の場所だよ」

目を逸らせ続けていた塔が目の前に建っていた。

「ねえエディ。私何だか気分が悪いの。ここで待ってるから、良かったらあなただけで見てきてくれないかしら？」彼は首を傾げて私をのぞき込む。

「そう言えば、少し顔色が悪いみたいだ。僕なら構わないさ。前に何度も来てるから。でも、車を動かさない方がいいかい？」

私は首を振って答える。「いいえ。どこか違うところへ行って」

彼は頷くと静かに車を発進させた。

不思議な事に、車がその大聖堂を離れるに従って、私の気分は軽くなっていった。

しばらく走ると次のシャンボール城が見え始めた。

すると、またさっきと同じような憂鬱が私を支配し始めた。その憂鬱というのは、まるで空気と同じ温度で色も香りも全く無い水に気付かずに入っていくようで、少しずつ足の先から重くなっていく感じだ。私にはその不快感が、何に由来するものかが判らなかった。

シャンボール城はとても規模が大きく美しい。遠くから眺めると屋根がとても複雑で、ホテルの結婚式に出てくるウェディングケーキのデコレーションを思い出させた。私は自分に向かって「あれはウェディングケーキなんだ」と言い聞かせながらまた目を閉じた。彼は車を止めると「降りて見るかい？」と言ったが、私は首を横に振った。「また、少し気分が悪いの」実際私は胃の中の物をすべて戻してしまいたいような嫌な気分だった。

彼はそれに対して優しく頷き、車を発車させた。

次に着いたのはさっきより少し小ぶりのプロア城だった。彼が車を城の前に止め、私の方を見て言った。「今度はどうする？」

私は軽く首を振り答える。「行ってみましょう。だって、どれも見ないなんてもったいないもの」

私達は車を降りた。その時私は憂鬱の水に首まで漬かろうとしていた。けれども彼に悪いので今度は付いて行く事にしたのだ。しかし、その私の決断は間違っていた。

まるで大男を背負っているような感じの重い体を、何とかだましながら入口を潜った。そして少し歩いたところに火を吐く恐竜の様な絵が飾られていた。

「サラマンダー」そうエディがつぶやいた。それを聞いた瞬間、私は眩暈に襲われた。自分の意志が誰かに盗まれていた。エディは倒れそうになる私を慌てて支え、私を傍のベンチに座らせた。

自分自身だと信じ続けてきた自分の意識が、自分自身で無くなっていた。とうとうあの水に頭まで漬かってしまったのだ。私は焦って意識を引き戻そうとするのだが、それは思うようには行かなかった。

幼い頃の夢を見ていた。

柔らかい日差しを浴びて歩いて行く小さな自分を、昨日の自分が追いかけていた。麦わ

ら帽子をかぶり、白にブルーの水玉柄のブラウスに半ズボン姿の子供の私が、細い道を無心に歩いて行く。

昨日の私は、子供の私を追いかける。しかしその小さな自分は振り向きもせずにとこまでも歩き続ける。それはどんどん遠くなり、霧の中に溶けるようにして見えなくなった。私は泣いた。自分を見失ったことがとても悲しかったのだ。遠くで誰かの呼ぶ声がしていた。

「ヨーコ ヨーコ」

それは母の様でもあり、父の様でもあった。誰かが私を水の中から引き上げていた。目を開けると見知らぬ男の人が居た。それがエディであることを理解するまでに、少し時間がかかった。彼はとても心配そうに私をのぞき込んでいた。

私は自分の顔を手で覆ってみる。それは確かに自分の顔だった。しかし、それが昨日の自分のものか、今の自分のものかは判らなかった。

ゆっくり体を起こしてみた。憂鬱の水の重力から解放され、雲の上のような感覚だった。エディは私を支えともう一度座らせる。私は何かを追い払うように首を振った。

そして言う。「おねがいそとへつれてって」

彼には聞き取れなかった。

もう一度力を入れて言ってみる。「お願い 外へ 連れてって」

彼は頷くと私を支えて立たせ、歩かせようとする。でも歩けない。彼はもう一度私を座らせると、両手で抱き上げ、外へ連れ出してくれた。

車のところまで戻ると、私をボンネットに座らせ、ドアを開けた。私はそっと手で体を支えながら歩いて車の中に乗り込んだ。彼はエンジンをかけ車内を暖めた。

冷えた体が温まるに連れて段々体の自由が戻ってきた。

私は、バッグの中からお守りの数珠を出し、それを握り締めて呪文を唱えた。

靈感の強い友人から、「パリは魔物の棲む町だから持って行くように」と言われて持ってきていたのだ。まさか本当に役立つとは思っていなかったが、その時はただすぎるものが欲しかったのだ。

「ナウマクサマンダバザラダンカン ナウマクサマンダバザラダンカンナウマク・・・」これは昔おばあちゃんに教わった呪文。その効果か車の中の暖かさのせいかは判らないが、段々落ち着いて来て感覚が元に戻ってきた。

エディは食い入るようにそんな私を見つめている。

元に戻った私は何だか照れ臭くてうつ向いたまま言った。「ごめんなさい。こんな事初めてなのよ。もう大丈夫みたい」

彼はシートにもたれかかると、大きく息を吐きながら独り言を言った。「サラマンダーか・・・」

「サラマンダーって？」私が尋ねるた言葉は彼には届かなかった。

私は彼を横目で見ると、彼は目を閉じていた。

「本当にごめんね」今度は少し力を出して言った。

今度は彼の耳に届いたようだ。彼はシートから起き上がると言った。

「何か見たのかい？」

私は答えた。「急に意識が遠退いて、子供の頃の夢を見ていたみたい」

「初めてだって言ったね」私は頷く。

「今までに何か見えないものを感じた事はない？」

「見えないものって？ 例えば幽霊とか？」彼は頷く。

「そうね、気持ち悪い場所だなんて思うぐらいよ。どうして？ 私貧血を起こしたんじゃないの？」

彼は少し困った様な顔をした。

私は不安になって尋ねる。「私が気を失っている間に、何かあったの？」

彼は言い淀む。私はちゃんと向かい合い、彼の目を見て言った。「教えて」

彼は仕方なさそうに答える。「霊が乗り移ったんだよ。君はフランス語でしゃべっていたんだ」

「何て言っていたの？」

彼は答えない。私は辛抱強く待った。

彼が仕方なく言った。「来るなとか、帰れとか、東洋がどうか。古い言葉だったし、とても訛っていたから僕にはよく判らなかった」

彼はもうそれ以上答えない。

私は諦めて言った。「これからどうするの？ せっかくここまで来たんだし、あなた一人で見てきたら？」

彼は首を横に振った。「いや、いいよ」そう言うと、車を発進させた。

少し走ったところで彼が言った。「やっぱり・・・ここで一泊しようよ」

私は尋ねる。「どうして？」

彼が答える。「今日はゆっくり休んで、明日古城を見よう。きっと君は昨日着いたばかりで疲れてるんだ。だってせっかくここまで来たんだもの」

私のせいでこうなってしまったので、仕方なくそれに同意した。

彼は古城のホテルに車を付け、先に降りた。そして私の方に回ってドアを開け、手を差し伸べて降ろしてくれた。まだ少しふらふらしたが、彼の手を頼りに歩き始めると感覚はすぐに元に戻った。

私はその時に触れた彼の手が、思ったより暖かく力強く感じられた。

彼はロビーのソファに私を座らせると、フロントへ行った。そして戻ってきて私に尋ねる。

「スイートが一室しか空いていないんだけど、それでいい？」

彼は何を考えているのだろう。しかしそこから一人でパリへ戻る自信のない私は、同意するしかなかった。

それにとっても不思議な事に、エディに対して危険な感じが全く無かったのだ。

その時の私には、危険と言うものがどういうものなのかがちゃんと理解出来ていなかったのかも知れない。

貞操の危機？ そんなものはバツイチの私には関係なかったし、生命の危機を感じるにはエディは穏やかで、常識的に思えた。それに盗まれて困るものは何も持ってはいなかった。

「ベッドルームが二つ有るんだったらかまわないわ」

彼は軽く頷くとフロントに戻った。私も立ち上がり少し遅れてフロントへ行った。

チェックインを済ませ、キーをもらった彼は、ウインクをすと言った。

「妻って言うことにしておいたよ」

私はあきれて何も言えなかった。

ボーイに案内されて部屋へ入る。そこはとても広くて、緻密に織られた綺麗なゴブラン織りのソファと、大理石で出来た暖炉のあるリビング、それにとても広くて天蓋付のベッドのある寝室も二つ有った。バスルームも各寝室についている。

「すごい！まるでお姫様になったみたい」私ははしゃいで言った。

自分のしようとしていることに対する罪悪感からはしゃいだでみせたのかも知れない。

「僕が白馬に乗った王子様です」彼もおどけてそう言った。

私はしっかり詰め物のされたソファに腰掛けるとぼんやりと思った。

私はいったい何をしているのだろう。離婚してまだ一ヶ月も経っていないのに、一人でパリに来て、そして夕べ知り合ったばかりの中国人の男性と、夫婦と偽って同じ部屋に居る。

どうしちゃったんだろう？

「ヨーコ、あなたいったい何考えてるの？」声に出して言ってみた。

エディは不思議そうに私を見ている。

私は煙草に火を付けると大きく吸った。そして、どうにでも成れと言う気分でソファにゆったりと体をあずけて言った。

「私、咽が乾いちゃった」

彼は穏やかに笑うと電話で飲み物を注文した。

私は「どうしてあんなことになったんだろう」と独り言のようにつぶやいた。

エディは黙って私を見ている。いや、私というより私の影を見ているような感じだ。

彼の神経がどんどん集中してきているのを感じた。彼の周りが青く輝き始めていた。それは初め目の錯覚のようで、チカチカと小さなフラッシュの様だったが、すぐにそれが一つに纏まり、青い、サファイヤのような青さを持った炎のようにゆらゆらと揺らめいた。その時私は、きっとあの炎は冷たいのだろうなと思った。冷たい炎。

彼はじっと私を見つめたまま動かない。

私は緊張した。何が起こるのだろうか？ まださっきの夢の続きなのだろうか？ 私はまた呪文を唱える。

「ナウマクサマンダバザラダンカン ナウマクサマンダバザラダンカンナウマク・・・」

何回か唱えた時、彼の緊張がフッと解けた。そして言った。

「君はいったい何者なの？」

私も言う「あなたこそ何者なの？ 魔術師なの？ 私はただの日本人のツアーリストよ」

彼が何か言いかけた時、ドアがノックされた。

彼が立ち上がってドアを開ける。飲物を持ったボーイが部屋に入りテーブルにグラスとワインを置いた。コルクを開けようとするのをエディがおしとどめ、いつもの完璧な笑顔と共にチップを渡した。ボーイは礼を言って出て行った。

エディは自分でゆっくりと、優雅な手付きでコルクを開け、ワインをグラスに注ぎ分けた。私はそれを一口飲む。とてもおいしいワインだった。

「おいしい」私が言う。

彼もそれを飲むと、言った。「確かに」そしてもう一口飲んでグラスを置いて言った。

「なぜ僕が魔術師なの？」

「あなたは青い光を操ったわ」

「君には僕の光が見えるんだね」

私は頷く。

彼が続ける。「じゃあ、話そう」

そう言うと彼は顔の前で指を組んで、とても不思議な話を語り始めた。

「タベホテルのレストランの入口で君を見かけた時に、君の中に龍を見たんだ。僕はそれで君とぶつかってきっかけを作った」

私は驚いて問い返す。「龍？ 龍ってあの蛇みたいな格好で、空を飛ぶあれ？」

彼は頷く。「香港ではとても神聖なもの」

「日本でもそうよ。龍神を祭る神社やお寺も沢山在るわ。龍は元々水の神様で山から流れ出した川が蛇行するのを見て古代の人達は天に昇って行くように思ったんでしょう？」

彼は首を振る。「違う。龍は川なんかじゃない。龍は力なんだ。大地に宿る力。そして海に宿る力だ。人の力だってそうなんだ。中国で言う気の力に似ている。気の流れが龍の道。でもヨーコ、君には龍の姿が見える」

私には彼が何を言おうとしているのかが掴めなかった。

「判らないわ。どうして私と龍が結びつくのかも判らないし、それにあなたと龍の関係も判らない」私はそれだけ言って一気にグラスを飲み干した。

彼が空になったグラスにワインを注いでくれる。そしてその瓶を置いて彼が言った。

「君の龍は強力だ。でもまだ眠っている。君は龍が居る事すら気付いていない。だから炎を呼ぶんだ」

私は驚いて尋ねる。「炎って？」

「君はさっき車の中でも、そしてここでも炎を呼んだ」

「もしかしてあの呪文のことかしら？」

彼は頷き、続ける。「はい。不動明王の真言だ」

「あれは、おばあちゃんが教えてくれた呪文なの。怖い時や困った時に唱えると助けて貰えるよって言って」

「それはある意味では正しいかも知れない。不動明王自体が龍の化身したものだからね。炎の力で龍の力をカムフラージュするんだ。でも君が気を抜いた時には役に立たない。

今の君には龍の力も炎の力もコントロール出来ないからね。

ここにはさっきのサラマンダーの絵を見ても判るように龍の力を欲しがっている者達が沢山いる。

早く君が龍の力をコントロールしないと、それを利用して大変な事になる」

彼はとても断定的にそう言ってのけた。

またサラマンダーだ。それが何なのかも私には判らない。私はどうすればいいのか尋ねようかと思ったが、やめた。とても馬鹿馬鹿しかったし、何だかとても疲れていた。訳の判らない疲れだった。何も考えなくなかった。それに何故かとても眠りたい。それで私は尋ねるのを諦めて言った。

「エディ。私とても眠いの。少し寝てもいいかしら」

彼は微笑んで頷いた。そして大きな方のベッドルームの扉を開けると、ベッドの用意をしてくれた。

私がベッドルームに入ると彼は出て行き、振り返って「鍵を掛けるんだよ」と言ってそっと扉を閉めた。

私は洋服を脱いで椅子に掛ると、下着のままベッドに滑り込んだ。彼が私に悪意を持っていない事は動物的に理解していた。私は何の根拠もないにもかかわらず、安心していた。ベッドに入ると突然眠りがやってきた。そして夢を見た。

夢の中でも私は眠っていた。眠っている私の上におぼろげな影のような龍が居た。それがエディと話していた。

中国語のようだ。私には聞き取れないが、意味は理解出来た。

エディは龍になぜ目覚めないのか尋ねている。龍はそれに対して自分が目覚めるとヨーコが危険な目に遭うと言って目覚めることを拒んでいた。

僕がヨーコを守るから目覚めてくれとエディは言う。

龍は、無理だ。ヨーコは今とても傷ついているし疲れている。夫の浮気で離婚したばかりだし、仕事だって問題を山ほど抱えている。このまま無事に日本に帰してやってくれ。そうエディに頼む。

エディはそれでも引き下がらない。君は日本で目覚めるのか？

龍は判らないと答える。ヨーコが立ち直って元気になったらそんな事もあるかも知れないが、しかし私は眠っていた方が良いと思う。

エディは言う。君が眠っていたくとも、きっと無理やり目覚めさせられる事に成るだろう。その時ヨーコはもっと辛い目に遭うんだ。僕に任せてくれないか・・・そんなやり取りだ。

そしてその後エディは眠っている私に近付いて来た。そっと手を延ばし頬に触れようとする。

龍が段々遠退く。エディの手が私の頬に触れようとした瞬間、目が覚めた。

もう日が落ちて部屋は真っ暗だった。ドアの隙間から隣の光が洩れていた。ドアの向こうでエディが誰かと話していた。多分、広東語。国の誰かと電話で話しているのだろう。きっとそのせいであんな夢を見たのだ。

私は起き上がると洋服を着てベッドルームを出た。時計を見るとちょうど一時間眠っていた。エディは電話を中断して日本語で言った。

「おはよう！おなかすいただろう。ちょっと待っててね。話が終わったらレストランへ行こう」そう言うともた電話の相手と広東語でしゃべった。

私はその間煙草に火を付けポーっとしていた。ちょうど一本吸い終わった時、彼の電話は終わった。

身支度を整え、彼と一緒にレストランへ行った。

ボーイに案内されて席に付くと彼が言う。「ねえヨーコ。僕達はもっと知り合うことが出来ないだろうか？」

「知り合うって？」私が尋ねる。

彼がボーイに向かってフランス語で何か言うとボーイは「ウィムスイユ」と言って立ち去った。そして言った。

「まず僕の話をしよう。良いかな？」

「いいわよ」

彼は続ける。「まず僕の名前は李小龍。でも今はみんなエディと呼んでいる。今36歳、香港で生まれた。

祖父は風水師だ。風水と言うのは土地や建物の占い師のようなもので、香港や中国ではとても重要な仕事だ。

父はあまり風水の仕事を好まなかったので、祖父が一番良い場所を選んで、宝石店を持たせた。

母はインド人だ。父が宝石を買い付けに行った時に知り合い、結婚した。

兄が一人居る。アンディと呼んでいる。年は僕より五つ上。

僕は祖父にとっても可愛がられて育った。祖父の名前が大龍そして僕が小龍。

僕は祖父からいろんな事を学んだ。風水についても、他の色々な事についてもね。

父の商売はとても巧く行っていたんだけど、僕が生まれてしばらくしてから店の女のひと恋に落ちて家に帰らなくなった。だから僕はあまり父の事は好きじゃなかった。でも祖父が居たから寂しく思ったことは無い。

李の家系には龍使いの血が流れているそうだ

彼はとても誠実に話し続ける。ワインが運ばれてきても、彼は話し続けた。私もワインを飲みながらゆっくり付き合うことにした。さっき眠ったせいか、気持ちがとてもリラックスしていた。それに彼の話が私にとって真実である必要が無いせいか、彼に対して不信感を持つこともなかった。何故なら、その話の根底に流れるのは「龍」だったからだ。

「父は僕が15歳の時に家に戻った。でも僕はロンドンのハイスクールへ行くことが決まっていたし、兄はアメリカに留学していた。

僕には父と暮らした記憶がほとんどない。父はたまに帰ってくるけれどあまり僕や兄に興味を示さなかったんだ。

僕はハイスクールを卒業し、フランス語と歴史に興味を持ってソルボンヌへ入学した。イギリスよりフランスの方が絶対的に美味しい物が多いからね。

その時の友人が日本人で彼に簡単な日本語は習った。でも香港に帰って店をやり出した時に日本人の客がとても多いのでちゃんと覚えようと思って一年間日本で暮らしたんだ。この事は言ったよね」

私は頷く。

料理が運ばれてくる。彼は食べながらも話を止めない。

「僕は今の仕事をとても気に入っていたんだ」彼は過去形で言った。

私はそれについて尋ねる。「じゃあ、今は違うの？」

彼は曖昧に笑うと言った。「龍を見つけた。僕は龍使いなんだ。どうしようも無い」彼は言葉を切った。

「それって私の事なの？」

彼は大きく頷いた。

「僕は日本で言葉だけじゃなくて心靈学についても学んだ。日本はとても面白い。

いろんな宗教がごちゃ混ぜになっていて、それなりに力を保っている。

聖地と呼ばれる所へも行った。まだ生きている所も沢山あった。風水的に見てね。

僕は何となく僕の使う龍が日本に居るような気がしていたんだ。でもみつからなかった。一人だけまだ幼い龍を背負った人に出逢ったけれど、それはまだ幼すぎて僕の龍じゃなかった。

それで僕は諦めて香港に戻った。そして宝石店の仕事に没頭していた。

店はとても巧く行っている。兄の店は全部で三つに成り、一つは兄が、そしてもう一つは兄嫁が、そしてもう一つを僕がやっているんだ」

私は尋ねる。「お父様は？」

「父は僕が卒業して香港に帰って三ヶ月で死んだ。その頃兄がもう店をやっていたし、それに父は家に帰ってから体調を崩して寝たり起きたりの生活だったから仕方なかったんだ。きっと僕が戻るのを待っていたんだろうな」

彼は少しだけ辛そうな顔をした。

「今回は僕の店が改装で長く休めそうだったので、久しぶりにパリに来た」彼は気を取り直してそう言った。

「ええ、それは聞いたわ」私が答えた。

彼は頷くと続ける。

「こちらに来る前に祖父が言ったんだ」

彼は言葉を切った。私は黙って次を待つ。そして彼は何かに踏ん切りを付けるように頷いて、また話し始めた。

「祖父が、お前も龍を使う時が来たって言ったんだ。でも、僕は言った。だけど僕の龍はまだ見付からないって。すると祖父はもうすぐだ。そう言って後は何も答えてくれなかった。そして昨日僕は、君と出逢った」

彼の話はそこで終わっていた。物語の前編の粗筋を読み終わったような終わり方だった。次は私が話す番だ。とても馬鹿馬鹿しいと思いつつも私は夢の中で龍が彼に語った事を話した。

私が夫の浮気で離婚したばかりだと言う事や、仕事の事などを話し、龍が目覚める事を拒んでいた事などを伝えた。

本当にどうしようも無く馬鹿馬鹿しい話だった。しかし何故か龍という存在を認めているような話し方になっていた。自分自身でそれが奇妙だった。

私の知っている『昨日の自分』が話しているのではないようだった。

私はいったいどうしてしまったのだろうか？

何故なのだろうか？

私の思考力を支えていたタガが無くなっているような感じだった。

それにその時の私には、彼の龍の話を知ったところで、私に実害があるとは思えなかった。もし、私が何かを間違ったとしたら、それが一番初めの間違いだったのかも知れない。

彼はしばらく目を閉じて考えると言った。

「僕が必ず君を守る」

夢の中と同じだった。私は巧く笑顔が作れない。

「ヨーコは今シングルだ。僕もシングルだ。なんの問題も、障害もない。

僕は今まで恋をする機会がなかったんだ。僕はずっと僕の龍を探し続けていたからね。

そして僕はとうとう君を見つけた。僕と付き合ってくれないか？」

彼は真剣にそう言うと私の目を見つめた。

私はそれを聞いて吹き出しそうになったのをやっところえ、出来るだけ正直に言った。

「エディ。私はあなたの事を嫌いじゃない。でも好きかどうかはわからない。だって私達夕べ出逢ったばかりなのよ。好きになるには時間も必要なの。それに私はさっき言ったように心がとても疲れているの。

判るでしょう？ もし本当に私に龍が居たとしても、私の夢の中で龍が言ったように、起こさないで。

私はただの日本から来た旅行者で、何も特別な人間じゃないの。愛し合って結婚した夫にさえ裏切られて捨てられるような、そんな何の魅力もない女なのよ。

若くもないし美しくもない。それは私が一番良く知っているわ。

きっとあなたが私の中に見ている龍は、あなたの探している龍じゃないのよ。

確かにあなたは私が知っている男性の中で一番美しく一番魅力的だけど、今の私には動く心すらない。

それに・・・あなたの求めているのは私じゃないのが私には判る。

あなたの求めているのは龍なのよ。そんな話で女を口説くものじゃないわ」

私は一気にしゃべり終えた。

彼は私から目を逸らすと深く息を吸い込んだ。そしてそれを静かに吐き出して、もう一度私の目を見て言った。

「確かに君の言うとおりで。僕は焦り過ぎた。もう少し時間をかけよう。

せめて君がフランスに居る間の時間を僕に出来ないか。君の心の傷が癒えるのを見ていたいんだ。

僕がその為にほんの少しでも役立てればいいと思う。僕は通訳にも成れるし、ボディガードだって出来る。こう見えてもカンフーが出来るんだ。それに運転手にだって成れるし、荷物だって持てる。

明日古城を見てパリに戻る。そしてパリでまたデートしよう。恋人ごっこをするんだ。パリにいる間だけ楽しめばいいじゃないか。そして君が日本に戻る時にはフィニッシュだ」彼は冗談のような提案をした。私は本気であきれていた。彼は更に続けた。

「僕はヨーコの嫌がる事は決してしない。ヨーコはヨーコの好きなようにすればいい。もし誰かに恋をしても構わない。僕を気にしなくてもいいから」

私には何故彼がそんな提案をするのかが理解できなかった。こんな私を口説いてどうしようというのだ。幾ら考えても、それにどんなメリットが有るのか判らない。

もっと若ければ、一目惚れなどと思えたかも知れないが、そう思うには年を取り過ぎていた。しかし旅先というシチュエーションと、ワインの酔いが私を大胆にしていた。

それに、私には失うものなど何も無かった。私が今持っているのは一週間のバカンスと、傷つき疲れた心だけだ。

私がこの一週間のバカンスを彼に賭ける。彼はいったい何を賭けるというのだろうか？

「あなたは後五日で龍を目覚めさせるつもりなのね。そしてそれが出来なかったらあなたの負けなのね」

彼は頷いた。

「じゃあ、あなたが負けたらどうなるの？」

「僕の龍を失うんだ」

「それはあなたにとってとっても大切なものなのね？」

「はい。僕はそのために生まれて来た」

「OKあなたの賭に乗ってあげるわ」私は成り行きと、ほとんどやけっぱちでそう言った。その時私は彼の言う龍のことなど全く理解していなかった。ただ、彼の熱意と、昼食の時に感じていた彼と居ることの心地好さをもう少し味わいたかったのかも知れない。彼は力強く頷き、握手を求めた。私はその手を握った。とてもきれいな指だった。私は尋ねる。

「ところであなた、あなたの言う龍が目覚めた時本当に私を守れるの？」

彼は真剣な顔で答えた。「判らないんだ。僕の手で足りるものなのか、僕に守りきることが出来るのかどうか判らない。でも命を賭して守ってみせる。ただ僕の命で足らなかった時は・・・僕も怖いんだ。本当に怖いのに血が騒いで止まらない。ごめん」彼は少年のような目で、そう言った。

私は笑顔を作って言う。

「あなたが本当に龍を起こしたら諦めるわ。たいしてこの命に執着があるわけでもないし、特にやりたい事がある訳でもないの。

もしあなたが守れなくても気にすることはないわ。私が今ここで決めたんですもの。決めたのは私よ。ついでだから言っておくけど私、賭にはとても弱い。多分私は負ける方に賭けた筈よ」

彼は言った。「僕は賭けに負けたことがない」

「力強いお言葉をありがとう」私が言って二人で笑った。

その時点で契約が成立していたのだ。龍を共有するという契約が。

それから二人でいろんな話をした。彼の昔の恋の話や、私の結婚と離婚についても出来るだけ正直に話した。そうすることで私の心は随分軽く成って行った。そうして居るうちに彼は段々昔会った誰かに似ているような気がしてきた。

エディはとても懐かしい誰かに似ている。彼の前では飾ることも気負うこともない。不思議な男だ。

瞳のきれいな東洋人で、髪は真黒で背中まで伸ばし、それを一つに束ね、アルマーニのスーツを無理無く着こなしている。

私が後五歳若かったら一目惚れしていたかも知れない。でも今は無理。自分に自信もないし、心に傷を負ってもいる。『恋をするだけのエネルギーなんて残っていないのよ。エディ』私は心の中でそう言ってみた。

二人で部屋に戻ったのは11時を回った頃だった。部屋に戻った私はソファに腰掛けて、彼に言った。

「あなたとても綺麗な髪をしているのね。それに肌もとても綺麗」

彼はそれに対し、香港では漢方のとても良い物が手に入るのだと言った。そして自分の寝室から綺麗な瓶を持ってきた。それはとても不思議な香りのするオイルだった。

「マッサージをしてあげよう」と言って、彼は私の寝室のバスにお湯を張るとそのオイルを少し入れ、私に入るように言った。

私は考えることを放棄して、彼を無条件に信じることにした。それに、その頃にはかなり彼に好意を感じても居た。

「どうにでもなれ。どうせ成るようにしか成らないんだ」それが私の生きて行く上でのモットーだ。

化粧を落とし、バスタオルを体に巻いてバスタブに体を沈める。彼が「入るよ」と声をかけてバスルームへ入ってきた。

彼はシャツを腕まくりすると手のひらにオイルを取って、とても優しく、そして適格に私の顔や腕や足をマッサージする。私はとても心地好く、羽毛の布団の中でうつらうつらしているような気持ちになった。

一通りマッサージが終わると彼は「冷たい飲み物を用意するから終わったら出ておいで」と言って出て行った。

彼は本当にマッサージ以外の事をしなかった。私は自分の感じていたエディに対する安心感を確認できたことを嬉しく思っていた。

私は丁寧に髪と体を洗い、バスローブを着て、髪をタオルで乾かしながらリビングへ出た。

彼も急いでシャワーを浴びたのか、髪を下ろしバスローブを着て寛いでいた。テーブルの上には綺麗な色の飲物が置かれ、彼はそれを飲んでいて。彼の勧めに応じて私もそれを飲んでみた。それはとても不思議な飲物だった。それを飲み終わるとけだるい感じがして、私はとても安らいだ気持ちになった。

「おやすみなさい」私はそう言って寝室に引き上げ、ベッドにもぐりこんだ。何も考える暇もなく眠りは突然やってきた。

目覚めると窓から柔らかな光が差し込んでいた。寝室のドアごしにエディが広東語で話しているのが聞こえた。

私はベッドの上で起き上がると昨日一日の事を一つづつ丁寧に思い出した。とても信じられない一日だった。

私は頭を一振りしてベッドを降り、バスルームに入り、顔を洗って手早く化粧をした。彼のマッサージの効果か、とても肌の調子が良く、まるで五歳も若返ったような感じだった。

身支度を整え寝室を出ると、彼の電話は終わっていた。彼は髪を下ろし寛いでいた。とても清々しい笑顔で彼は言った。「おはよう良く眠れた？」

私も笑顔を作って言った。「あなたがともしつこくて眠れなかったわ」

彼は声を出して笑うと言った。「僕が眠っているうちにもう一人の僕が君のベッドへ入っていったのかな？」

私は言う。「あら、あれはあなたじゃなかったの？」

彼は首を傾げる。

私は笑いながら言う。「とってもよく眠ったわ。夢も見ないぐらいぐっすりだね。あれじゃ誰がベッドに入って来ても判らなかつたはずよ」

彼は大きく頷くと言った。「今朝の君はとてもきれいだよ」

「ありがとう」私はとても素直な気持ちでそう言った。

彼は立ち上がると私の顔に触れた。

「肌もずいぶん回復した。早く心もこんなふうに戻ればいいのにね」そう言って額にくちづけした。私は少しドキドキした。

彼は「食事に行こう」と言うとそのまま自分の寝室に入り、髪をまとめ、上着を羽織って出てきた。

私達はレストランで食事をし、チェックアウトを済ませ、シトロエンに乗って古城に向かった。

車窓から見えたシュノンソー城はとても女性らしいたたずまいを見せていた。

車を降りて、冷たく冴えた空気の中を少し歩く。

私は昨日の事があったので少し緊張していた。

彼は何も言わずに歩く。

私は入るのをためらっていた。

彼はそんな私を見て、言った。

「やっぱり止めよう。中に入らずに庭を散歩しよう」

「本当にいいの？ 私ここで待ってるから、あなたゆっくり見てくれば？」

彼は首を横に振る。「君と一緒にいたいんだよ。僕達には後5日しかないんだ。一分一秒も離れていたくない」

私はその言葉に吹き出した。

「まるで安物のメロドラマね」

「メロドラマって？」彼が尋ねる。

「とても良く出来ているラブストーリーのテレビ番組よ」

彼は頷く。そして言った。

「半分はジョークだけど後の半分は本気なんだよ」

私は驚いて彼を見る。少し照れながらとても素敵に笑った彼がそこにいた。

「僕は君と居ることがとても嬉しいんだ。何故だろう。まだ出逢って二日しかたっていないのに、僕は君を愛し始めている」彼はそう言うとうつ向いた。

私はどうしていいのかわらなくなって歩き始めた。

彼が追って来る。そして隣に並ぶと、言った。

「気を悪くした？」

私は立ち止って首を横に振る。

「でも、とてもとまどってる。私、今自分の事だけで精一杯なのよ。それに私に魅力があるなんて思えないし、何よりもこんなふうに男性から打ち明けられたことなんて初めてなの。

自分があなたみたいな素敵な男性に愛されるなんて、どうしても信じられない」

「僕はとても正直に言ったつもりだ。僕だって何故こんなに君を求めるのか不思議だ。でも少しずつ思い出しかけてる。君のそばに居るときと思い出すはずだ。そんな気がするんだ」

私は尋ねる。「思い出すって、何を」

「それもよく判らない。でも何かを思い出しかけている。そしてそれはとても大切な何かなんだ」

私は笑顔を作って彼の顔をのぞき込んだ。とても真剣な顔をしていた。だまされてもいいか。そんなふうに思えた。私は彼の手を取って言った。

「散歩しましょう。とっても気持ちのいい朝だわ。恋人ごっこだったのよね」

彼が私の手を握り返す。そして言った。

「はい。夕べは夫婦でもあったんだよ」

私は首を傾げる。

彼が言う。「ほらチェックインの時に」

私は笑って言った。「そうそう。じゃあもっと仲良くしなきゃ」

彼は笑って私を抱き寄せた。私の胸がドキッとした。私はびっくりして抵抗した。

彼は笑って言う。「ヨーコは言うだけなんだから」

私は胸の高鳴りを知られないように走った。彼は捕まえようと追い掛けてくる。本当にテレビドラマで見た恋人同志のようだった。

結局お城の中には入らずに、周りを散歩した。

とても静かな池があった。私達はその池の端に腰を下ろして水鳥を見ていた。

彼は何も言わずに冷たくなった私の手を暖めてくれる。私は指先から彼の暖かさを感じていた。彼は黙ってとても長い時間そうしていた。

私もしばらく黙っていたが、だんだん寒くなって言った。

「ねえ、あなた寒くないの？」

彼はふっと我に返ったように言った。「ごめん、ちょっと考え事してたみたいだ。車に戻ろう」そう言って立ち上がった。

車に戻ると彼はエンジンを駆け、ヒーターの調節を最大にした。10分ほどで車内は快適な温度になった。私はコートを脱ぎ、後ろの座席に置いた。

彼が言った。「パリへ戻ろう」

「あなた全然お城を見ていないわよ。構わないの？」

「構わない。それより君のパリに来た目的を果たさなければ」

私は考える。私は何をしにパリへ来たんだろう。それを見透かしたように彼が言う。

「美術館へ行ったり、ショッピングをしたりしたかったんだろう？」

私は思い出したように頷いた。でも、そんな事はどうでも良いような気持ちになっていた。そんな私を見て彼は微笑んだ。そして車を発進させた。

私は流れて行く景色を見ながら日本に居た時の自分が段々遠くなるのを感じていた。

心に傷を負って一人でパリに来た。そして中国人の龍使いと車に乗っている。神はその為に私をパリへ導いたのだろうか。

私は何もかもを認めてしまおうと思っていた。そんな不思議なことでも、常識では考えられないことでも、逆らわずに認め受け入れてしまおう。

どんな事があっても失うものはこの命一つしかないんだ。この命を失ったところでまた生まれ変われば良い。

何故かその時私にはそんなふうに思えた。昨日の私と、今日の私は違うのだ。肩に力を入れなくても、背筋はちゃんと伸びることを知ったのだから。

中国人の龍使いではなく、彼と居ることでとても安らいでいる今現在の自分を信じよう。
私はそう思った。

私が尋ねる。「エディ。お爺様は電話でなんておっしゃったの？」

彼は驚いたように私を見た。

「あなた、夕べも今朝も電話してたでしょう？」

彼は頷くと言う。「祖父は、愛が鍵だと言った」

私は軽い眩暈を覚えた。漠然としている。いや漠然とし過ぎている。

彼は続けた。「祖父はお前の中にどれだけの愛があるのか、その愛を、龍を背負った女性にどれだけ伝えられるのか、後はお前が考えればいいと。お前の父はそれが出来なくて早く死んだんだと言った」

私は尋ねる。「あなたのお父様は、龍に興味が無かったんじゃないの？」

彼は頷く。

「そう僕も聞いていた。しかし本当は違っただろう。店の女と出来たんじゃないで、龍に引きずり回された挙げ句に力尽きて死んだらしい。今朝になって始めて聞いた。祖父も母もそのことを僕に隠していた。それで僕のことをとっても心配している」

私はしばらく黙って窓の外を見ながら考えていた。そして考えをまとめると言った。

「エディ。何も無かった事にしましょう。私達は出逢わなかったの。私はここで車を降りて鉄道でパリに戻るわ。そしてホテルをチェックアウトするの。そうすれば一昨日の夜からの事が全部夢になる。

すべてを振り出しに戻すのよ。私達は長くて楽しい夢を見ていたの。でも目覚めるといつもと何も変わらない毎日よ。どう？ 私の提案。素敵でしょう？」

エディはそれには答えずに、車を道の端に止めた。サイドブレーキを引き、両手でハンドルを握り締め、その手に頭を付けた。しばらくそうしてから頭を起こすと両手でハンドルを大きな音を立てて思いっきり叩き、私を見て声を荒げて言った。

「ヨーコ！ 君はまた僕から逃げ出してしまうのか？」彼の顔に真剣な怒りの表情が浮かんでいた。

私は怯まずに尋ねる。「また逃げ出すってどう言う事なの？」

彼は私の両肩をつかんで大声で言った。「僕はずっと君と出逢うためだけに生きて来たんだ。こんな地球の反対側までやって来て、やっと君を見つけ、こうして手を触れられる近さ迄辿り着いたと言うのに、君はまた逃げてしまうのか？ 僕にもう三十年も君を探せと言うのか？」そう言う目には涙を浮かべた。

私はそんな彼に驚いて何も言えない。彼は少し声を押しさえて続ける。

「君は生まれ変わる前にもそう言って僕から逃げたんだ」そう言うと、私の肩を離し車のシートに体をあずけた。

今度は私が体を乗り出して彼の方を向いて言った。「どう言う事なの。生まれ変わる前って。それって前世の事？」

彼は目を閉じて言う。「あの時は君が中国人で、僕が日本人の僧だった」思い出すように一言一言ゆっくりとしゃべる。いや、本当に思い出しながらしゃべっていたのだ。私もシートにもたれて聞いた。

「僕が船で中国に渡り、仏教を学んでいた時に君と出逢ったんだ。

君は大きな美術商の奥さんだった。

僕が君の龍を見つけた時、君は僕に泣いて頼んだ。そっとしておいて、今の幸せを壊さないでと。

僕にはどうしようもなかった。だって君は人の妻だったし、僕はただの修行僧だったんだ。

それで僕は山に籠り、死ぬまで君を諦め切れずに経を読んで暮らした。

違う！ 今、思い出した。あの時の僕は龍なんかじゃ無く、たおやかで美しい君を愛していたんだ。

君の龍はただのきっかけでしかなかった。だから僕は今、会ったばかりなのにも関わらず、君をこんなに愛してしまうんだ。

あの時の僕は、君への思いを断ち切るためにあらゆる苦行を試したけど、結局だめだった。忘れられなかったんだ。

それでまたこの生でも君を探していた。そしてやっと見つけたのに・・・」

彼は言葉を切った。彼はその後何も言わずに車を発進させた。

私は窓の外を流れ去る風景を見ていた。私は少しづつ知らないことを思い出しかけていた。今の自分の思いが入り込む余地もなく、私は話し始めていた。

「私はあの時の主人にあなたとの仲を疑われて家を出たのよ。そして船に乗ったの。なぜかしら。その辺りのことがまだ思い出せない。

とにかく日本へ行く船に乗ったの。でも辿り着けなかったわ。そう、陸が見えた所で死んでしまったから。日本に辿り着いたのは私の死体だけだった。何だかとても辛くて悲しかったのを覚えている」

彼は片手をハンドルら離すと私の手を握った。私は涙が溢れだしていた。誰かが私の体を使って泣いていた。私の知らない誰か。

私は窓の方を向き、彼に見られないように涙を拭う。そして彼に尋ねた。

「あなたそれをいつ思い出したの？」

彼は私の手を握ったまま答える。「さっき、君の手に触れながら水鳥を見ていた時に。ずっと昔から見続けていた夢の断片が一つに繋がって、それが確信に変わった。君に触れていると色んな事を思い出す。今、あの時の君の名前を思い出したよ」

私は彼をのぞき込む。

「君の名前はフォン。そして僕の名前は龍山だった」

『フォン』それが私の中で涙を流した者の名前なのか。

ヨーコとフォンが尋ねる。「それであなたはどうするつもりなの？」

彼は自信に満ちた声で答えた。

「今度こそ君を愛し、君の龍を目覚めさせる」

私は大きく息を吐いて、言った。

「そこに危険が待っていても？」

彼は大きく頷いた。

車はどンドンバりに近付いていた。

再びパリ

パリに着いたのは三時を少し回った頃だった。

各々の想いの中において昼食も忘れていた私達は、目についたカフェに入り、ハムを挟んだパンと暖かくしたレモンジュースを頼んだ。窓から、道行く人を見ながら堅いパンをかじる。穏やかに晴れ渡った空。柔らかな日差し。肩を抱き寄せ、口付けをする恋人同志。コロコロと走る子供達。犬を連れて散歩する初老の婦人。龍の事や前世の事をのぞけば、とても平和な気分だった。

食事を終えた私達は、クリスマスの飾り付けで華やいだ雰囲気の百貨店へ行き、ショッピングを楽しむ事にした。彼が連れて行ってくれたのは、オペラ座のすぐそばにあるギャルリ・ラファイエット。

入口を入ってすぐの所にアクセサリー売り場がある。私はそこで色を付けたガラスで出来たアクセサリーを選ぶ。それらはとても細かくカットされていて、光の入り方でたくさん表情を見せてくれる。その表情はジャンク特有のカジュアルさを持っていて、今の自分にとってもピッタリな感じがした。それでネックレスとイヤリングを同色のもので、赤と緑の2セットを買った。彼はそれに対しては何も言わなかった。その後私はパリに来る前から欲しかったコートを見る為に洋服売場へ向かった。

グランドフロアーから天井までの大きな吹き抜けのスペースに、驚くほど大きなクリスマスツリーが飾られている。それを見ながら二人でエスカレーターに乗る。エスカレーターの上でも恋人達は抱き合ってキスをしている。いつも他人は幸せそうに見えるものだ。私はそんな風に思いながら、とんでもなく大きなクリスマスツリーを見上げた。

沢山コートが並んだ洋服売場で、私は気に入った物を何点か選び出す。洋服を選ぶというのは、自分をどう演出するかということだ。一番初めに手に取ったのは、いつもの自分に良く合うものだった。仕事を持って、それで生計を立てている、世間で言うキャリアウーマン風のキャメル色のダブルのコート。しかし、今の自分にはそれは少し印象が強すぎるように思えた。離婚して、一人旅をしているような女には、それなりの服がありそうな気がしたのだ。

次ぎに選んだのは、真黒のカシミアのシンプルなテーラードコートだった。しかし、それでは余りにもそれらし過ぎる。

私は次を選んだ。色はオフホワイト。とても高価なホワイトカシミアで織られた生地をふんだんに使い、ドレープの美しいものだった。しかし値段を見ると、それはもう一度パリまで来れるだけの値段だった。思い切ってカードで買おうかと迷ったが、今の自分にそのコートを着るだけの価値があるとは思えなかった。エディはそのコートをとても気に入っているらしく、とても熱心にそれを見ていた。

私はまた違うコート選ぶ。そして見つけ出したのが、真っ赤な、それも日本では見たこともないタイプの、そう、ちょうどエディの借りたシトロエンの赤と同じ色のロングコートだった。私はそれを試着してみた。それはとてもカッティングが良く、重さを感じさせないように作られていた。それを着て鏡に映った私は、忘れてしまっていた若かった頃の自分自身を思い出させてた。少し頼りないけれどコケティッシュで、元気一杯だった頃の私。それに値段も、物の割には手頃だった。

私はその真っ赤なコートを買うことに決めた。それを彼に告げると「とっても元気に見えるよ。よく似合う」そう言って喜んでくれた。彼は店員にそれ返着ていたコートを包ませて、新しいコートを着て行くように言った。

買ったばかりのコートを着て外に出ると、世界が少しだけ変わったような感じがした。そして自分も少しずつ変わっているようでもあった。

エディは本当に細かいところまで気がついて、私はそこが言葉の通じない国であることすら忘れそうになっていた。彼にエスコートされているととてもリラックス出来る。

欲しかった物を買ってしまうと私は急に疲れを感じ、「私、ホテルに戻りたい」と彼に言った。彼はそんな私に微笑んで頷くと、車でホテルまで送り届けてくれた。

車の中で彼が言った。「何故白いのにしなかったの?」「バツイチで傷心旅行のオバサンには似合わないもの。あれはもっと元気な時に着るべきコートだわ。それに今贅沢しちゃうと後で大変な日々が待っているのよ」「だったら僕がプレゼントしたら、着てくれる?」「いいえ、きっと着ないわ。洋服ってね、その時その時の自分を演出するために着るものなのよ。今の私は白のコートを翻して歩く気分じゃないもの。本当は黒いコートで沈んでいたい気分なの。でも、それじゃあんまりでしょう?それで少し元気を出そうって思ってこの赤いのにしたの。洋服に自分が負けちゃったらみっともないでしょう?」「確かにそうだね。君のその、洋服に対する価値観ってとっても素敵だ」「どうもありがとう」

彼はホテルの玄関で私のルームナンバーを尋ねると、「後で一緒に食事しよう」と言って、一人でまた車に乗って出て行った。

私はフロントでキーを貰い部屋に戻った。

冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターを飲み、テレビのスイッチを入れ、靴を脱いでベッドの上に寝ころぶ。そうして小一時間程、意味の判らないテレビを見ながら残してきた仕事の事や、別れた夫の事など取り留めもなく考えていたが、途中で面倒になって「やーめた」と声に出して言ってみた。そうすると本当に頭の中から、面倒なことを追い出すことが出来た。

私は起き上がってデスクの引き出しを開け、備え付けの絵葉書を出して、長く会っていなかった友人達に離婚したことや、一人でパリに来ている事などを綴った。なるべく元気そうな文面で、辛そうに思われないように注意しながら書いた。三人分書いたところでペンを置いてポーッとしているとドアがノックされた。

「はいっ」私は答えてチェーンを架けたままドアを開けて見た。エディがちょっとすました笑顔で立っていた。

私はドアを閉めてチェーンを外すともう一度ドアを開けエディを招き入れた。

彼は大きな箱を持って入って来た。「ヨーコ。君にプレゼント。ドレスなんだけど気に入って貰えるかな？」私は尋ねる。「どうして？」「明日これを着た君と一緒にオペラを観に行こうと思って」私は恐る恐る箱を開けてみた。有名なデザイナーズブランドのドレスだった。私は驚いて彼を見る。彼は屈託の無い笑顔で言った。「着てみてよ。きっと良く似合うから」私は慎重にドレスを箱から出し、それを拵げてみる。素材は深い緑色のベルベットで、シンプルなデザインだ。ミディー丈で、黒いシルクのチャイナカラーがこのドレスのポイントになっている。

「ヨーコ、早く着てみてよ」エディにそう言われて、私はバスルームでそれを着た。簡単に髪をアップにし、何かの時の為にとと思って日本から持ってきていた黒いハイヒールを履いて彼の前に立つ。彼はそれを見てとても喜ぶ。「とても綺麗だ。シンプルな物にして本当に良かった。君の美しさが一段と引き立つよ」私は鏡に写る自分が信じられなかった。「ありがとう。でも本当に良いの？」彼は笑って頷く。「はい。君の為に選んで着たんだからね。そうだ、さっき買った緑のガラスのイヤリングを付けるといい」私はバッグの中から包みを取り出して、それを付けてみた。彼は何度も頷きながら私の周りを回って「とっても良いよ」と言って誉めてくれた。彼の表情からは本当に喜んでいるとしか感じられなかった。私はもう一度丁寧に礼を言った。そしてそのことに関してあまり深く考え無いことにした。

「おなかすかない？」彼がそう言ったので、髪を下ろしカジュアルな服に着替えて食事に行くことにした。私はフランス料理に飽きてきていたのでエディにそう言うと彼は「じゃあチャイニーズはどう？」と言った。私はそれに賛成した。

ホテルから2ブロック離れた所に在る店に、彼は案内してくれた。店に入り、席に付くと彼は、店の人と中国の言葉で長い問話していた。話が終わると店の人が奥から中国のお酒を持って来た。どうもこのお酒のことを話していたようだ。それは古いビンに入った餡色に輝くお酒だった。グラスに注いでもらって口に含むと、とても自然な甘さが口の中に拵がった。それがとても良いお酒だと言う事が判った。彼が言うには、それは長い間寝かせた中国のお酒で、とても大切に特別の時に飲むものらしい。

「今日はそんなに特別な日なの？」私の問には答えずに彼はグラスを高く掲げて言った「前世からの巡り合わせに乾杯」私もグラスを持ち上げて言う。「今度は逃げないわ」私がそう冗談で言うと、彼は大きく頷いた。そしてそれを一気に飲み干した。

「ヨーコ、この酒は普通、結婚式の時に飲むものなんだよ。僕の国では女の子が生まれたら、お祝いの餅米でこれを仕込むんだ。そしてそれをその娘がお嫁さんに行く時に飲むんだ。だからこれは君の年と同じ位経ったものだよ」私は彼の唐突な話に面食らっていた。彼は真剣な顔で続けた。「これが僕達の結婚式かも知れない」

私は何と答えて良いのか判らなかった。多分とても困った顔をしていたのだろう。彼はタイミング良く運ばれてきた料理を私の為に取り分けると「冗談だよ。ほら食べて。こ

れ美味しいから」そう言ってお皿を私にくれた。

後で思うと本当にあれが結婚式だったのかも知れない。でもあの時私は、彼の冗談だよって言った言葉にホッと、救われた思いがした。私は曖昧に笑って見せ、その料理を口に運んだ。とても複雑な味がして、確かにそれは美味しかった。

料理は次から次へと運ばれて来る。彼は一つづつ説明をしながら取り分けてくれた。

それは聞いたこともない茸だったり、話に聞いただけで食べたことのないようなものばかりだった。しかし食べてみると、どれもがとても食べやすく料理され、中国の歴史の重さを感じさせるものばかりだった。

二人は本当に良く飲み、良く食べた。このまま彼と付き合い続けると十キロぐらいはすぐに肥ってしまうだろう。それでも私はあまりの量の多さに最後の一皿にはとうとう口を付けることさえ出来なかった。それにしてもエディは私の倍以上飲み、そして食べたが、全く変わることなく平気な顔をしていた。

二人は食べながら沢山の事を話した。そして他愛も無いことで良く笑った。私が別れた夫と一年間で交わした言葉や、見せた笑顔よりずっと多い様な気がする。何百年もの空白もこのペースで行けば一ヶ月で埋まってしまおうだろう。しかし私達には後四日しか残されていない。四日間でもどこまで埋まるのだろうか。その時私の龍はエディの言うように目覚めるのだろうか。それよりも、本当に龍などと言うものが存在しているのだろうか。私には判らなかった。それにどう言う心理なのか、私達は龍の話の避けている。こんなに色々な事を沢山話すのに、龍の事にだけは触れようとしない。彼が言うには、私達は龍で繋がっているのに。帰るまでに話す事が有るのだろうか。やはり私には何も判らない。自然に任せよう。私は諦めてそう思った。

しかし、彼と話しているうちに私は彼の言う龍を受け入れつつあった。ただ、それは「そんな事があってもいいか」と言う程度ではあったが。

食事を終えて、ホテルに戻ると彼は、自分の部屋から昨日のオイルと、髪の毛のトリートメント剤を持って来てくれた。彼は私のシャンプーを手伝い、丹念にトリートメントを塗り込んでくれる。そして昨夜と同じようにオイルでマッサージをしてくれた。

私はとてもリラックスしていた。なんの不安もなく、ただ何もかもを彼に任せ切っていた。彼はそんな私を当たり前のように受け入れてくれていた。受け入れられている事が、生まれてはじめての安定感のようなものをもたらしていた。これが彼の言った愛なのだろうか。だったら確実に私は愛し始めているようだ。しかし彼は一体どうやって龍を目覚めさせると言うのだろうか。

お風呂を終えて髪を乾かし終わると、信じられない程私の髪は蘇っていた。

彼が微笑んで言う。「中国四千年の歴史だよ」

私は壁に吊るした彼の選んだドレスを見て尋ねる。「あなたはどのようにしてこのドレスを選んだの？」彼が少し考えてから答えた。「ヨーコのことを思うと、深い海の底に沈んでいくような感じがするんだ。どんどん沈んでいく。不安感と、母の中へ帰っていくような安堵感が入り交じって入るような感覚。それでこの深い海のような緑にした。そして、ヨーコにはゴテゴテした飾りは必要ない。なるべくシンプルで、君の内側にあるも

のを引き出せるようなものがいって思えたんだ。それに少しチャイニーズだろう？」

「ええ。とっても素敵よ。でも私、ドレスアップすることなんて滅多に無いから、これを着てみた時にとっても驚いたわ」「何に驚いたの？」「だって見た事無い人が鏡の中にいるみたいだったのよ。私の知らない私の姿かしら？」「僕には初めからその姿で見えてたけど」「じゃあ、自分で思っている自分と、人が見ている自分の間には結構ギャップがあるのかも知れないわね」「そうかも知れないね。僕は君の目にはどう見えているんだろう？」私は正直に答える。「そうね。とても繊細で、壊れやすい精神を持っているように見えるわ。ルックスは申し分無く美しいけれど、それはあなたの育ちの良さみたいなものを反映しているのだと思う。とても優しいところと、とんでもなく冷たいところを合わせ持っているようにも見えるわね。危険な男だわ」「ヨーコにとっても危険なの？」「そうね。でもあなたが私に対して特別な思いがあるせいかな、私に対するあなたはちょっと違うわね。とっても不思議な事に、あなたと会ってから、今の今まで一度も危険だって思わなかったのよ。私のそう言うのを感じる部分が故障していたのかも知れないわね」「いや、多分正常に作動していたんだと思うよ。だって、僕は一度も君に危害を与えようなんて思わなかったもの。命よりも大切な人だからね」私は首を振って言う。「さあ、それはどうかしらね。私が思うに、命より大切なのは私じゃなくて、あなたの龍じゃないかしら？」「でも、僕はヨーコを愛しているんだよ」「そんなの信じられないわ。だって私はまだあなたを愛して居ないんですもの。これからだって愛せるかどうかなんて判らないわ。ただの旅先で知り合った素敵な香港人として思い出の中に残るだけの人かも知れないもの」「厳しい意見だね。でもそれが常識的な意見だ。ヨーコが常識的な人だって言うのがよく判ったよ。なのに僕の龍や前世の話に付き合ってくれてるんだ。どうもありがとう」「どういたしまして。でもね、正直に言うと、何だか良く判らなくなっているのよ。世間の常識と、あなたの言う龍や前世の話の間で、何だか揺れ動いているの。でも、今の私にはそれをしっかり考えるだけの思考力がないのね。心も頭も目一杯疲れていて、実害さえなければどっちでもいいかって言うような投げ遣りな感じかも知れない」「そうだね。辛いことがあったばかりだし、僕の話は余りにも突飛だもんね。ごめんね。でも、僕は君に危害を与えたりしないから。それに君を傷つけたりも決してしない。約束するから。だからもう少し僕に付き合っただけ。パリにいる間だけ」「そうね。そういう約束だったわね。それにあなたと居るととても安心できるの。とっても不思議だわ。知り合ったばかりの男の人とこうして狭い部屋にいても、安心して居られるっておかしなことよね。でも、ずっと昔からの友達みたいな感じなのよ」「はい。生まれる前からの知り合いだからね」「また、判らなくなりそうよ」「ごめんごめん。疲れてるんだ。僕はそろそろ退散しよう。ゆっくり眠るといいよ」そう言うと彼は立ち上がった。「そうね。そうするわ」部屋を出る時に彼が言った。「もし良かったら僕の部屋に来ない？もう少し広いし、ベッドルームも二つ有るから」私は答える。「狭い方が落ち着くのよ」彼は微笑んで頷くと言った。「おやすみなさい」私も微笑んで言った。「おやすみなさい。今日は本当にありがとう」「どういたしまして」彼はそう言うと部屋を出て行った。

私は満たされた思いで眠りについた。

夢を見た。彼が黄色い僧服を着て私の元へ托鉢にやって来た。顔も年かっこうも違うが間違いなくそれはエディだった。私は食べ物と少しのお金を彼に渡した。彼の目は私をずっと見ていた。私はみられる恥ずかしさにうつ向いている。しばらくして彼は私に向かって言った。「龍女だ。君は龍を背負っている」そう言って私の前にひざまづいた。私は他人の目を気にして彼を近くの木陰に連れて行った。

その時の私は、自分の龍について知っていた。彼にそれが判る事の方が不思議だった。彼は自分は日本に住む龍の一族だと言った。彼は私の龍を解き放とうとしたが、私の龍は夫の龍使いによって縛られていて動けなかった。あの時の夫が龍使いだったのだ。

しかし、夫は龍を封じる事だけしか考えていなかった。日本の僧は龍を解き放とうとしていた。私は恐ろしかった。それで彼に言った。「お願い私をそっとしておいて。今の幸せを壊さないで」そう頼んだ。彼は私の施したものを捨てて走り去った。それからしばらくして夫は私を店の者が誰も居ない部屋に呼び付けた。夫は嫌がる私を木のテーブルのような物に縛り付け、口の中に布きれを押し込むと小刀を取り出し、私の内腿を切り裂いた。そして何かを私の体内に押し込むと針と糸で縫い合わせた。私はあまりの痛さに気を失った。それが私の龍に対する封印だったのだ。夫は傷の癒えないままの私を船に乗せた。その船の上で私は、傷が化膿し、高熱を出し、苦しみ抜いた挙句に、日本を目の前にして死んだ。そして私の死体はどこかの海辺に流れ着いた。それを見つけた村人達は可愛そうにと行って私を丁寧に葬ってくれた。

その後もう一度生まれ変わっていた。戦争中の事だった。真っ暗な森の中を一人で歩いていた。とても寒くて疲れていた。そして、敵の兵隊に撃たれて死んだ。まだ十八歳だった。そして眠り続ける龍を背負ってまた生まれ変わった。それが今の私だった。

その後取り留めのない夢を見た。学生の頃恋をしていた男の子が出てきて言った。「君は僕が居なくても大丈夫。でもあいつには僕が必要なんだ。だから僕の事は忘れてくれ」そう言われて私はひどく傷ついていた。

それから私は別れた夫と旅行に行っている夢も見た。そこは知らない場所で、私がお風呂を上がって部屋に戻ったら、夫が知らない女性と差し向かいでお酒を飲んでいて。それを目の当たりにして私は驚き、立ちすくんでいた。すると夫が私の方を向いて、何事もなかった様な顔で言い放った。「俺はお前に飽きたんだ。こいつと結婚することにした。二度と俺の前に現れるな」そして表情一つ変えずに私に荷物を投げ付けた。私はまたひどく傷ついていた。

目覚めた時私は泣いていた。全くひどい夢だった。あんなに満たされた思いで眠りについたのに余りにもひどい気分だった。私はベッドの中でしばらく泣いた。しかし泣いている内に段々馬鹿馬鹿しく成ってきて私は起きることにした。

ベッドを下り、シャワーを浴びると、嫌な夢は完全に吹き飛んでいた。私の新しい一

日の始まりだった。

私は身支度を整え、化粧をし、ホテルを出た。

またサクレクールへ向かって歩いた。白い息を吐きながら、モンマルトルの坂を登る。まだ観光客の来ない時間。

礼拝堂の中に入り頭を垂れた。頭の中には音もなく徐々に白い光が充満し、そして最後には心がフッと浮き上がるような感じがした。それはまるで天使が翼を拡げて舞い降りてきたかのようだった。私は何も考えずにしばらくその光を感じ続けた。

周りでも同じように神に祈っている人達があった。きっとその人達も天使に抱かれているのだろう。私はその人達の邪魔にならないように、音を立てないようにして外へ出る。

外は初めての日のように晴れ上がってはいなかった。まだ時間が早過ぎるのだ。白い霧が晴れ、真っ青な空が出るまではもう少し時間がかかる。

犬を散歩させる人達とすれ違いながら石畳の坂を下る。そして長い階段を下りたところで開いているカフェを見つけて入った。

窓際の席に座りテ・オレを頼んだ。運ばれてきた紅茶は、冷たくなった私の手を暖め、そして身体の中からも暖めてくれた。窓の外を通り過ぎる人達は一樣に暖かそうなコートに身を包み白い息を吐いている。枯れ葉を集める清掃車も通った。みんな生きていた。

私は今までの自分の人生について何となく考えた。ただ少し気が強いだけで他に何の取柄もない女だ。美しいわけでもなく、才能があるわけでもない。ただ生まれてきてしまったから生きている。そんな風に思っていた。しかしエディは私に龍が居ると言う。それは特別な状況だった。

私は今まで一度も特別であったことなどない。特別出来る訳でもなければ、特別出来ない訳でもない。普通に学校に行き、普通に卒業した。普通に仕事をし、普通に恋愛をして結婚した。そして離婚が普通だったかどうかは分からないが、今の時代そんなに特別でもないと思う。しかも原因が夫の浮気と来れば、それはやはり普通の状況だろう。

特別を望んだ事もなければ、特別に望まれた事もない。全然だめで無ければ、少し駄目なぐらいは我慢した。「まあこんなものでしょう」と思えば、それは大満足に値した。そんな人生だ。今になって君は龍を背負っているんだと言われても、どうしようも無い。そんなのは特別中の特別で、私には全く関係のないことだ。

彼は一体何を考えているのだろう。しかし彼が作り話で私の気を引いたところで何になると言うのだ。お金持ちで、知性があって、飛び切りハンサムときている。私なんかよりいつも特別な人生を歩んでいる女性だって、彼は簡単に手に入れるだろう。なのに彼は私に執着を見せている。私をととても丁寧に扱い、喜ばせようとしている。

彼の話信じるしか他に彼の行動を理解出来なかった。と言うことは私に龍が付いていると言う事と、前世での因縁を認めるしか無いと言うことだ。

特別すぎる。それはきっと特別に慣れた人でも更に特別な状況だろう。しかし男の人が言い寄って来る事すら私にとっては特別な状況なのだから、後の特別が物凄く特別でも「まあいいか」。

それ以上考えることを放棄した。きっと同じ所をぐるぐる回るに決まっている。

私はギャルソンを呼んで精算し、地下鉄の駅まで歩いた。

地下鉄に乗ってルーブル美術館へ行った。

ガラスのピラミットを下りて行くと、そこはショッピングセンターになっていた。ハンバーガーショップで朝食を取り、美術館に入った。

朝早いせいか人影もまばらで、ゆっくりと見る事が出来た。

死んでから百年以上も経たないところには飾られない。時間の先例を受けた美術品ばかりだ。

私はたっぴりと時間をかけ、コツコツと足音をたてながら観て回った。

百年以上もの間人々に美しいと思われ続けただけあって、どの作品からも安定感が漂っていた。

私が初めてここに来た頃、そうまだ入口がピラミットなんかじゃなかった頃の事だ。裸の男が立て膝で横向きに座っていた絵が在った。私は何かとても引きつけられるものを感じて長い間その絵の前にたたずんでいた覚えがある。しかし今回は見つけることが出来なかった。確かあの絵には、孤独が描かれていたのだ。

百年という時間が美術品にとって長いのか短いのかは判らないが、そう言う価値観が在っても良い様な気になっていた。

お昼を少し回ったころ、ルーブルを後にした。

建物を出てセーヌ川沿いに歩く。

風は冷たかったが日差しはとても暖かく、散歩にはちょうど良い日和だ。カールゼル凱旋門の所からチュルリー公園に入り、砂利を踏みしめながら歩く。

途中でベンチに座って煙草を吸った。

そう言えばエディは龍が目覚めると私に危険が及ぶと言っていた。それから私を守るのに自分の命では足りないかも知れないとも。

私はそれについて考えた。

その前に取敢ず龍を受け入れてしまう必要があった。私は声に出して言うてみる。

「私には龍が居る」 少し落ち着いたような気がした。そしてもう一度言うてみる。

「エディは私の龍を必要としている」 そこから考え始める事にした。

タベの夢は本当だったのだろうか。確かにロワールから帰る車の中でエディが言ったのを聞いているうちに思い出した事と繋がっていた。転生などと言うものが本当に存在するのだろうか？ 肉体が減びても、魂だけで存在することなど可能なのだろうか？ 今まで生きてきたことのすべてを私は記憶しているのだろうか？

いや、そんな自信は無い。なのに、生まれる前に生きていたことの記憶があるなんて馬鹿げている。

しかし、私は思い出していた。彼の話信じただけでも、理解したのではなく、私が経験したことを思い出していたのだ。

大体において思い出すということは、普通忘れていたことを何かのきっかけで起こるのだ。

忘れていた時にはそれは存在しないのと同じ状態だ。そして、何かのきっかけで思い出した時には、確かにそれは存在する。

それを新しく学んだ時の感覚と、昔知っていたことを思い出した感覚とは全く違うものだ。

もしかしたら私は生まれてからこれまでのことを、すべて記憶しているのかも知れない。ただ、思い出すという行為が巧く出来ないだけなのかも知れない。

もし本当に前世というものがあり、私の魂自体がそれを経験していたのなら、エディというきっかけによってそれが思い出されても不思議ではないのではないだろうか。

そうすると魂の記憶装置というものは、膨大な容量を持っている事になる。何故なら、転生を続ける限り無限に近い記憶を刻み続けなければならないからだ。

この頭の中の脳という限られた容量でそれを記憶することなど不可能だ。

すると魂というものはこの脳の中に存在するわけではないと言う事になる。

もしかすると、魂は肉体とは関係のないところにも存在しているのではないだろうか？

無限に記憶し続ける大きなマザーコンピューターがあり、今のこの肉体というのは、端末機に過ぎないのではないだろうか？ 端末機が経験したことをマザーコンピューターに記憶させてあるのではないだろうか？ それで、何かのキーワードでマザーコンピューターから情報を引き出すことが出来る。

それがエディという存在によって思い出された私の過去生の記憶なのかも知れない。

確かに私は生まれ変わって来た。少なくとも今の私にはそう思うことが一番納得の行く考え方のようだ。

そっと腿に触れてみた。今も腿を切り裂かれた痛みを覚えている。夢の中だけの事ではない。そんなふうに思えた。

もし生まれ変わってきたのなら、何故私はここに生まれ変わって来たのだろう。

魂に意志があるのだろうか？

人とは前世でやり残したことを成し遂げるために生まれてくるのだろうか？

ならば、肉体を持たない魂の存在とは、神の領域に重なってくるのではないだろうか？

神の意志によって生かされているという考え方と、自分自身の意志によって生きているという考え方のちょうど中間が、肉体を持っていない時の自らの魂によって決められた生き方なのだろうか？

判らない。

結局私はエディに出逢った。

転生を認めるならば、そのためだけではないにせよ、エディと出逢う為にも私は生まれ変わったと言う事になる。

ならばこれは偶然ではなくて必然だったのだ。

その為に危険が及ぶとしても、その為に生まれてきたのなら仕方のない事なのかも知れない。

それでエディの言う危険に巻き込まれて死んでしまったら、私はまた生まれ変わるのだろうか？

きっとそうに違いない。今は死ぬことが恐ろしいが、もしかしたら生まれる事の方がもっと恐ろしいのかも知れない。何となくそんな気がした。

やはり思考が閉じている。エディなら良い答えを出してくれるだろうか。ただ漠然とではあったが、もっと思い出せば先に進めるような気がしていた。

私の知らない事を思い出す。前世の記憶が蘇るのはそんな感じだった。フォンと龍山の話の思い出した時、私は確かに知らない事を思い出していた。

それを知ったのではなく思い出したと言えるのは、私はその事実だけではなく、それに付随する風の感触や、光の色なども一緒に思い出したからだ。

もしかしたら離婚のショックで、私の頭はおかしくなっているのではないだろうか。

エディに聞いたことが変になった頭の中でシャッフルされて他の経験とそれらがすり変わり思い出したように感じているだけなのかも知れない。きっと休養が必要なのだろう。

答えを見いだせないまま、また歩き始めた。

コンコルド広場の手前にオレンジリー美術館がある。入口を入りチケットを買った。コートを預けて中に入る。私は途中で思い付き、ホテルに電話してエディを呼んでもらった。しばらく待つとエディが出た。

「もしもしエディ？」私が言った。「ヨーコかい？ 何処へ行っちゃったの？ 心配してたんだよ」彼の声は本当に心配そうだった。私は明るい声で言う。「大丈夫よ。今オレンジリーに居るから」「すぐに迎えに行くからそこを動かさないで」「冗談でしょう？ 一人で来たんだから一人で帰れるわよ。ただ今夜オペラに連れてってくれるって言っていたから、何時頃戻ればいいのかと思って電話しただけよ」「6時頃用意を済ませて部屋にいてくれたら迎えに行くよ。でも本当に大丈夫なの？」「大丈夫だって。これでももう四回もパリに来てるんだし、電話だってちゃんとかけられたでしょう？」

「分かった。でも気を付けてね」「ええ じゃあ6時に」そう言って電話を切った。私は一人で笑った。誰かが心配してくれているって結構気持ちの良いものだった。

まず二階に上がり、印象派の絵を観た。ルーブルで観たような安定感はないが、若い弾むような心がそこに描き出されていた。

ルーブルが老人なら、ここの絵は青年なのかも知れない。この絵達も百年経つとあんなふうになるのだろうか。もし、ここにある絵が百年後のある日ルーブルに入ることになったとしたら、きっと色んな経験を経た老人として迎えられるのだろう。その中の何枚かの絵がルーブルの壁で「オレ、なんか場違いなところに来ちゃったよ」などと戸惑っているのを想像して、私は思わず微笑んだ。

それから私はゆっくりと階段を下り、睡蓮の間に入る。

陽光に照らされた蓮池がぐるりを取り巻いている。中央の椅子に腰掛けると、まるで蓮池の真ん中にいるような錯覚に陥る。たくさんの種類の光が降り注いでいる。

モネはきっとこの光を描きたかったのだ。光を描くためにこんなに沢山の睡蓮を描いたのだ。

私は暖かな光を感じながら何も考えずに長い時間そこに座っていた。何人もの人が私の前を横切っていく。その人達にも睡蓮に当たっているのと同じ光が当たった。睡蓮と同じ色彩を帯びた人達が何人も私の前を通り過ぎて行った。

オレンジリーを出たのは3時を少し回った頃だった。

私は目についたカフェに入り軽い食事をした。食事を済ませると少し疲れを感じた。

オルセー美術館にも行く予定だったが止めにしてタクシーを拾い、ホテルに戻った。

部屋に戻ると私は、顔を洗い、着ていたものを脱いで、ベッドに潜り込む。落ちる感覚と同時に眠りがやってきた。

目覚めた時、もう日は暮れて部屋は真っ暗だった。

私は手探りでスタンドのスイッチを付け、時計を見た。5時を少し過ぎていた。私は起き上がり、シャワーを浴びて眠気を追い払った。いつもより丁寧に化粧をし、髪をチャイナ風にまとめ、エディにもらったドレスを着る。イヤリングを付けパルファムを付けたところでドアがノックされた。私は急いで靴を履きドアを開けた。

ちゃんと正装したエディが微笑んで立っていた。私は彼を招き入れると彼の前でターンして見せた。「どう？」彼は「素晴らしい！」と言って優しく抱き寄せベエゼした。彼は何か懐かしい匂いがした。

私達はホテルを出て、彼の呼んであった車に乗った。「何処へ行くの？」私が尋ねると彼が答えた。「学生の時の友人と一緒に食事をしてからオペラハウスへ行くつもりだよ」「私が一緒にいいのかしら？私言葉が解らないし、変じゃない？」「変って？」「だって・・・」私が言い淀むと彼が言った。「大丈夫。友人は日本人だし、奥さんは日本語は話せないが聞くことは出来る。だから何も心配なくていい。君はとても素敵だ。自信を持っていいよ。それに彼は日本の心霊学にとっても深い知識を持っているから、僕達にきっと良い話を聞かせてくれると思う」私は黙って頷いた。エディは続ける。「それにしてもとてもチャーミングだ。正直言って少し驚いた」「私そんなふうに誉めてもらったのって生まれて初めてよ」彼は大袈裟に驚いた素振りを作ると言った。「それは君がそんなに素晴らしい姿を誰にも見せなかったからだよ」私はうつ向いて首を横に振った。

「僕だって初めて君を見た時はこんなにチャーミングだとは気付かなかったよ。龍を背負った疲れた東洋人の女性。そんなふうには見えなかったからね。でも君は話し始めると、どんどん魅力的に成ったんだ。何か僕を引きつける。本当に不思議なくらいだった。それでロワールへ誘ったんだ。するとまるで蛹が蝶になるように美しくなった。多分それについてはこれから会う友人が話してくれるよ」そう言って私の手を握った。私はその手を持って、私の腿に当てる。彼は驚いたように私を見る。

私は彼から目をそらせて言う。「昔の龍使いは、ここを切り裂いて何かを埋めたの」彼は食い入るように私を見つめる。そして言った。「思い出したのかい？」私は頷いた。「夢で見たの。夢の中で私はその傷が元で船の上で死んだの。あなたもあんな風にするの？」言い終えて彼を見る。彼は大きくかぶりを振って言う。「僕は決して君を傷つけない。君の心も体もだ。信じてくれ」私は彼の手をシートの上に下ろした。私は窓の外を見ながら大きく深呼吸した。そして言った。

「今日のご免なさい。少し一人になって考えてみたかったの。あなたがあんなに心配してくれるなんて思わなかったから。でも心配してくれて、何か嬉しかったのよ」彼は言った。「構わない。君は君のしたいようにすればいいんだ。僕は君を束縛するつもりなんて無いんだから。ただ、君がいなくなるんじゃないかってとても不安だっただけさ」「私が居なくなるって？」「はい。僕の前から今君が居なくなったら、僕はどうしていいか判らない」彼はまるで子供のように言った。私は笑顔を作って彼に向け

た。「愛してるのね」 彼は答える。「はい。とってもね」 二人共、まるで他人事の様
言った。 私は彼に尋ねてみる。「ねえ、エディ。私の頭って変なのかしら？」 彼は答
える。「頭って、中のことかい？ それとも外側？ 「中身よ」 「多分正常だと思うよ。
多分だけど」 「多分ね」私は繰り返した。彼は口の端を上げて笑う。そして優しい声
で言った。「僕が混乱させたんだ。誰だって突然龍の話なんてされたら驚いてしま
うよ。それに君は辛いことを思い出してしまった。でも君はとても素直に僕を受け入れて
くれるね。決してだましてなんて居ないから安心して。僕を信用して。本当に僕は君を
愛してるんだ」

私は溜息をついた。彼は今私に愛を告白している。とても特別な状況がまた始まった。
『私は特別なんで大嫌いだ！』そう叫びたかったが我慢してしばらく黙っていた。

車は日本料理店の前に止まった。 彼が言う。「着いたよ」 私は頷いた。 彼が先に
降り、私に手を差し伸べた。私は彼に手をあずけて車を降りた。

店に入って彼が名前を告げると奥の席に案内された。

彼の友人夫妻は先に席についていた。私達が案内されると立ち上がって挨拶をした。

男性は加藤良三と名乗った。女性は彼の妻でモニクと言った。私は彼らと握手を交わ
してから席に付いた。

ワインが運ばれてきてカンパイをする。モニクは簡単な会話以外日本語は話せないが、
聞くことは出来た。 私が日本語で話しかけると、フランス語で答える。それを何れかの
男性が日本語に訳してくれた。私が居なければ三人はフランス語で会話をするのだろう。

エディはモニクにフランス語で何か話しかけた。モニクは笑って私に向かって何か話
しかける。横から加藤が訳してくれた。「今エディが君は君の美しさを信じ無いんだ
と言ったんだ。するとモニクが君のオーラについて話している」 「オーラ？ モニクに
はオーラが見えるの？」私が尋ねる。モニクが頷くと言った。 今度はエディが言う。

「そうモニクにはオーラが見えるんだ。君のオーラは月の光のように澄み切っている
と言っている」 モニクが続けるとエディが少し顔を赤らめた。 加藤が訳す。「モニク
は君がエディに恋をしているようだと言っている」 私も少し赤くなるのを感じながら
モニクに尋ねる。「どうして？」 モニクは更に続ける。するとエディは決まり悪そうに
うつ向いてしまった。 加藤が笑いながら訳す。「エディは君を愛しているらしいと言っ
ている」 愛と恋という表現で微妙なニュアンスを使い分けた。

私はもう一度モニクに尋ねる。「何故モニクにはオーラが見えるの？」 モニクが答え
ようとしたところでエディが言った。「僕が説明しよう」モニクが頷く。エディが続ける。

「僕が昔聞いた話だ。実はモニクは写真家なんだ。ある時モノクロームで撮られた写真
を彼女が見た時に、彼女はその中に色を感じたそうさ。 僕もその写真を見せてもらっ
たけれど、ジプシーのお婆さんの写真だった。とても味わいのある写真だ。 その白黒
写真にモニクは色を感じた。良い写真には、写っている者と写した者のオーラが写り込
むそうさ。それが写真に力を与える。 それに気付いてからモニクは色んな人の色を感じ
ようと人の後ろを見るように努めたんだって。そうしたらあらゆる人が、色を伴った
光を放っている事に気付いたそうさ。 そうだったね」 モニクに向かって言った。モニ
クが頷いて言った。

エディが訳す。「君にも見えるって。やってみるかい？」「ええ。でもどうすればいい

の？」 モニクが何か言う。エディが訳す。「その向こうに座っているカップルを見てごらん。まず女性の方だ。彼女の回りに意識を集めて色を感じるんだ」 私は言われた女性を見た。モニクが日本語で「ナニモカンガエナイデ」と言った。

私はじっとその女性のすぐ後ろに視点を合わせるようにして、そして目を閉じた。そしてもう一度目を開けて見た。すると彼女の回りを淡い黄色の光が包んでいるのを感じた。

「イエローみたい」私が言った。モニクは微笑んで言った。「オトコハ？」 私は同じように見た。今度はさっきより早く判った。「グリーンよ」モニクは私の手を取って言った。

「カンタンネ」そう言うとエディに向かって何か言った。

エディがそれを訳す。「じゃあ、どんな形をしている？」

私はもう一度先程のカップルを見た。緑の光が黄色の光に向かって流れていた。しかし黄色の光はそれをよけるように流れている。私はそんなふうに行った。

するとモニクは違うカップルを指定した。今度の二人は女性が水色で男性がパープルだった。それがマーブルのように綺麗に混ざり合っていた。

私がそう言うとモニクがそれを説明してくれた。エディが訳したところによると、初めの二人は男性の片思いで、女性はあまり良くは思っていない。後の二人は多分夫婦だろうとの事だった。私は何となく解るような気がした。

モニクに尋ねる。「私とエディはどんなふうに見えるの？」モニクの答えを加藤が訳した。「ヨーコのオーラは今まで見た誰よりも透き通っていて柔らかく美しい。さっき言ったようにまるで月の光のようだ。多分君が君の力をフルに発揮できるようになれば、それは太陽のように輝くのだろう。エディはサファイアのような深いブルーだ。そしてそのブルーの輝きは君を包み込もうとしている。君のオーラはそれを拒否しない。だから君はエディに恋を、エディは君を愛していると言ったんだ」

私はモニクに向かって頷いた。そして龍について尋ねるべきかどうか少し考え、思い切って尋ねてみた。

「モニクにも私の龍が見えるの？」モニクは首を横に振って何か言った。

加藤がそれを訳す。「いや、モニクに龍は見えない。彼女に見えるものは君が出している物だけだ。龍は君の中にいる。そうだな」そう言ってエディを見た。エディは頷く。

加藤が続けた。「昨日エディが電話をくれて君の話をしてくれたんだ。君の龍の話も聞いた。エディと僕は学生の頃からの付き合いで、彼が龍使いの血筋だと言うことを知っていたから、彼は僕に君の龍の話をしたんだと思う。そして言ったんだ。君がとても素晴らしい女性だと。だから僕達は今日君に会えるのをとても楽しみにしていたんだよ。そして会ってみて驚いた。思っていたよりもっと君は素晴らしかった」加藤夫妻は顔を見合わせて頷いた。そして続けた。

「失礼な言い方かも知れないが、姿形じゃなくて君の素晴らしさは目で見て感じるものではなく、別の次元の物のように思えるんだ。君の龍が目覚めようとしているからなんだろうか？」

私は加藤に言う。「どうもありがとう。でも私には何も解らないのよ。ただ怖いだけ。私には龍が何かすら理解できていないし、龍の事だって、エディの事だって、本当に信じているのかどうか解らないわ。ただ考えることを放棄しているだけかも知れないの」

加藤はそれに対して言った。「それはとても正直な気持ちだと思う。多分僕が君の立場であつたら怖くてエディのそばにいられないだろう。でも僕はエディのことを良く知っている。彼は作り話で女性の気を引くような男じゃない。それに龍の力は確かにあるんだ。昔から人々はそれを利用して来た。エディのお爺さんの風水もそうだし、日本にもそれはある。昔には陰陽道と呼ばれる学問もあつたし、今でもあらゆる宗教の中にその思想は生きている。だから心配しなくていいよ」

私は言った。「ありがとう。今はまだ何も考えられないだけなのよ。でも思い出しかけてるの。ロワールでも夢の中で龍に会つたわ。でもただの夢かも知れないし・・・そんな話をした後だったから、そのせいで見た夢かも知れない」

加藤が言う。「話してみてくださいませんか？ その君の夢を」

私は、なるべく見た夢に対して忠実に話した。それはとても断片的な話だったが、そこに居る誰もが真剣に聞いてくれた。

中国で生まれた事や、船の上で死んだ事。そしてその後もう一度生まれ変わり銃で撃たれて死んだ事。

「そんな夢だったのよ」私はそう言って話し終えた。

エディは私の手を握りしめていた。しばらくの間誰も何も言わなかった。

一番初めに加藤が言った。「その夢は眠ってすぐに見たものなのかい？」

「ロワールの時はそうよ。だって目覚めた時には一時間しかたっていなかったもの」

「それは素晴らしい。君は夢の中でアカシックレコードと繋がつたんだ。普通の夢は大体一時間半は眠らないと見ないものだからね」

私は尋ねる。「アカシックレコード？」

「そうだ。宇宙意識と呼ばれる物だ。多分君の見た夢はただの夢なんかじゃない。君は宇宙意識と繋がって、そこから過去の記憶を持ち帰つたんだと思うよ。君の龍が目覚めたら君はきっと眠らなくても宇宙意識とチャネリングするようになるだろう。全宇宙のすべての記憶、つまり神の力を手に入れるんだ」

昼間一人で考えていた、マザーコンピューターのような物のようだ。自分が勝手に思い付いたことが、ちゃんとした名前を持っているということに、私は少し驚いていた。私は更に尋ねる。

「じゃあ、龍っていったい何なの？」加藤はしばらく考えてゆっくり話した。

「君の龍についてはよく解らないが、一般的な龍について話をしよう。日本における龍信仰は神代の時代、つまり神話の時代に遡る。まず出雲神話に出て来るヤマタノオロチがそうだ。知っているかい？」

「スサノオの命がお酒に酔わせて退治したあれでしょう。子供の頃絵本で見たことがあるわ」

「そう。でも本当はちょっと違うかも知れない。何故なら出雲の神自体が龍神なんだ。龍と蛇はほとんど同じ物と思っていい。龍蛇神と言う呼び方があるぐらいだから」

「じゃあ。あのお話は仲間割れのお話だったの？」

「いや、そんな単純なものじゃない。つまり作り替えられたんだ。天孫族によってね」私にはよく解らなかつた。加藤は続ける。

「つまり征服者と被征服者の話なんだ。天照大神を筆頭とする天孫族。しかしこれに

も諸説があって一概には天照大神とは言い難いのだが、まあここでは一般的にそうしておこう。その天孫族が出雲族を征服した。そしてその時の話を正当化する為にスサノオにヤマタノオロチの話を押しつけたんだ。スサノオは出雲の偉大な王だった。そしてその王は龍を祭っていた。多分龍の力を使う術を知っていたんだろう。そのスサノオが龍を思わせるヤマタノオロチを退治したと言う風に後世に伝える事によって、長い年月を掛けて自分達の征服を正当化してしまった。まずスサノオを自分達の神の系図の中に書き加え、その上龍を退治したことにした。スサノオとその一族にとっては幾重にも張られた罫にはまった様なものだろう。誇り高い出雲の神を貶めたんだ」

私は尋ねる。「じゃあ、龍の敵は何なの？ その天孫族はどうしてそんなにスサノオをいじめるの？」

加藤は苦笑して言った。「いじめるって言われるとなんか変だけれど、彼らは恐れたんだよ。龍神族の結束の強さとか精神力の強さなんかをね。彼らはヒを祭っていたんだ。炎の火もそうだし太陽の日もそうだ。元々はでも炎の火なんだ。つまり物質文明の始まりの火。そして龍は精神文明の象徴だ。太古、この地球上には龍を象徴として戴く精神文明が栄えていた。しかし地球上の環境変化などで道具が必要になって来た。ある時点まで人々は温室のような穏やかな気候の中で暮らしてきたんだ。それが天変地異、つまり聖書に描かれている大洪水のようなものが、完全にこの星の環境を変えてしまった。

大昔地球はエデンの様な楽園だったんだ。人は裸でも暮らせるほど気候は穏やかで、食べるものはわざわざ育て無くとも幾らでもあった。その頃の人々は道具など使わなくとも精神力で幸福を手に入れていた。こんな説がある。それは太古には地球の周囲を厚い水蒸気が覆っていたというものだ。それが有害な紫外線や、放射線を遮っていて、地球を温室状態にしていた。その為に人々は驚くほどの長寿を保ち、穏やかな時の流れを楽しめるだけの時間を持っていた。それが巨大隕石の衝突か、それがすぐそばを通ったことによってその水蒸気の膜が破れ、雨となって地球に降り注いだって言うものなんだ。それが各地に残る洪水伝説だってね。それで、今のように直に太陽の光を受ける暑い場所や、熱の及ばない寒い場所が出来た。その上それは季節によって変わる。そのために人々は体温の調節をし、食物を確保する努力をする必要に迫られたって言うことだね。それが物質文明の始まりなんだ。そして生命にとって有害な紫外線や放射線を直に浴び、その上努力しなければ生きられないというストレスによって、それまでの寿命の十分の一位しか生きられなくなった。穏やかに流れ続けていた時はどんどん加速して、今のように物に囲まれ、時間に追われ、精神を休める事すら出来ない世の中になってしまったって言うことだね。人は火を使い始めた時から狂ったのかも知れない。でもそれも仕方のない事だったんだろう。そうしなくては生きていけないような環境になってしまったのだから。しかし、ある一族は太古の精神を忘れなかった。それが龍を祀る者達だ。どんなに生きにくい世界であっても、かつて自分達が一つの文明を築いたという誇りを持ち続けたんだ。火の神を欺きながらじっと息を潜め、火の神の勢力が強い時には休み、その勢力が落ちてきた時には少しづつ力を延ばす。そんなことを繰り返して来た。だから神道にも仏教にも龍神は居る。そして世界各国の神話にも、やはり龍は残っている。そして今残っているほとんどの神は龍の後に現れている。例えば釈迦の最初の説法を聞いたのがナーガと呼ばれる龍だった様にね。つまり仏教の生

まれる前からナーガは居たって言う事さ。でも、さっきも言ったように、今伝えられている物語はすべてヒの神が伝えたものだから、龍を悪者のように伝えて居るんだ。だからエデンの園でアダムとイブをそそのかしたのも蛇だって言って居るだろう。それに釈迦のナーガの話だって、修行の邪魔をしたり、釈迦の説法によって初めて救われたりしている。でも、本当の事は判らない。とにかく道具を発達させることを善しとしなかった龍神族は、新しい武器を持った火の一族に殺され、征服され、追いやられてしまった。そして東へ東へと追いやられ、日本が最後だったのかも知れない。その為かどうかは解らないが日本に於いて龍神族に加えられた圧力は大変大きな物だったようだ。しかし圧力が強ければ強い程反発力も強くなる。その為に圧力が弱った時に龍神信仰が復活するんだ。そして火の神の仲間ですよと欺きながら生き永らえてきた。神や仏の末席に加わることで龍の名を残した。つまり逆手を取ったんだ。しかし本当の精神は忘れていない。そうだなエディ」

エディが続けて話す。「はい。龍の一族は人々の中に種を撒き続けて来たんだ。精神文化の種をね。そして何時かそれが芽吹き、花を咲かせる事を夢見てきた。龍は戦わない。待つんだ。龍の時は穏やかに流れる。何万年の単位など龍にとって、一眠りに過ぎない。火の神は人間の一生のような短い単位でしか物を計れない。だからいつも急ぐ。しかし魂は人の体を船として何度も生まれ変わり、死に変わりして続く。ヨーコと僕がこうして出逢えたのも、魂がそう決めてあったからだと思う」

加藤がとても興味深そうにエディを見つめていた。私はエディの言う魂と肉体の関係を取敢えず受け入れた。そして尋ねる。

「でも、龍の力っていったい何なの？」

加藤のエディを見る目が鋭くなった。エディが話し始める。

「簡単に言えば超能力のようなものさ。物質文明で理解出来ない力の事だ。例えばテレパシーとか瞬間移動とか予言なんかもそうかも知れない」

加藤が続ける。「しかし今超能力者と呼ばれている人達には偽物が沢山含まれているんじゃないかな。それに本物であってもスプーンを曲げたりするような力が龍の力と呼べるだろうか？」

エディが答える。「違う。龍の力はもっと巨大だ。君の言う宇宙意識とのチャネリングもそうだ。過去現在未来のすべてを知る事が出来る。しかしそれは必要があればだ。龍の力は魂の成長を目指している。だから必要がなければ働かない。そして龍の力は人にあるだけではない。多分、人龍と言うのは大地や海や空の龍のスイッチのようなものだろう。ヨーコの龍が目覚める事によってすべての龍の封印が解かれるんだ。それが魂の成長に必要なだけだ」

私は尋ねる。「誰がその封印をしたの？」

加藤が冷たい口調で言い放つ。「龍使いだよ」

私はエディを見る。エディは私に暖かい眼差しを送った。私は彼の言葉を待った。

彼はゆっくり言う。「そうだよヨーコ。今までの龍使いは、しかるべき時が来るまで龍を眠らせるのが仕事だったんだ。多分君がフォンであった時の夫は、君の体に龍静めの石を埋め込んで君の力を封じたんだ。龍山だった僕が君の龍を起こすのを恐れたからだ。つまり君の夫だった龍使いは、君の龍を使うだけの力が無かったんだよ。龍使

いは使いきれない龍を目覚めさせるとどう言う事になるのか良く知って居るんだ。だから一番初めに龍静めについて学ぶ。それは火の神に利用されない為でもあるんだ。今まで何度か龍は目覚めたが、その度に火の神に利用され、大変な事になった。ナポレオンもヒトラーもそうだった。彼らは欲によって龍の力を目覚めさせたんだよ。でも本当の龍は愛によって目覚める」

私は尋ねる。「欲によって目覚めた龍が、世界征服を果たせなかったのはなぜ？」

エディが答える。「龍使いがちゃんとコントロールしたんだよ」

「つまり殺したのね」

エディは悪びれた風もなく大きく頷いた。

「じゃあ、愛によって目覚めた龍にはどんな力があるの？」

加藤は何か考え込んでいた。エディはしばらく考えて言った。

「人々の心に愛を目覚めさせるのさ」茶化すように答えた。まるでぐらかすような答えだった。私はエディの顔を見つめた。彼は私に何か語りかけていた。それが私には良く解らない。しかし彼の目は私に愛を告げているようだった。何故かそんなふうに思えた。

私は言う。「愛って見えないもの、解らないわよね」

エディがモニクに向かって言う。「でも、モニクには見えるんだよね」モニクが頷いて日本語で言う。「ヨーコニモ デキル」私は言う。「でも自分の愛は見えないわ」モニクが言う。「ダイジョウブ ヨーコ エディ アイシテル」私はモニクに向かって笑いかけると彼女は頷いた。そしてもう一度言った。「エディ ヨーコ アイシテル イロマザッタ」

私とエディは顔を見合わせた。彼は私の肩を抱いて頬に口付けした。私は赤くなるのを感じた。モニクが笑っていた。しかし加藤は何か考え込んだままだった。

私達は食事を終えて外に出た。モニクがそっと私に近づいて来ると言った。「ヨーコ エディ ホントニアシテル ドラゴンジャンナイ アナタヲ ネ」

私は頷いて彼女の手を取った。「ありがとう」

彼女は軽く笑いかけると加藤の側に行った。

エディが近付いて来る。私は思っていた。何百年も前のことを思い出し、一週間前の自分が目覚めた後の夢のように遠退いて行く。奇妙な感じ。龍が目覚める前に私がやっと目覚めたのだろうか。エディはとても美しい身のこなしで歩いて来る。私はこの三十年間ずっと夢の中に居たのだろうか。もっと若くて、美しい心を持っていた頃に、この美しい中国人と知り合いたかった。

「大丈夫。君は充分若くて美しい。そして心の傷ももう治りかけている」

私の心にダイレクトにエディの思考が伝わった。驚いてエディを見る。彼は片目をつぶってみせた。

私は心の中で言った。「エディ。のぞき見はいけないわ」彼の思考が伝わる。「突然チャンネルが繋がったんだ」

私は考えることを諦めた。まるで夢の中の様に色んな事が起こる。今私は起きているのだろうか？ 眠っているのだろうか？ 私はそっとエディの手をつねってみた。

「アイヤー」少なくとも彼は起きている。

彼は笑っていた。きっと私の心を覗き見したのだ。

四人は一台の車に乗ってオペラハウスへ行った。開演十分前に席に付き、加藤に粗筋を聞いた。フランス語の解らない私は雰囲気だけ楽しんだ。

オペラが終わった後、加藤夫妻は私達を自宅に誘ってくれたが、エディは疲れているからと言って丁寧に辞退した。私はエディにすべてをまかせていた。

二人でホテルに戻った。エディはフロントでメッセージを受け取り、私を部屋に誘った。

私は彼の部屋へついて行った。そこは私の部屋と違って、最上階のとても眺めの良いスイートルームだった。

「あなたいつも一人でこんなに広い部屋を取るの？」 彼は笑って言う。「彼女が出来た時に困らないようにね」 「あきれた人ね」 メッセージを読んで彼は真顔で言った。「冗談じゃなくて君はここに移って来た方がいい。僕が手伝うから今すぐ荷物をまとめて」 私は良く判らなかったが、彼の真剣な顔を見て思わず頷いた。

それから急いで私の部屋に行き、荷物をまとめた。彼はとても手際良く動く。5分ほどで荷物はまとまり、エレベーターで彼の部屋に行った。

私は彼の使っていない方の寝室で部屋着に着替える。彼は電話で話していた。とても深刻な話しをしているようだった。電話を終えると彼は言う。「ヨーコ、明日出来るだけ早くここを出た方がいい」 「出るってどこへ行くの？」 彼は少し迷って言った。「香港へ来ない？」 「どうして？」 私が尋ねる。「一番安全だからだよ」 「それって、ここに居ると危険って言うこと？」 「それに祖父が誕生日のパーティーを一週間繰り上げると言うんだ」 「そのパーティーって何時なの？」 「三日後の夜」 私は溜息をついた。「エディ。私、あなたに尋ねたい事が沢山あるんだけど、今とても疲れてるの。どうしたらいいかしら」 「お風呂に入ってみるって言うのはどう？ ゆっくりリラックスして考えをまとめる。そして元気が出たら僕に尋ねる」 「もし元気が出なかったら？」 「明日、香港行の飛行機の中で尋ねるって言うのは？」 私はまた溜息をついた。

彼は微笑むと立ち上がり、バスの用意をした。

「取敢えずお風呂に入ろう」私は彼が寝室に消えてからそう自分に言い聞かせた。私は沢山ある戸棚の中から冷蔵庫を見つけだし、ビールを開けた。彼がバスの用意を終えて部屋に戻ってきた時、私はビールを飲んでいた。彼が尋ねる。「全部飲んでからお風呂にする？ それとも後半分は僕にくれる？」 「あなたに上げる」私はそう言ってバスルームへ向かう。

着ているものを全部脱いで、暖かいお湯に体を沈めると少し気持ちが落ち着いた。化粧を落として体を洗う。そして髪を洗ってシャワーで流すととてもすっきりした。私はもう一度バスタブにお湯を溜めて体を沈めた。お湯の中で私は何かを考えようとした。しかし何を考えるべきなのかも判らなかった。疲れていたのだ。初めての事ばかり続き、その上特別変なことばかりだ。何も考えられなくても当たり前のようにも思えた。そのまま目を閉じると眠ってしまいそうだった。自分の体が段々溶けてお湯になってしまいそうな感じ。バスタブの栓を抜いて立ち上がり、タオルで軽く体を拭いてバスローブを着た。

寝室を出るとエディはいなかった。彼の寝室からシャワーの音がしていた。テーブルの上には、氷の中に入ったワインが置いてあった。彼が栓を抜いてくれている。私はそれをグラスに注いで飲んだ。

窓からとても綺麗な夜景が見えていた。何もかもが特別だった。特別の部屋で男の人に特別扱いされている。しかし私は少しづつそれに慣れつつあった。

ワインを飲みながら煙草を吸った。彼がバスローブをまとい、濡れた髪を下ろして寝室を出てきた時、私は二杯目のワインを飲んでいて。彼は私の横に肩を抱いた。そして私のグラスにワインを注ぎ足すと一気に飲んだ。

「どう？ 元気は出た？」私は首を振って彼の肩に頭を乗せた。彼は私の濡れた頭を撫で言う。「質問は明日にしようね。今夜は髪を乾かして寝よう」そう言うと私を立たせ、バスルームの洗面台の前へ連れて行き椅子に座らせ、ドライヤーで私の髪を手際良く乾かしてくれた。そして上手にブラシでとかし付けると鏡の中の私に向かって言った。「ほら、こんなに綺麗だ」私は首を振ると立ち上がりバスルームを出た。彼はベッドのカバーを取り、毛布を少しはがして言った。「おやすみ。ヨーコ」

私は頷いて毛布の中に滑り込んだ。彼が灯りを消して出て行く。

ドアが閉まった。

なぜ彼はこんなに私に優しいのだろうか？ それまで私は、男の人がこんなに優しいところなど見た事すら無かった。もちろんその優しさが自分に向けられた事などある筈もない。きっと彼は私にだけ優しい訳じゃない。そう思う事にして私は目を閉じた。眠りがやってくるまでエディの使うドライヤーの音がしていた。私はその音を聞きながら眠った。

パリ～香港

「ヨーコ、起きて。ヨーコ！」エディの声で目覚めた。

「おはよう」私は言った。「おはよう。気分はどう？」彼が尋ねた。「まずまずって言うところかしら」そう答えると、彼は微笑んで言う。「それは良かった」「今何時なの？」「5時を少し回ったところ」私は毛布を被って言う。「もう少し眠らせてよ」彼は部屋の灯りを全部付けて、困ったように言った。「7時の飛行機に乗るんだ。間に合わなくなちゃうよ」「じゃあ私、飛行機に乗るのを止めるわ」彼がもっと困った顔で言う。「ねえ、お願いだから起きてよ。飛行機の中で沢山眠れるから。それに香港に着いたら何でも欲しいものを買ってあげるから」「本当に何でも買ってくれるの？」

「はい。何でも買ってあげる」私はベッドの中で欲しい物を考えた。彼が言う。「どうしたの？早く起きてよ」「待って。今欲しい物を考えてるんだから」「だから、とっても沢山飛行機に乗るんだ。それでも飛行機の中で考えたら？」「それもそうね」私はそう言って起き上がった。「早く用意してね」そう言い残して彼は出て行った。

私は急いで顔を洗い髪をとかした。そして服を着替えて荷物をまとめた。エディが私の部屋を出てから15分で用意が終わった。私は化粧をしなかったのでサングラスをかけて寝室を出る。「エディ。終わったわよ」彼は私の荷物を持ち、一緒に部屋を出た。

彼はフロントで私の部屋と彼の部屋のチェックアウトを済ませ、私達は彼の呼んであったタクシーに乗り込んだ。

「ねえエディ、どうしてこんなに急ぐの？」 「ごめんごめん。でも君が急いでくれたから間に合いそうだ。状況がちょっと変化したんだ。早くパリを出た方がいい」私はつぶやくように言ってみる。「私には判らない事ばかりよ」 「ところで、何か欲しい物は見付かったかい？」 私は首を振る。「だめみたい。今欲しい物が何も無いの」「それは困ったね。じゃあ、また僕が何か考えてプレゼントするよ」 私はもう一度首を振って言った。「気にしないで。ちょっと我侘言ってみかかっただけなんだから」彼は黙って私の頭を押さえて言う。「ヨーコ、僕は君の旅を無茶苦茶にってしまったんだね。ごめん」 私は自分を納得させるために言う。「でもあなたは私の為に動いてくれているんでしょ？ あなたは私を守ってくれているのに、多分謝る事なんて何も無いのよ」彼はそれに対してただ首を横に振っただけで何も言わなかった。

「ねえ、あなた夕べから変よ。何か隠しているみたい」 「そうだね。そうかも知れない」 「言いたくないのなら言わなくても構わないのよ。どうせ私には何も判らないし、これからの事はあなたに任せてしまったんですもの」彼は私の肩を抱いて言う。「いや、ちゃんと話すよ。ただ余りにも事態が急変したから説明する時間が無かったんだ。飛行機の中でゆっくり話そう」

彼は私の髪に触れていた。私は不思議なことに、どこか知らない国に売り飛ばされるかも知れないようなこんな不測の事態にさえ、不安感も不信感も感じていなかった。失うものが何もない強みだろうか。私は何も考えないで彼にもたれていた。

タクシーはほとんど車の居ない、まだ暗く眠ったままの街を走って行った。空港に着くまであまり話をしなかった。ただ窓から流れるパリの景色を見ていた。一人でこの街に着き、二人でこの街を離れる。生まれる前から約束していた男と一緒に居る。彼の暖かさを肌で感じていると、その事が疑いようの無い事のように思っていた。

私は、心の中で「エディ」と呟いてみた。その名前はまるで幸せになる呪文のように私の心に安らぎを与えた。私はいつの間にか彼にもたれて眠っていた。

空港に着いて彼に起こされた。彼はポーターを呼んで、私の荷物と先に積み込んであった彼の荷物をカートに積んで運ばせる。私はパスポートを渡し、彼が出国と搭乗の手続きを手際良く済ませた。私の手元には帰国のためのチケットが残った。私はそれを彼の目の前で破り捨てて言った。「これでおしまい」彼は私の手を取って握り締めた。「僕に任せて」私は頷いた。

私達はチェックインするとすぐに飛行機に乗った。彼の取った席はファーストクラスだった。『随分贅沢な人さらいだ』私はそう思って一人ほくそ笑んだ。

「あなたってなんて贅沢なの」「誰かが乗ってあげないと可愛そうだろう」「それはそうだけど」「そんな事気にしないの。君が望むならこの飛行機全部買い取ってプレゼントするよ」「ありがとう。でも、遠慮しとくわ。家が狭いから置く所が無いの」

「それは残念だ。女性がみんな君みたいに遠慮深いと男は助かるんだが」「そう、じゃあまず大きな家を貰ってから、飛行機を買って貰おうかしら」彼は笑った。「それはいい考えだ。やっぱり男は苦勞するようになっているのかな」私は頷きながら言う。「多分ね」

そんなやり取りをしている間に飛行機は離陸していた。

「このまま香港へ着くの?」「いや、ロンドンで乗り換えだよ」「乗り継ぎの時、少し時間はある?」「一時間程あるよ」「香水が切れかけているの・・・」「OKそれを僕がプレゼントしよう。いつも君が付けているのでいいのかい?」「ええ、そうよ」彼は名前を聞かない。私は黙っている事にした。

エアホステスが回って来て、彼が私に言った。「何か飲物を貰うかい?」私は少し考える。そして尋ねた。「ねえ、紅茶が美味しいのは、ロンドンの空港とここだったらどっちかしら?」彼も少し考えて答えた。「多分、ここの方が美味しいと思うな」「じゃあ、ミルクをたっぷり入れた紅茶が欲しいわ」彼はそれを頼んでくれた。彼はコーヒーを頼んだ。そして私に言う。「日本人は朝みんなコーヒーを飲むって思ってたよ」私は尋ねる。「どうして?」「だって日本に居た頃、どこのカフェテリアでもみんなコーヒーを飲んでいたし、それに紅茶を頼んでちゃんとした物が出て来た事が無かったから」「そうね。紅茶の美味しい喫茶店ってあまり無いのよ。でも私はコーヒーが苦手だから仕方がないの。最近は少しづつだけど紅茶を上手にいれてくれるお店も増えてきたのよ」「僕が隣でコーヒーを飲んでも構わない?」「私の洋服に零したいりしなければね」彼は大袈裟に肩をすくめてみせた。「気をつけなくっちゃ」「そう、気を付けて。でないとずっとコーヒーの臭いに付きまといわれて頭が痛くなっやうから」「それは大変だ」私は笑顔に向けた。彼も笑顔返す。

コーヒーと紅茶が運ばれてきて、私達はそれを飲んだ。彼が言ったように香りの良い美味しい紅茶だった。

「これ、とても美味しいわ」彼は笑って言う。「それは良かった。後でヒースローのも試してみたら?」「おなかいっぱいじゃなかったらね」彼も美味しそうにコーヒーを飲んだ。

小一時間でロンドンヒースロー空港に着いた。彼はトランジットの手続きを済ませ、私をカフェテリアに座らせると紅茶を運んで来て、そのまま私に待つように言ってどこかへ行った。そしてしばらくして戻って来ると、私に小さな箱を差し出した。「これで良かったんだろう。ロメオジリ。ベースになっているユリの香りが君にとっても良く似合う」私は驚く。「よく判ったわね。あまり知れてないから、きっと判らないと思ってたわ」彼は片目をつぶって見せると言った。「君の事なら何でも判るんだ」「どうもありがとう。とっても嬉しいわ」「どういたしまして。早起きした甲斐があったかい?」「本当にありがとう」私はその箱を開け、蓋を取って足首に少しスプレーする

と、また箱に入れてバッグにしまった。これで百合の香りに包まれて眠ることができる。

その後私達は、香港行きの飛行機に乗り込んだ。やはり彼はファーストクラスの席を取っていた。行き先は本当に香港らしい。そして彼は本当にお金持ちらしい。

シートに座って離陸を待つ。周りには誰も乗って来なかった。彼にはさっき破り捨てたチケットを手に入れる為に、私がどれだけ考えたかなんて判らないだろう。私には関係ないけれど、確かにお金持ちと呼ばれる者は存在するようだ。

彼がとなりのシートで言った。「ヨーコはお金持ちが嫌いなのかい？」 私は驚いて彼の顔を見る。彼は真剣な目をしていて。私は答える事にした。「好きとか嫌いとかって言う問題じゃないのよ。私にはお金持ちって言うものが良く理解出来ないだけよ」「でも、みんなお金持ちになろうと思って頑張るんだろう？」 「そうね。だけど私は少し違うかも知れない。確かに私だってお金持ちには成りたかったのよ。ただ私の思うお金持ちって言うのは、毎日食べる物が有って、少し自由に使えるお金があればいいのよ。それが私の思うお金持ちのレベルなの。パリへ行きたいなって思ったら、一生懸命働いて、エコノミーのシートを、いろんな情報を集めながらその中で一番安いのを買うの。

それで一週間だけの休暇を楽しむ。ファーストクラスじゃないのよ。それで十分満足してた。私の思うお金持ちってその程度だったわ。それにお金ってそんなに沢山有っても使い方も判らないし、それに贅沢に慣れると後がこまっちゃうに決まっているもの」

彼が真剣な顔で言う。「何も困らないから心配しなくていいよ」 私が冗談ぽく言う。「あなたが居るから？」彼は真剣な顔のまま頷いた。私は慌てて言う。「私はあなたの何なの？」彼がキッパリとした口調で言う。「君は僕の妻だ」私は本当に驚いた。「いつ私はあなたと結婚したの？」 「パリで出逢った時から、いや、生まれる前から決まってたんだ」 「あなた頭は大丈夫？」私はあきれてそう言った。「多分ね。君は僕の妻に成る事に反対かい？」私は絶句した。

飛行機が離陸を始める。私は加速のための重力を体を感じていた。彼が私の手を取って言った。「ヨーコ、愛して居るんだ」

ジェット機のエンジン音と重なって私の耳にその言葉が届いた。私は目を閉じて飛行機が上昇するのを感じていた。そして大きく旋回し水平飛行になった時、私は言った。「もしかして、私があなたの妻である必要が有るのかしら？」彼は答える。「そう。それはずっと昔から決まっていた事なんだ。龍と龍使いが一つになる。それがすべての始まりなんだ。たまたま僕達は男と女で生まれて来た。だから結婚した方がいい。それに何よりも僕達は愛し合っている」 「ロワールでの賭にあなたがやっぱり勝ったのね」「はい。君はやっぱり負けた」 「その後は後でゆっくり考えるわ。その前に龍のこと教えてくれる？」彼は微笑むと言った。「OK 何でも聞いて」

「私の龍は目覚めたの？」 「いや、未だだ。しかし、いずれ目覚める」 「あなたの力で？」 「はい。僕が目覚めさせる」 「あなたが目覚めさせなければどう成るの？」

「愛以外の力で目覚めるだろう」 「それはどう言う事かしら？」 「僕達が今逃げてきた敵によって目覚めさせられるって言う事だよ」 「その敵はいったい誰なの？」彼は少し考えて言った。「加藤がいけなかったんだ」 「加藤さんがどうしたの？」 「加

藤が敵に君のことを知らせた。君の龍はとてつもない力を持つてるんだ。君の龍が目覚めると大地の龍や海の龍、そして天の龍が共鳴し、君の思うままに暴れる」 私は正直に言う。「私には良く判らないわ。それってどう言う事なの？」 彼が言いにくそうに答える。「最終兵器に成り得るって言う事さ。君が破壊を望めば、大津波を起こしたり、大地震を起こしたり、竜巻を起こしたり出来るんだ。そして人の心を操る事も出来るから暗殺だって簡単な事だ」 私はその言葉に寒気がした。

彼は続ける。「ナポレオンやヒトラーのした事を思い出してごらん。君の龍は彼らの数十倍も強いんだ」 「でも私が望まなければ何も起こらないわ」 彼は首を横に振る。「今の科学でなら、君の心をコントロールするぐらい簡単な事なんだ。 特殊な薬品を注射して脳の有る部分に刺激を与える。すると君は彼らの思うとおりの人間に作り替えられる。 自ら龍が目覚める事を望む様に成るだろう。そして君の龍は、欲によって目覚める。 アメリカもロシアも、そしてヨーロッパの各国も今極秘で君を探しているんだ。しかし本当に龍の力を理解しているのはロシアとアメリカだけだと思う。後の連中は多分君を研究材料として探しているだけだろう」 私は尋ねる。「加藤さんがどうしてそれに関係あるの？」 「加藤はECの心霊学協会に所属していたんだ。僕が迂闊だった。昔彼は趣味で研究していただけだったのにいつの間にか組織に入っていた。それもかなり熱心に活動していたようだ。 その彼に君の話をしてしまったものだから、彼は自分の目で確かめようと君に会いたがった。 会って君の龍の存在を確認し、報告をしたんだ。加藤はかねがね龍の存在をめぐるフランス人達と討論していたらしい。ヨーロッパの人間には、人につく龍の思想は解りにくいんだ。 それに対して東洋人で神社の息子である彼は、人龍の存在を主張して譲らなかつたそうだ。 そこに僕が迂闊に君の話をしてしまったからこんな事に成ってしまった」彼はすまなそうに言った。「それであなたはあの時途中で話をはぐらかしたのね。でもそれって何時判ったの？」 「途中で気付いたんだ。なんか変だなんて。話し方もそうだったし、それに昔の彼と何となく変わっていた。それでこれは注意しなければいけないって思った。そしてすぐに調べさせたら今言った様な報告だった。きっと今頃奴等は僕達の居たホテルに行つて僕達を探しているよ」 私は溜息をつく。

「調べさせたの。あなたっていろんな事が出来るのね」 彼はそれに対してはうつ向いて首を振っただけで何も言わなかつた。「ところで研究材料って、私、何をされる場所だったの？」 「つまり・・・言いにくいんだけど・・・モルモットみたいな事かな」 「それって、人権はどうなるの？」 「一人旅の日本人女性行方不明って言うのじゃない？」 私は納得した。

「ねえ、じゃあ、あなたの力によって目覚めた龍はいったいどうなるの？」 彼は微笑んで言った。「僕にもまだ良く分からないんだ。でも僕達の仲間はみんな愛で目覚めた龍を待ち望んでいる。しかし大きく何かが変わったりはしない。 それだけは確かな事なんだ。龍の時間はゆったりと流れるからね。 大きな河が少しずつ流れを変えるように、君の龍は時代の流れを少しずつ変える役割を果たすだろう。しかし、危険は付きまとう。

加藤が言ったように龍は虐げられた者達の象徴なんだ。そして今もその勢力は残っている。虐げた者達も、虐げられた者達も君を狙つてる。 虐げた者達は龍が目覚めた事を知れば必ず叩きに来る。虐げられた者達は利用しようとする。利用出来なければ殺す。

そんなものだろう。火の神にとっては龍の力もただの道具と同じなんだ」「それって変よ。虐げられた者達も私の龍を利用しに来るなんて」「自分達の正当性を証明する為に君が必要なんだ。でも本当に龍のことを理解しているのは僕達の仲間だけだよ。後の者たちはヒの神の考え方が身に付いてしまっている。随分長く虐げられてきたからね。本当に恐ろしいのは、ヒの神その物より、ヒの神に感化された龍を奉る者たちなのかも知れない」「あなたの仲間達って何?」「ナーガラージャって言うんだ。僕の祖父が前の戦争の時に、バラバラになっていた本来の精神を受け継いだ龍神族を集めた。それがナーガラージャだ」私が繰り返す。「ナーガラージャ」彼が頷いた。

私達は運ばれてきた食事を食べた。パリに来る時に食べた機内食とは、全く違う物だった。贅沢ってこう言う事なのだろうか。しかし何れにしてもおなか一杯になったことには変わらない。私はしばらく贅沢について考えていたが、いつの間にか眠ってしまった。

目覚めた時エディは音楽を聴いていた。彼はいったい何時眠るのだろうか。いつも私より後に寝て先に起きる。そして居眠りもしない。私はふと思いついて彼に尋ねた。

「エディ、龍を背負って生まれて来たのは私だけなの?」彼はヘッドフォンを外してそれに答えた。「いや。後何人かは居るはずだ」「その人達はどうしてるの?」「一人は、自ら龍を目覚めさせた。彼の名はダライラマ。チベット仏教の最高指導者で、平和主義者だ。しかし後の人達は分からない。僕が知るかぎりでは日本に一人居たが、彼女の龍はまだ幼い。例え目覚めたとしても他の龍を共鳴させる事は出来ないだろう。後は判らない。君が何も知らないで居たように他の人達も何も知らずに一生を終えるんだ。しかし君の龍が目覚めた時にはその人達の龍も共鳴するかも知れない」私は更に尋ねる。「その人達は私のように狙われたりしないの?」「ナーガラージャにしか龍は見えないんだ。まだ龍を見つけたと言う連絡は入っていないから、多分大丈夫だと思うよ」「私ってとても不運だったんだ」彼が笑う。「はい、僕に見付かった」「私の龍はあなたに捕まって今香港まで護送されているのね」私がそう言うと彼は大声で笑った。「ヨーコはいつも面白い言い方をする」私はまた尋ねる。「ところでエディ、さっきの話だけれど、どうして私はあなたの妻でなければいけないの?」

彼は笑うのを止めて答えた。「龍を使う人のことを『センロン』聖龍と書くんだが、そう言うんだ。そしてその妻が龍なんだ。そう言い伝えられている。いつも龍が女性で龍使いが男性であるとは限らないのだけれど、何故か李家にはそう伝わって居るんだ。

とても長い間聖龍の名を継ぐものは生まれなかったが、僕がその名を継ぐ事になった。僕が君の龍を見つけたからだ。『李聖龍』ナーガラージャの最高位に座る者の名だ。世界中の仲間達が僕達の為に働いてくれる。そして僕達を助けてくれるんだ」「それって神話のようなものなの? 例えば白い神が来て自分達を助けるって言うような」「多分ね。最後の聖龍の予言の様な物だったんだろう。不思議な事に祖父が龍神族を集めた時、ほとんどの人達が同じ言い伝えを持っていたんだ。だから、君は僕の妻であるべきなんだ。それとも僕の事がそんなに嫌いなのかい?」私は口ごもる。「そんなに嫌いかと言われても」彼が私をのぞき込む。そして言う。「君の思っている結婚とはきっと違うものだと思うよ。僕は君を束縛したりしないし、君に家事を押しつける事もない。

ただいつも側にいて僕が君を守るんだ。君はいつも君の思うままに振る舞い、僕がそれをサポートする。離婚したばかりの君には辛いかも知れないが、判ってくれないか。君が僕の妻でないとナーガラー ज्याの助けが受けられないんだ」彼はそう言い終わってしばらく黙った。私も黙っていた。

彼が先に話し始めた。「ヨーコ。僕が間違っていた。本当はナーガラー ज्याなんてどうでも良いんだ。僕が君を愛しているから、妻にしたい。あの時のように逃げ出したりしないで、ずっと僕の傍に居てくれ。僕はもう二度と君を失いたくない。僕にとって君の龍なんて本当はどうでも良いんだ。僕はただヨーコが好きなんだ」私は彼を見た。彼の言葉が嘘ではないように思えた。私はこの美しい男を愛し始めているようにも思えた。そして、彼の言う龍の話はほとんど受け入れられてもいた。しかし受け入れているだけで、それが何を意味するのかは理解できていない。

私は何も理解出来ていない頭で考えなければならなかった。それで目を閉じて彼と初めて会った時からの事を思い出してみる事にした。

ロワールでの事やパリに戻ってからの事。私は彼を信頼していた。その信頼は愛と呼ぶべきものなのだろうか？もしそれが愛であるならば、私は彼の美しさを愛しているのだろうか？それとも彼の優しさをだろうか？違う様に思えた。何の理由もなく、私の心の奥の方で魂が彼を強く求めているのだ。前世の因縁？信じようと、信じまいとそれは確かにあるのだ。その確信はあった。私は彼に引きずられるのではなく、自分自身で望んで動いているようにも思えた。もし、彼が私をだましていたら、それは彼がだまそうと思っているだけではなく、私自身がだまされることを望んでいるからなのだ。つまり、今の状況に何か罪があるとしたら、二人は共犯だと言うことだ。

もしかしたら現実から逃避したがっていた私の心が、彼を作りだしたのかも知れない。彼が私の中に龍を見ているように私は彼の中に実在しない理想的な男性を見ているだけなのではないだろうか？

私は、長く複雑な夢の中にいる。そんなふうにも思えた。しかし、今私はこの夢から覚めることを望んではいなかった。私は私の知らない私の一番深いところで彼を愛していた。理由など無く、確かに私は彼を愛している。それに、私の中にあんなにのさばっていた寂しさが、今は一かけらも見あたらない。彼は確かに私の心の傷を癒したのだ。私の心の中に今あるのは、彼が私に与えてくれた思いやりと優しさばかりだった。

有難かった。それは本当に有り難いことだった。

私は閉じた目から、涙がこぼれるのを感じた。そして目を開けて彼を見た。彼は優しく微笑んでいた。

彼が言った。「大丈夫。これは現実だよ。香港に着けば、それはすぐに判る。そして僕達は共犯者なんだ。だからもう離れられないんだよ」

涙の向こうの彼が段々近付いて来てそっと私の唇に触れた。

「エディ。覗き見はだめよ」彼はまた笑った。そして私も笑った。

私は共犯者の手を握ってまた眠った。彼も今度は寝たようだった。

目覚めた時に、二度目の食事が運ばれてきた。私は半分も食べられなかったが、彼は私の分までべろりと平らげてしまった。

「あなた本当に良く食べるわね」「君は本当に良く眠る」「眠るのにお金はかから

ないわ」「食べるのに不自由する程貧しくはないから心配しないで。僕の妻にはお金の心配なんて必要ないんだよ。君の欲しい物は何でも買える」「あなたは私なんかじゃなくて、もっと色んな物を欲しがる女性を妻にするべきよ。そうすればあなたのお金が役に立つから。私はただゆっくり眠れば満足なの。そんなにお金は使えないわ」彼はオーバーに肩をすくめてみせた。「世の中うまく行かないね」私は言った。「そんなものよ」

私は香港に着くまで彼の温もりを手に感じながらまた眠った。

香港 1

香港の空港に降り立ったのは、夜遅くだった。

香港の街は眠らない。エキセントリックなネオンサインは街を照らし出し、沢山の人々がまだ活動していた。

私達はエディの迎えの車に乗り込む。私はエディの家へ行くのかと思っていたが、着いたのは高層ビルのホテルだった。

私はエディに尋ねる。「あなたの家には帰らないの?」「ゆっくり落ち着いてからにしよう。ホテルの方が気が楽だろう」私は内心ほっとした。そんな私を見て彼は微笑んだ。

ホテルに入ると彼は、フロントでキーを貰い、ボーイに荷物を運ばせた。

着いた部屋は、多分特別室だろう。趣味の良い調度品が揃えられ、その上窓からはとても美しい夜景が見えた。そしてやっぱり趣味の良いベッドルームが二つあった。

私達は荷物を置くと、座り心地の良いソファで寛いだ。私は靴を脱ぎ足を高くして寝そべる。

「足がむくんじゃったわ」彼はそんな私を優しい目で見ていた。彼はワインを開けるとグラスに注ぎ分け、それを私に手渡した。彼は私のグラスに自分のグラスを合わせ、心地好い音を響かせて言った。「僕の街にようこそ」私は笑ってグラスを上げる。「あなたの街が私を歓迎してくれますように」彼はグラスを口に運び、言う。「もちろん、君はこの街の誰からも歓迎を受けるよ」「あなたの恋人が、ナイフを持って私を殺しに来るんじゃないでしょうね」彼はウインクをすると言った。「その時は諦めてくれ」

私は口に含んだワインを吹き出しそうになった。

彼は笑いながら続ける。「大丈夫だよ。ジョークだから。心配しないで。僕はここでは身持ちが堅いので有名なんだ」「身持ちのが堅って、女の人と言う言葉じゃなかったっけ？」彼は笑った。「そうだったっけ。じゃあ、男はどう言うの？」私は首を傾げて言う。「さあ？なんて言うのかしら。分からないわ」「とにかくそう言う事さ」「つまり、私を殺しに来る、あなたの恋人は居ないって事ね」彼が繰り返す。「はい。僕の恋人は居ないって言う事」「じゃあ、恋人じゃなければ居るかも知れない？」「かも知れない」私は頷いて言った。「仕方ないわね」彼も頷き、ワインを飲んだ。

彼は立ち上がり、電話をかける。初めは広東語で、そして次ぎにフランス語でかけた。その間私は寝そべて煙草を吸っていた。

電話をかけ終えた彼は、私の後ろに立って言った。「今日の朝、祖父が君に会いに来るらしい」私は驚いて言う。「私の方から行かなきゃいけないんじゃないの？」「構わない。祖父が来るって言っているからここで待てばいい」「私で大丈夫なのかしら」エディが微笑む。「大丈夫過ぎる位だよ。ただちゃんと靴を履いて座ってさえ居ればね」

私は慌てて起き上がった。彼が声を立てて笑う。「まだ祖父は来ないよ。慌てなくていい。僕はそんな君を気に入ってるんだから」私はまた寝そべて言った。「私どうしたらいいのか判らないわ」彼は私の顔をのぞき込む。「リラックス」私は頷いた。

彼はその後ソファーに座って言った。「加藤にも電話しておいた。昨日の礼を言って、もうパリを離れた事を伝えた」「香港に来たって言ったの？」「まさか。君に母の国を見せたいのでインドへ来てると言っておいたよ」「彼、インドを探すのかしら」エディはうつ向いて首を振った。「さあ？でも明日の夜祖父のパーティーがあるから、その次ぎの日には新聞で僕達がここに居る事を知らるだろう」「新聞に載る？」「はい」私はそれに対して何も言わなかった。

「そろそろ寝た方がいいよ。もう夜中の二時だから」「眠くないわ。だって飛行機の中でずっと寝てたんですもの」「じゃあ、ドライブにでも行こうか？」「夜中のドライブって楽しいかしら？」彼は笑って言う。「はい」私はしばらく考えた。そして言う。「ドライブは今度にしましょう。だって寝不足の顔でお爺様に会いたくないもの」彼は頷いて言った。「時差の調整には眠るのが一番だ。睡眠薬をあげようか？それとも子守歌を歌おうか？」「どちらも結構よ。私、眠るのは得意なの」彼は即座に言った。「知ってるよ」私達は笑った。

彼がベッドの用意をしてくれる。私は簡単にシャワーを浴び、ベッドに入った。彼がドアを少し開け、その隙間から顔だけ出して言った。「添い寝の御用はないですか？」「ノンメルスィー」「ウィマダームボンニュイヨーコ」「おやすみなさい」

私は三度ほど寝返りを打った。やはり彼に添い寝を頼めばよかつたのだろうか。初めての場所で初めてのベッド、その上睡眠は十分足りていた。眠れないかも知れない。しかしそんな風に思いながらも、何時の間にか私は眠っていた。

翌朝カーテンを閉め忘れていたので、窓から差し込む朝日を全身に浴びて目覚めた。

私はベッドの中で大きく伸びをする。それだけで私の体も頭も完璧に目覚めた。

シャワーを浴び、化粧をして寝室を出る。リビングにエディの姿はなかった。私は彼の寝室をノックしてみる。応えはない。そっとドアを開けてみる。ベッドの上にも彼の姿はない。私はドアを静かに閉めてリビングのソファに座り、煙草に火を付ける。そして冷蔵庫を開けてミネラルウォーターを飲む。私はなぜ彼が居ないのか考えてみた。多分、家へ戻ったのだろう。私が二本目の煙草を吸い終わったところで彼が戻ってきた。

「おはよう」彼が先に言った。私も返す。「おはよう」彼はソファに腰を下ろして言った。「今朝は早起きだったんだね」「夕べ、カーテンを閉め忘れちゃったみたい」

「ゴメン。気がつかなかったよ」私は首を振って言う。「あなたのせいじゃないわ。それに朝日がとても気持ち良かったし」「良く眠れた？」私は答える。「ええ、とても」彼は微笑んで頷く。そして上着のポケットから小さな箱をだして私の前に置いた。

私は尋ねる。「何？」彼が言う。「開けてみて」私はそっと手に取ってその小さな箱を開ける。ダイヤの指輪だった。3キャラット前後の大きさで、とても綺麗にカットされたダイヤが、シンプルなニューヨークタイプの台に乗っていた。

私は尋ねる。「どうしたのこれ？」彼は真剣な顔で答える。「君の為に作ったんだ」「私の為に？」「はい。君の為にこの石を、君の指に一番良く似合う台に乗せた」私はあきれて言う。「こんなに朝早くから？」彼は頷く。彼が私の手から箱を取り、指輪を持って私の指に付けた。

それは生まれた時からそこにあったようにピッタリと収まっていた。私は指輪の収まった指と彼の顔を交互に見る。彼の真剣な顔がそこにあった。私はどうして良いか分からなかった。

彼が不安そうな声で言う。「気に入らない？」私は首を横に振る。「いいえ。そうじゃなくて・・・」後の言葉が続かない。「じゃあ、気に入ったんだね」私は頷く。彼はとても嬉しそうな顔で笑った。「良かった」ほっとしたように彼はそう言った。私は迷っていた。「私がこれを貰っていいのかしら？」彼は不思議そうに言う。「どうして？」私は首を振って言った。「だってエディ、こんな高価なもの」「夫が妻に指輪をプレゼントして何故いけないの？」「でも私達は結婚した訳じゃないわ。それに私、良く判らない。あなたの言っている結婚がどういうものなのか」「僕のこと、愛していないの？」「そうじゃないと思うけど・・・。それにこれは高価すぎるわ」

彼は私の手を取って言う。「君は僕の妻なんだ。だってそうだろう？そのために僕達は生まれ変わって来たんだから。それに僕の妻に高価すぎるものなんて無い。どんな高価なものを身に付けたって君は君でしかないんだ」私は良く分からなかった。

彼が私をのぞき込むようにして言う。「ヨーコ。君を愛してるんだ」私は頷く。「多分、私も・・・」「それ以外に何が必要なんだい？」私は首を振って言う。「それだけだと思う・・・」

究極的にはそれだけだ。それに私はその時点では、それを貰うことで自分がどんなトラブルに巻き込まれるのかなど考え付きもしなかった。それで私は素直に彼の気持ちを受け入れることにした。

「どうもありがとう。本当に嬉しいわ」彼は微笑んで言う。「良かった。パリで初めて会った時君の指輪の痕がとても寂しそうに見えたんだ」私はそっと微笑んだ。彼

が続ける「君に指輪を贈るのを楽しみにしていたんだよ。石は初めからこれに決まっていた。ただどんなフレームに乗せようかってずっと考えていた。でも君はいつもシンプルな物がよく似合うから、結局これにした」

私は手をかざして指輪を見る。「とっても素敵よ。それにサイズもピッタリ」「僕はプロフェッショナルだからね」私は頷いた。「11時に祖父が来るよ。食事はどうする?」「どうせあなたはおなかがすいて居るんでしょう?」「はい」「香港式の朝食はどんななの?」彼は指を鳴らして「飲茶にしよう」と言って私の手を取って立ち上がった。

私達はホテルの一階のレストランへ降りた。席に着くと彼は、ワゴンを呼んで次から次へと料理を取り、私に勧めた。私は竹で出来た蒸し器の中から一つずつ食べ、残りを彼が全部食べた。食べながら彼が言う。「祖父と会った後、ドライブに行くかい?」

私はなにげなく答える。「そうね」「そうだ、明日のパーティーのドレスも買わなくちゃ」「ドレスならパリで頂いたのがあるわ」彼は首を振って言う。「だめだめ。明日は正装じゃないと。それに宝石も揃えなきゃ」私は溜息をついた。「大丈夫。僕に任せて!」彼がとても楽しそうなので、私は何も言わなかった。

彼はワゴンに乗っていたほとんどの種類の料理を食べたんじゃないだろうか。それぐらい良く食べた。食べ終わった時テーブルには、まるで爆撃を受けた廃墟のように食器が散らばっていた。

部屋に戻り三十分程経ってドアのチャイムが鳴った。エディが出迎える。私も緊張して立ち上がった。エディのお爺さんは、とても大きなおなかをした、とても優しい人だった。エディとお爺さんは抱き合って挨拶をする。その後を女の人が静かに入って来た。多分彼のお母さんだろう。とても気品のある美しい人だ。エディはお母さんの目を受け継いだようだ。

エディはお母さんとも抱き合って挨拶をする。そして二人に私を紹介した。私は緊張しながら二人と握手する。お爺さんが私を見て何か言った。エディが訳してくれる。「君の龍はとっても素晴らしいって言ってるよ。君のこともとても気に入ったみたいだ」エディは二人にソファを勧め、私にも座るように言った。

エディとお爺さんが話し、お母さんはとても心配そうに二人を見ていた。私は言葉が判らないのでただ見ているだけだった。二人が広東語で話しているのを聞いていると、それはとてもリズムカルで、お母さんの心配そうな顔がなければ、まるで天気の事でも話しているような感じだった。途中で彼が私に言った。「ヨーコ。祖父が君を僕の妻として認めたよ。今までどんな縁談にも反対してきたのに、君は文句無しだ」私は言う。「でもお母様はとっても心配そうだわ」「祖父が僕達に旅をするように言ったんだ」

「旅って何処に?」「日本に行く事になるだろう。出発は明後日の夜だそうだ」私は尋ねる。「日本に何があるの?」「僕達にとって必要な事らしい。君の龍はまもなく目覚める。その時に僕がちゃんとコントロール出来るように学ばなくてははいけない。」

その上僕の実ミスで敵に君のことを知られている。すべての問題をクリアするには、祖父が言うようにするべきなんだ」 私は頷く。そして言った。「大変ね」 彼が笑って言う。「大丈夫だよ。僕達はどこへ行っても守られるし、助けられる。祖父が君を認めたことで、僕はもう聖龍に成ってしまったからね」 「そんなに簡単なものなの？ 例えばみんなで会議して決めるとか、いろいろ試すとかは無いの？」 彼は笑って答える。「無い。大龍が認めればそれでいいんだ。誰も大龍の決定に逆らえない。だから僕達はもう正式な夫婦だって言う事さ」

良く判らないけれど私は一応お爺さんに頭を下げた。お爺さんは私に優しく笑いかけ、何か言った。エディがそれを訳す。「ヨーコ。気を付けるんだよって言ってるよ。僕を信じて今のままの綺麗な心で居続けるんだよって」 私は不覚にも涙が溢れそうになった。エディが驚いて言う。「どうしたの？」 私は首を振って答えた。「何でもないわ。ただ私、今まで綺麗な心だなんて言って貰った事なんて一度もなかったの。自分勝手に、わがままで、気が強くて、そんな自分があなたみたいな人に愛されるなんて信じられない。その上初めて会った人にまでそんな風に言って貰って、何だか私・・・」 エディが優しい声で言った。「僕はそんなヨーコを愛しているんだよ。勝手に、わがままで、気が強くて、その上泣き虫。僕の理想の女性像だ。その上綺麗な心を持っている。だから祖父は君を妻と認めたんだよ。君の龍を見て妻と認めたわけじゃない。僕達が愛し合えなければ愛の龍は目覚めない。だから祖父は君に会いたがったんだよ。そしてまもなく君の龍が目覚めるって言った。つまり僕達の愛が本物だって見抜いたって言う事さ」

私は頷いた。私はお爺さんとお母さんに向かって丁寧に頭を下げ「ありがとうございますとだけ言った。お母さんが私の手を取って抱きしめた。私は涙がこぼれた。彼女は私の涙を優しく拭いてくれた。お爺さんは大きな暖かい手で私の頭を撫でた。お母さんが何か言ったのをエディが訳してくれた。「僕の事を宜しくって言ってるよ。僕の妻が君で良かったって」 私は頷いてみせた。お母さんも何度も頷いてくれた。帰り際にお爺さんとお母さんはもう一度私を抱きしめてくれた。私は五年も一緒に暮らした別れた夫の両親と、一度も触れ合った事など無かった事を思い出していた。

二人が帰った後エディは私を抱きしめて言った。「愛してる」 強く息が出来ない程。私は身体全体で彼を感じていた。そして愛されていることを彼の腕から感じた。その時、意識の奥の方で何かが動いた。私の中にしっかり貼り付いている何かが、大きな力で剥がされようとしているような、とても大きな衝撃と、恐怖を伴った感覚だ。私は驚いてエディから離れた。するとそれはまた静かになった。エディはそっと口付けをして私をソファーに座らせた。そして優しく微笑むと言った。

「そうだ。兄に会いに行こう。兄の店で君のアクセサリを選べばいい。僕の店よりずっと良いものが揃っている」 私に何も言う暇を与えずに彼は立ち上がって私の手を取った。私は彼に従う。完全に彼のペースに巻き込まれていた。自分を見失っている私には彼に任せる以外他に方法がなかったのだ。

ロビーに降りると彼は自分の車を持って来ていた。それは夕暮れ時の空のような深いブルーのカブリオレだった。彼はドアを開けて私を乗せた。その車のシートは適度な温度で暖められていた。

15分程走った所に、お兄さんが店を出しているショッピングセンターがあった。エディは無造作に車を止めると私の方へ回ってドアを開けた。

お兄さんの店は、とても大きなビルの一階のほとんどを占めていた。私は言う。「すごいお店ね」彼は肩をすくめてみせた。そして私の腰に手を回して歩き始めた。

店に入ると店員の方がみんな彼に陽気に声を掛けた。彼が広東語で何か言うと一番偉そうな人が奥の方を向いて何か言った。彼は私にそこで待つように言って奥に入ってしまった。彼はすぐに男の人と出て来た。お兄さんだ。すぐに分かった。とても良く似ていて、彼よりも風格があった。

お兄さんは私に笑いかけると言った。「初めまして。私が兄のアンディです」とてもきれいな発音の日本語だ。私も笑顔を作って言う。「初めまして。ヨーコです。よろしくをお願いします」

エディは広東語でアンディに何か言う。お兄さんは大きく頷いて奥の方へ歩いて行く。エディは私の手を取って誘う。

アンディはショーケースの扉を開けて私に言った。「ヨーコ。遠慮しないで、好きな物を好きなだけ持って行きなさい。僕からの結婚祝いだから」私は驚いてエディを見た。

エディは笑って言う。「全部貰っちゃえば？」アンディはとても感じ良く笑った。そしてエディに広東語で何か言う。エディは頷いてショーケースをのぞき込み、とても豪華なチョーカーを選び出した。「ヨーコ、これなんかどうだい？」私はそれを手に取って見る。それはダイヤをふんだんに使い、ずっしりとした重さを持っていた。彼は私の後ろに回り、それを私の首に付けた。私は心の中で、これ一つで立派なマンションが買えるのだろうかと思った。

鏡をのぞき込んでエディが言う。「悪くない」アンディが別のショーケースから良く似たイメージのイヤリングを持って来た。マンションが二件分になった。エディはそれを受け取ると私の耳に付ける。そしてもう一度鏡をのぞき込んで言った。「これにしよう。とても良く似合う」私はマンションの重さを身に付け、何も言えずにただ驚いていた。

エディが言う。「ヨーコ。笑って」私は言われたように微笑みを作る。アンディが言う。「素晴らしい。この宝石はヨーコと出逢うのを待っていたようだ。まるでエディみたいだね」そう言って片目をつぶった。兄弟で良く似たしぐさをする。本当に仲の良い兄弟なのだろう。

エディは私の指輪をアンディに見せて何か言った。アンディは頷くと言う。「ワンダフル」エディもアンディもとても嬉しそうだった。店に客が来て店員がアンディを

呼びに来た。アンディは「好きなだけ持って行って」そう言うと私達の側から離れた。エディが言う。「ヨーコ他に欲しい物は無い？」 私は首を振る。「充分すぎるわ」 彼が笑う。「ヨーコは本当に物を欲しがらないんだね」 「必要な物だけあればいいのよ。でも、これも本当に必要なものなのかしら？」 彼は頷く。「もちろんさ。パーティーにジャンクを付けて行ったりしたら、祖父がみんなの笑い者になる。だから君は何も心配しなくていいんだ。それにアンディだってプレゼントを考える手間が省けたらどう？ かわいい弟の結婚祝いなんだから。君が気にすることなんて何も無いんだよ」 「結婚祝いって言われても・・・。本当にいいの？」 私が尋ねた。「はい」彼が笑顔で答えた。チョーカーとイヤリングを外すと店員を呼んで渡した。「ホテルに届けてもらおう」彼はそう言うと私を誘って店を出た。

エディは店のガラスごしにアンディに手を振る。アンディが軽く会釈した。私は丁寧に辞儀をした。

その後私達はレストランで食事をした。私は軽いものを頼み、彼はちゃんと食べた。彼は私の手を取って、指輪を見ながら言った。「アンディも素晴らしいって言ってくれた。良かった！」 私は頷く。彼は続ける。「ヨーコ、君は次にまた生まれ変わっても、この指輪を貰ってくれるだろうか？」 「ねえエディ。私、本当にどうしたらいいのか判らないの。今度のことで私は何も自分で決めていないような気がするのよ。ただ、あなたを信じるって言うことを自分で決めただけ。それを決めた時にはその信じるの中に、龍だとか、ナーガラージャだとか、結婚だとかって言うものが含まれるなんて考え付きもしなかったの」 「ヨーコは後悔しているのかい？」 「後悔するも何も、自分が今どういう状態なのかすら理解出来ていないのよ」 「ヨーコ。僕は君を愛している。それは間違いのないことだ。それだけを信じていてくれないか？ その他の事は他人事だと思っていてくれていいから。君はいつも君のままでもいい。そして君自身の心で僕を愛してくれさえすれば、僕は他に何も望まないから」 「私、怖いよ」 「ヨーコ。君は何も恐れる必要なんてない。今君が感じている不安の本質は、変化というものなんだ。今までの自分を取り巻いていた環境と、今の自分を取り巻こうとしている環境の違いに君は不安を感じているだけさ。しかし、人は変化せずには生きられない。だからそれに対応出来る能力を元来持っているものなんだ。すぐに慣れるさ」

「変化？ 本当にそれだけなのかしら？」 「はい。それだけ。だから何も心配いらない。君は何も変わる必要なんてないし、龍のことやナーガラージャのことなんて何も考えないでいいんだ。僕が君を愛しているということだけ知っていてくれれば」 「でも、自分の置かれた状況を理解して、それに順応することってとても大切なことでしょうか？」

「確かに。でも、君が何を知ったところで、君は君でしかないって言うのも判るだろう？ 誰も君に対して君以外のものを望んだりしない。それにもし望まれたとしても君は君自身でいることしか出来ないだろう？」 「それはそうだけど・・・。でも、努力することぐらいは出来るわ」 「努力して僕のを愛する君を変えてしまうのかい？ そうしたら僕のを愛するヨーコがどこにもいなくなってしまう。僕はまた生まれ変わって君を探すことになるんだよ」 「良く判らないわ。あなたの言う愛って言うものが私に

は良く判らないのよ」 「大丈夫。君はただ戸惑っているだけだ。何も急がなくていい。君は今まで通りにしていればいいよ。 環境の変化に対しては僕が全部引き受けるから。僕に任せておけばいいんだよ。 君は僕を信じるって言う決心をしてくれた。それだけで僕は本当に嬉しいんだ。他に何も望むものなんてないよ」 「嘘よ。あなたは龍が目覚めることを望んでいるわ。そしてそれはあなたのまだ知らない環境に入っていくって言うことなんじゃないのかしら？」 「そうかもしれない。確かに僕にだってそれに対する不安はある。 愛する君を危険に晒すことになるからね。でも、僕は今君を手放したくない。これから先だって決して君を失いたくない。今ここで君を元の環境に帰してしまうって言うことは、僕が君を失うって言うことなんだ。そんなこと今の僕には考えられない。僕はこの先何度生まれ変わっても、その指輪を君に贈って、その度に君と幸せに成るんだ」 「幸せって、そんなに簡単に成れるものなのかしら？」 「はい。だって今の僕には君を失うこと以外に不幸を考え付けない。つまり君と居さえすれば、僕は必ず幸せで居られるっていうことだ」 「何だかとても短絡的な感じがするわね。でも、そんなものだったらいいわね」 「そんなものなの。だから君は幸せになりたかったら、今も、そして生まれ変わっても、僕にその指輪をもらえばいいんだ。そうすれば僕の幸せが君をも幸せにするから」 「期待しているわ」私は良く囁んでいないものをまるごと飲み込むようにして、そう言って笑ってみせた。

食事を終えてエディは私をブティックへ連れて行った。そこで彼はとても丁寧にドレスを選ぶ。私は彼の手にとった物を椅子に座って、好きか嫌いかを答えるだけだった。

私には自分がドレスを着て、新聞に報道されるような盛大なパーティーに出ているというシチュエーションを思い描くことが出来なかったので、彼にドレス選びを任せた。

彼は最終的に三着のドレスを選び出し、私はそれを試着してみた。そのどれもがとても上質で着心地の良い物だった。彼は二番目に着てみたドレスをとても気に入ったようだった。私はそのドレスをもう一度試着し、少し大きい分をピンでつまんで直してもらうことにした。それは黒いシルクサテンで出来た、シンプルなロングドレスだ。ちょうど良い裾幅で、足を動かすととても綺麗になびく。私は鏡の前でターンしてみる。襟ぐりの後ろのカットもちょうど良く、柔らかなラインで背中を切り取っている。そのラインは少し上だと野暮ったくなり、少し下がるだけで下品になる、完璧に計算されたラインだった。前の襟ぐりは少しつまり気味のもので、アンディの店で選んだチョーカーをきっと引き立ててくれるだろう。エディは言う。「ヨーコは本当にシンプルな物がよく似合う。きっと明日のパーティーで君が一番綺麗だよ」 私は何と言って良いのか分からなかった。彼はそんな私を優しい目でじっと見ていた。

シルクのドレスを着て本物のダイヤモンドで身を飾る。エディと出会う前の私には考えられない事だった。

私は言う。「エディ。私シンデレラみたい。12時が来るが怖いわ」 彼は笑って言う。「大丈夫。元に戻ったって、僕がガラスの靴を持って、きっと探してみせるから」 私はまた溜息をついた。夢でも見ないようなキザなせりふだ。しかしエディが口にする

ると彼の人柄のせい、育ちの良さなのか、キザには聞こえなかった。

彼は店の人にドレスを直してホテルに届けるように言うと店を出た。

私達は車を止めた所まで歩く。私は彼の居る現実の世界を目の当たりにして、彼の言った環境の変化に対する不安を、改めて感じていた。彼は想像していたよりもはるかにお金持ちだ。はるかにと言うよりも想像できる範囲を超えているような予感があった。環境も価値観も違い過ぎる。理解することなどとうてい無理に思え、私はうつ向いて黙っていた。

車に乗って彼が私に言う。「ヨーコ、どうしたの？」私は正直に言う。「やっぱりあなたが遠い世界の人みたいな感じがするの」彼は私の方を向いて言う。「どうして？」私はうつ向いたまま首を横に振る。彼が言う。「ほら。ちゃんと僕を見て。僕が遠くに居るかい？それとも僕のどこかが変わったかい？」私は顔を上げて彼を見る。彼はパリで出逢った時のままだった。変わったのは私の心の方だ。私は何が何だか分からなくなっていた。

彼は私の手を取ると言った。「ヨーコ。僕が金持ちだったって言う事がそんなに辛いことなの？」私は彼から目を逸らした。彼が続ける。「僕の為に我慢してくれないか？きっとすぐに慣れるから」私は言う。「ごめんなさい。そう言うつもりじゃないの。ただ今までと余りにもすべてが違い過ぎるの。あなたに愛されていることすら私には信じられない出来事なのよ。その上あなたの家族にとっても良くしてもらって……。私ってきっと幸せに慣れていないのね。幸せであればある程何処かから誰かが出てきて『ウソだよ。ほらだまされた。身の程知らずが、お前がそんな幸せに成れる訳ないだろう』って言いそうな気がするの。きっととてもひねくれていて、疑い深い性格なのね」彼が言う。「君は、幸せになってからそれを失うぐらいだったら初めから不幸で居たほうがいって思っているだけなんだ。でも、幸せになってみないと本当のところは判らないって思わないかい？本当は僕だって君が僕の前から消えてしまうんじゃないかって不安なんだ。だって君は何度も僕の前から居なくなっただから。それで僕は何度も何度も君を探して生まれ変わった。そしてやっと今こうして手の届く所に君が居る。

それがとても不思議な感じがする。こうして触ったら溶けてなくなってしまうそうなんだ」そう言って私の頬に触れる。そして続ける。「僕は君が眠っている時に何度も何度も君を見に行くんだ。何故だと思う？」私は首を横に振る。「眠って起きたら君と出逢ったのが夢だったんじゃないかって心配になるから。そして君の寝顔を見て夢じゃなかった、もしこれが夢でもまだ覚めていないから大丈夫だって安心してまた眠るんだ。僕にとって幸せとは、君がこうしてここに居ることなんだ。そして僕は君と居ることですでに幸せを手に入れた。だから金で買える物なんて何の価値もない。ただ君を飾ったり君が喜んだりしてくれさえすればそれでいいんだ」そう言うと彼は悲しそうな顔をした。

私は本当にどうしたらいいのか判らなく成っていた。彼は私の顔をのぞき込んで言

う。「ヨーコ。僕の顔をちゃんと見て。僕を信じて」

私は目を上げて彼を見る。とても美しく、そして繊細で傷つきやすい男の顔がそこにあった。それはパリで知り合ったエディ・リーの顔だった。

多分彼の言うように私の抱いている恐れとは、心地好いものを沢山与えられることによって、それが与えられなくなった時の惨めさだとか不便さだとかにたいするものなのだ。与えられることを恐れているのではない。要するに、手に入れる喜びには、失う恐ろしさが付いてくるということだ。きっと今までの私の中では、手に入れることの喜びよりも、失うことへの恐れのほうがはるかに大きかったのだろう。だから決して分不相応な物を欲しがったりしなかったのだ。彼の言うように素直に幸せを受け入れるべきなのだろう。彼に与えられる幸せだけでなく、彼の言う龍も含め、すべてをまるごと受け入れようと思った。何故なら、その時の私は、受け入れるものと受け入れないものを選択するだけのエネルギーも知識も持ち合わせていなかったのだ。つまり、すべてを拒絶するか、すべてを受け入れるかのどちらかの選択肢しか無かった。その時の私もまたエディを失いたくなかった。それが愛なのかどうかはまだ判らなかったが、彼は確かに私にとって特別だった。

私は、エディの横顔を見ながら彼の言う龍の姿を思い浮かべ、目を閉じてそれをそのまま飲み込むイメージを描いた。私はその龍の姿の中に、彼と居ることで起こる良いことや悪いことすべてを重ねてまるごと飲み込む事によって覚悟を決めようとしたのだ。

私は大きく息を吸い込んでから言う。「エディ、ごめんなさいね。きっとあなたが言ったようにすぐに慣れるわ。私はあなたを信じてはいるの。ただ、自分の幸せが信じられ無いだけなの。本当よ。本当に信じられないぐらい幸せなの」彼は私を抱きしめた。私の中でまた何か動いた。私は驚いて彼の手を振り解く。彼はそれに対して何も言わずに前を向いてエンジンをかけた。

私は彼の横顔を見る。何事もなかったように彼が言う。「ドライブに行こう」私はふと思いついて彼に尋ねた。「エディ。あなた龍の起こし方を知っているの？」彼は即座に答える。「はい。僕は龍使いだからね」龍と龍使い。私はシートにもたれかかり目を閉じた。私はその方法を尋ねなかった。それを知ることが怖かったからかも知れない。

車は街中を抜け、灰色の高速道路を走り、それを降りて小高い丘に登った。眼下には、高層ビルやヨーロッパ風の建物が渾然一体となって立ち並ぶ香港の街が広がっていた。その間を縫うように走る今通って来たばかりの高速道路や、遠くには頂に白い屋敷のある小さな緑の丘も見えた。そして沢山の船の休む港も見える。

車を止めて彼が言う。「ヨーコ、見て。これが僕の街、香港だ」車を降りて私は彼の街を見た。「とても綺麗ね。いろんなものが入り交じっているのに、どれもが巧く溶け合っている」私が言った。彼は嬉しそうに頷いた。「何時か君とこの街で暮らそう。沢山子供を作って幸せな家庭を作るんだ」私は言った。「次に生まれ変わった時にね」

彼は私を見る。私は街を見ていた。彼が言う。「龍の事なんか忘れてこのまま二人で暮らそうか」「そうね。そう出来たらとても幸せでしょうね」彼は私の肩に手を回して髪に触れる。泣いているようだった。私は彼の肩に頭を乗せじっと街を見ていた。

「ねえエディ。私達の帰る所って、此処なのかしら？」 「ヨーコ。君の帰る場所は僕の居る所だ。そして僕の帰る場所は君の居る所なんだ。それでいいじゃないか」 私は頷いた。そして彼の手をそっと握った。彼の手はとても暖かかった。

夕日に照らされた香港の街は何処となく寂しげで、しかも美しかった。私にはそれがまるでエディそのもののように思えた。

エディの悲しみを感じた。彼もまた恐れていることも理解できた。彼の心が揺れているのも私には感じられた。

彼の悲しみを手の中で遊びながら私は彼の前に回って言う。「ねえ、お願いがあるの」
彼が私をじっと見る。 私は彼の目を見つめて言う。「私が敵に捕らわれて私の龍が欲望によって目覚めようとしたら、あなたのこの手で私を殺して」私はそう言って彼の手を取り自分の首に当てる。 彼は何も答えない。 彼の瞳の中に私が居るのが見えた。私は続ける。「私はあなたが言ったように、私の龍が目覚めることによって世界を破滅に導いたりしたくない。 私の為に地震が起こったり、沢山の人が死んだりして欲しくないのよ。判るでしょう？」 彼が頷いた。 「あなたが龍使いだから頼んでいるんじゃないの。 もちろんそれがあなたの仕事なんだろうけど、でも私はあなたに、エディに殺されたい。 そしてまた生まれ変わってあなたと巡り会いたい。 輪廻を繋ぐのよ。だから私を一人にしないで。 あなたがピストルで私を殺すのなら、いつも弾の届く距離に居て。 ナイフで私を殺すのならもっとそばに」

彼の目から涙がこぼれた。私はうつ向いて涙をこらえた。そして彼に笑顔を作ってみせる。「私、怖くなんてないわ。だから泣かないで。それに、私の龍はまだ目覚めてすら居ないのよ」 私はそう言い終わると、少し彼から離れて丘の上を歩いた。

冷たい風が火照った頬に心地好かった。 私は一人で、フォンと龍山の事を思い出していた。 風の匂いや、光の色をも思い出せた。 そしてその時の感情に胸が締め付けられる感覚も思い出した。

僧形の彼が林の中で泣いていた。今のエディとそれが重なった。そしてその後の寂しい死の姿を見ていた。 私の思考はやはり死ぬ為に生まれていると言うところに辿り着いてしまう。 そして生まれ変わる為に死ぬ。 結局陰陽両極は一つなのだ。

しばらく歩いて振り返ると、エディがロワールの時のように青い光に包まれて立っていた。 それを見て私は彼の傍に戻る。 彼の光の中に入って見た。 ロワールで思ったようにその光は冷たくなかった。 その時私には、その光が彼そのものである事が理解出来た。

彼の光の中はとても心地好かった。 私は彼の手を取る。 彼の頬を涙が伝う。 私はそっとそれを拭う。

彼が言った。「ヨーコ、僕に守りきれるかどうかは判らないけど、でも僕はやってみる。君のこの暖かさを失いたく無いんだ。 もし、もしも、僕に守りきれなかったら君の言うように僕のこの手で君を殺す。 そしてまた生まれ変わって君を探すよ。 必ず僕は君を見つける。そしてまた一緒になろう。 龍なんて居なければ良かったのに。そうすれば僕達はただの夫婦で居られた」 「そうしたら、あなたは私を見つけられなかったわ」 彼は首を振る。「いや、僕はきっと君を見つけたはずだ。何故なら、僕は君を愛しているからだ。僕達は愛し合う為に生まれ変わった。だから龍が僕達を必要としたの

さ」「発想の転換ね」「はい。だって龍の為に愛し合うなんて間違っているよ。僕が欲しいのは龍なんかじゃないんだもの。僕は人間の女性であるヨーコが欲しいんだ。

君の暖かさに触れてそれが判ったよ。もう迷わない。逃げたって同じ事だ。僕は君を愛してる。それでいいんだ。そして君が龍を背負っているのならそれごと僕は愛する。そしてその為にいろんな問題が生じるならそれに立ち向かえばいい。僕はどんな事をして君を失いたくない。それがたとえ君を殺す事でも。そうする事によってまた君と会えるなら僕は恐れない」私は頷いた。

「行こう」彼はそう言うと私の手を取って車に戻った。

私には彼が「生きよう」と言ったように聞こえた。

ドアを開けて私を乗せると自分も運転席に乗ってエンジンをかける。そして私の方に身を乗り出して軽く口付けをした。

彼は車を発進させると言った。「夕食には何を食べたい？」私は答える。「イタリア料理がいいわ」彼は「OK それならいいお店がある」そう言って丘を下りた。

香港 2

彼の連れて行ってくれたレストランは、とても賑やかな繁華街を抜けた所にあった。私達はその街の手前で車を降り、少し歩いた。彼は人混みの中を私を抱えるようにして歩く。彼が特別なのか、香港の人が皆そうなのかは判らないが、彼は事ある毎に私の体に触れる。日本ではとても恥ずかしく思える事なのに、出逢ったのがパリだったせいか、彼のそう言う行為を私は自然に受入れていた。そして彼に触れられている事は、私にとっても心地好い事だった。

香港の街や人はどこかエキゾチックであきれるほどエキサイティングだった。まるでB級映画のようだ。洗練とは対局にあって、何もかもを包括している様に思えた。彼はいろんな店を冷やかしながら歩き、とても小気味よい言葉で店の人とやり取りをする。私には言葉の意味は判らないが彼が楽しんでいることはとても良く理解出来た。

彼は私にスワトウのレースで出来たポーチや、可愛いマスコット人形を買ってくれた。「ヨーコ。香港らしいだろう」茶目っ気たっぷりに彼が言う。私は笑って答える。「本当ね。あなたが買ってくれる物がみんなこんな物なら私はちっとも悩まなくて済むのに」彼は笑った。「そうか、君はかわいい物が好きなんだね」「ええ。少女趣味なのよ」二人で笑った。そして歩いてレストランへ行った。

そこは黒を基調にしたインテリアで統一されていて、落ち着いた感じの店で、何組かのカップルが食事をしていた。テーブルには銀色に輝くピューターの花瓶に、一輪づつ違う花が飾られている。

案内された席に付くと彼は言った。「ヨーコ。此処は香港人達のデートスポットなんだよ。でもあまり知られていないんだ」「穴場なのね。あなた、身持ちが堅かった割に良く知っているわね」「一般常識だよ。それに料理の腕も一流なんだ」「何が美味しいの?」「何でもさ。素材が新鮮だからね」「じゃあ、あまりしつこくないソースの物を頼んでちょうだい。そうねスパゲッティボンゴレビアンコなんかいいかしら」彼はメニューを見ながら言う。「そうだね。後は何にする?鳥と魚と肉と」「魚にして」

「じゃあ、後は僕に任せてね」頷きながら私は、きっと沢山の料理が運ばれて来るのだろうなと思っていた。そしてやはり運ばれてきた料理は食べきれない程の品数だった。それでも彼はいつものように片っ端から片付ける。多分残ることはないだろう。私達は食事をしながら話した。

「ねえ、エディ。もしかしてお兄さんのお店の在ったショッピングセンターって、全部お兄さんの物なの?」彼はスパゲティを食べながら答える。「いや、アンディの物は建物だけだよ。土地は一族のものだ」私は言う。「一族って?」彼はフォークを置いてナフキンで口を拭いて言う。「おじいさんとかそう言うの」私はうんざりした顔で尋ねる。「もしかして、それって財閥って言う物なのかしら」彼は頷く。「あなたの一族で後どんな物を持っているの?」彼はまるで自分の指が五本有ってその名前を告げるように淡々と答えた。「百貨店、病院、ホテル、劇場、カジノ、美術館もあったかな。そう言うのが世界各国にいくつもある」私は段々不機嫌な声になって言う。「あなたの物は幾つぐらい在るの?」彼は即座に言った。「全部僕の物になった」私は驚いて言う。「どう言う事?」彼が私の様子を見てすまなそうに答える。「僕が聖龍を継いだから」私は頭を抱えた。「ヨーコ心配しないで。実務はアンディがしてくれるよ。彼はそう言うのに向いてるんだ」私は首を振る。「そう言う問題じゃなくて」彼は笑って言う。「ヨーコと話していると金持ちであることがまるで罪だったような気がしてくる」

私はそれに気付いて笑った。「本当。確かにそうだね。あなたがどんなにお金持ちでも悪いことなんて何も無いんですものね。もしかしたら私って共産主義者だったのかも知れないわね」彼は大声で笑った。「ヨーコは本当に面白い言い方をする」

私は彼の笑いが収まるのを待って尋ねた。「それで私はどうすればいいのかしら?」彼はよく判らないと言う風に首を傾げる。私は続ける。「その大金持ちの聖龍の妻としてよ」彼は優しく微笑んで言った。「そのままがいい。ただ僕の傍に居るだけで。一族の者はすべて、龍を背負った君が居るだけで満足するだろう。大龍が認めたんだ。その上君は美しく頭も良い。それにやっと思も妻を持った。みんな僕の結婚を待っていたからね。だからみんな喜ぶよ。明日祖父の誕生パーティーで披露すればいいだけさ。祖父はそれを見越して僕達の為に自分の誕生パーティーを繰り上げたんだ。世界各国のナーガラージャ達が集まって来るから、ちょうど良かったんだ」

彼の穏やかな笑顔を見ていると、私はそんなものかなと思った。そして料理を口に運んだ。けれど実際にパーティーに出ると、そんな簡単なものではないと言う事が判った。しかしその時口に運んだ物は彼が言ったように確かにおいしいイタリア料理だった。

私達は食事を終えホテルへ戻った。部屋には昼間買った物が届いていた。それにはアンディからの綺麗な花束が添えられていた。

「エディ。あなた達兄弟ってとても仲がいいのね」 彼は微笑んで答える。「そうだね、いつもアンディは僕の味方だったよ。それに僕は彼にずっと憧れていた」 私も微笑んで言う。「あなた達ってとても良く似ているわ。顔もしぐさも」 彼は肩をすくめる。「兄弟だからね」 私は頷いた。

私は貰ったお花を花瓶に生け、ドレスをクロゼットに掛けた。チョーカーとイヤリングを何処にしまおうか迷っているとエディが言った。「大丈夫だよ。何処に置いても。このホテルは安全なんだ」 私はデスクの引き出しを開け、そこに入れる。私は振り向いて言う。「もしかしてこのホテルもあなたの物なの？」 「残念ながらそうなんだ。でも気にしないでいいよ。名前だけの事だし、まだ正式には僕のものじゃないかも知れないから」 「でも近いうちにあなたの物に成るのね」 彼は頷く。「でも僕はお金を儲ける必要もなくなったし、使える額もたかがしれている。僕達二人が活動するのに不自由がなければいいんだから、僕のものであろうと誰のものであろうと関係ないよ。それに何も出来ないし。何をする気もない。そう、名誉オーナーみたいなものなんだ。聖龍の名前があるかぎりそう成るように決められているだけだから」 私は何だか大変な事に成って来たと思った。

窓から見える夜景はたくさんのネオンに彩られ、夕暮れ時と違ってとてもゴージャスな感じがした。

私はお風呂で彼にオイルマッサージをして貰い、リラックスした。彼も髪を下ろしバスローブを羽織ってとてもリラックスしていた。

私は言う。「とうとうあなたに付いてこんな所まで来てしまったわ」 彼が微笑み、言った。「違うよ来たんじゃないで僕の前へ戻ったんだろう」 私は頷いて言う。「そうだったわね。この夢はもう覚めないのね」 彼が笑った。「今までの三十数年間が長い長い夢だったんだ」 私は言う。「じゃあ、やっと目が覚めたばかりなのね」 彼は私を抱き寄せるとそっと口付けした。

私は彼を求めていた。そして彼も私を求めていた。私達はその夜、初めて二人で同じベッドに入り、そっと抱き合いながら眠った。それだけだった。それだけで私は満たされていた。生まれて初めて他人によって私は満たされていた。

目覚めると彼はベッドに居なかった。私は上体を起こし、窓の外を見た。夕べのゴージャスな夜景と違い、さわやかな港が見えた。香港の街は本当にエディそのものだ。エディが香港の街その物なのかも知れない。

私はベッドを降りると、シャワーを浴びて身繕いをした。そしてリビングルームの扉を開けるとエディが笑って言った。「おはよう。気分はどう？」 私も笑い返す。「まずまずよ」 「良く眠れたかい？」 私は頷き言う。「あなたは？」 彼は首を振って言っ

た。「一晩中君の寝顔を見てたんだ」「嘘でしょう？」「半分はね。でも随分長い間見てたような気がするよ」「やだ」私が言った。「ヨーコはとても安心して眠っていた」私は茶化して言う。「夫の胸で眠ってどんな不安があると言うの？」彼は立ち上がって私を引き寄せた。「僕の妻なんだ」私は彼に口付けして言った。「多分ね」彼が笑った。そして私も笑った。

私はレストランで朝食を食べながら、仕事をどうするか考えていた。そしてしばらく考え、彼には相談しないで結論を出した。辞めるしか方法がなかった。このままエディと居れば会社に行くことは不可能でもあり、その必要もなかった。後のことは後で考えれば良い。何かあっても自分一人で生きるくらいの事は出来そうに思えた。

食事を終えて私達は部屋に戻った。10時を少し過ぎた頃だった。私は日本の会社に電話をかけ、同僚に仕事の引き継ぎをし、上司に電話を回してもらった。私は退職の旨を告げる。彼は一応引き止めてはくれたが、私には形式だけだと言う事が分かっていた。彼は最後に退職願いを出すように言って電話を切った。

私は机に向かって退職願いを書く。『一身上の都合により』変な感じだった。一身上の都合って何だろう。私の龍が龍使いに捕まったとでも書こうか。ペンを持ってボーッと窓の外を眺めた。

それまで黙っていたエディが後ろで笑い出す。私が振り返ると彼はソファで笑い転げて居た。「そう書いておけば。事実なんだから」私は驚いて言う。「エディ。あなた何故私の考えている事が判るの？」彼は笑うのを止めて答える。「パリに居た時からずっと繋がってるんだよ。僕達は一つなんだ」私は言う。「それは構わないけど、覗き見は良くないわ。あの時も言ったはずよ」わざわざ相談する必要なんてなかつたのだ。彼は素直に謝る。「ゴメン。でもさっきの退職理由はなかなか良かったよ。私の龍が龍使いに捕まりました。だから会社を辞めますって書けばいい」

私は首を振って見せ、前を向き直って『一身上の都合により』と言う普通の退職願いを書き終えた。印鑑を押し、丁寧に折り畳んで封筒に入れ封をした。そして宛名を書き、裏に自分の名前も書いた。

私はそれを持って立ち上がって言った。「エディ。これをだすのってどうしたらいいのかしら？」彼も立ち上がって答える。「フロントに頼めばやってくれるよ。ついでに街へ行こう」私は頷いてバッグを持ちジャケットを着た。

彼がフロントの人に何か言うと丁寧に私の退職願いを気づかってくれた。彼はウインクをして言う。「OK これでもいい」私はフーッと溜息をついてから顔を上げ、彼に向かって笑いかけた。「エディ。これでおしまいよ。もう何もないわ」あなただけって言おうかと思ったが、止めにした。彼は大きく頷くと言った。「大丈夫。僕が居る」そう言ってもう一度ウインクして見せた。

彼には私の心が判る。私には彼の心が判っているのだろうか。自分でもよく判らなかつた。多分まだ私には他人の心を読むだけの余裕がないのだ。何時かきっと私にも判る時が来るのだろう。それについても考える事を放棄した。

私達はエディの車に乗って街へ出かけた。エディはとても綺麗な靴と、小さなバッグ

をペアで買ってくれた。私はそれに対して何も言わなかった。それにしても彼はとても楽しそうに物を運ぶ。

その後彼の家へ行った。門を抜けてから長い坂道を車で登る。お爺さんもお母さんも今夜のパーティーの用意で外出していた。私は何人かのメイドや執事の様な人に迎えられた。丘の上に建つ彼の家は歴史のあるホテルのように見えた。

彼は私を誘うと、一つの部屋の厚い木の扉を開けた。そこには完璧に美しい龍の絵があった。彼はその絵の前に私を座らせ、自分も隣に座った。

「これが今まで僕の恋人だったんだ」「私の龍ってこんなに美しいの？」彼が微笑んで言う。「とんでもない。こんな物じゃないよ。君の龍に比べればこんなのは子供の描いた絵にしか過ぎない」私は溜息をつく。彼が続ける。「それに君の龍はどんどん成長するんだ。今は未だ目を見ていないけれど、目を開けて動き始めたら、それは例え様も無いぐらい美しいと思うよ」

私はソファの背にもたれてしばらく目を閉じた。目を開けていると龍の絵に引きずり込まれそうな気がしたのだ。しばらくそうしていると、彼が私の肩に触れて言った。「ヨーコ。僕の部屋へ行こう。荷造りをしておかないといけない」「荷造りって何？」

彼はあきれたように言う。「明日僕達は日本に発つんだよ。忘れちゃったの？」私はそこで初めて思い出した。「そう言えば、お爺様がそんな事を言ってたわね」私の頭は日常から離れてしまっていた。「大丈夫。僕に任せておけばちゃんと連れて行くから」私は悔し紛れに言う。「あなたが龍使いですものね」彼は笑ってみせた。「ウイ マダーム こちらへどうぞ」そう言って私の手を取って彼の部屋へ案内する。

彼の部屋は小さな建売住宅が一つ入ってしまいそうな広さの中に、とても趣味のいい家具がそろえられていて、壁一面には本が並んでいた。本の背中にはあらゆる国の文字が書かれている。その上ベッドルームは別にあった。

「こんな所に一人でいて寂しくなかったの？」「自分の部屋に居て寂しがるとはなんて居ないだろう？」それはそうだ。「こんな所に住んでいたら、ホテルはスイートルームじゃないと息が詰まっちゃうわね」彼は笑った。私は続ける。「でも私は寂しいだろうな」「大丈夫。君を一人にしたりしないから。僕と二人だったら寂しくないだろう」私は素直に頷いた。

彼は幾つかのトランクケースに荷物を詰める。私は彼の本棚から日本の神話についての本や龍についての本を選んで彼の荷物に入れてもらった。

「あなた、日本語が喋れるだけじゃなくて読む事も出来るのね」「平仮名とカタカナさえ覚えれば後は僕の国の文字だからね」なるほど。「ねえ、あなたいったい何か国語ぐらい話せるの？」「広東語、北京語、上海語、英語、フランス語、後ドイツとイタリアが簡単な会話程度なら大丈夫。それにヒンドゥー語と日本語かな」私は呆れてしまった。「私、何だか自分が物凄く馬鹿だったような気がするわ」「どうして？」「だって私、六年も学校で英語を習ったのに何も判らないし、日本語だって自分の伝えたい事をちゃんと伝えられているのか怪しいものよ」彼は少し悲しそうな顔をして言う。「自国語だけで暮らせる民族は幸せなんだよ。それに君が日本語だけしか話せなくても、僕達には何の不自由も無いじゃないか」私は少し意地悪く言う。「あなたは私が何も言わなくても判るものね」彼が笑う。「そう。僕の趣味は覗き見だからね」私も笑った。

彼は荷物を先に送ると言うので、私は彼の本を一冊だけ借りてバッグに入れた。眠くなくて暇な時に読むつもりだった。彼には荷造りの才能があって、あっと言う間に三つのトランクケースに、驚く程の荷物をきちんと詰め込んだ。そして執事と呼ぶと荷物を送るように告げる。何人かの若い男の人がやってきて荷物を運び出した。私はその様子を不思議な感じで見ている。そして言う。「まるで映画を観ているみたいよ」彼はまた少し悲しそうな顔をした。私はそれでちょっと反省した。彼が悪いわけじゃない。生きているシステムが違うだけなんだ。

私は元気を出して言った。「エディ、私おなかですいたわ」彼は微笑むと言った。「何が食べたい？」「天麩羅うどん！」「日本に着いたら幾らでも食べられるだろう？」

「今食べたいの」彼は笑って言った。「OK 香港にもちゃんと日本料理が食べられる店ぐらいある。そこへ行こう」私は我俣を通した事で何だかいけない事をした様な気がした。しかし彼はとても嬉しそうにはしゃいで日本料理店へ連れて行ってくれた。

食事を終えて私達はホテルに戻った。彼は私の為に美容院の予約を取った。「日本人の美容師が居るから大丈夫だよ。プロにマッサージしてもらって髪をセットしてもらったらいい」私は頷いた。自分は用が有るからと言ってボーイを電話で呼び、私のドレスや靴を彼に持たせ美容室まで案内させた。

私はボーイと一緒に美容室へ行った。とてもゆったりしたサロンだ。入口を入ると、とてもシックな感じの女性がボーイの持っていたドレスを受け取り、「田中様ですね」と言ってすぐに個室へ案内してくれた。私は何も言わずに席に付く。「私は中山と申します」「よろしくお願ひします」

彼女はドレスをハンガーに掛けて言った。「素敵なドレスですね。髪は柔らかな感じのアップにしましょうか？」私は「そうしてください」と言った。彼女はじっと私の髪を観ていた。そして言った。「エステのご予約も頂いておりますのでゆっくりお寛ぎください」

私は言われるままに服を着替えてすべてを任せる。三人の美容師が一度に私の手と足と顔に施術した。とても気持ち良くて眠ってしまいそうだった。私は何となくお金持ちも悪くないなと思った。

長い時間をかけて出来上がった自分を鏡で見た時私は本当に驚いた。とても自分とは思えないレディがそこに居た。

個室を出るとタキシードで盛装したエディが迎えに来てくれていた。彼も少し驚いたようだった。「ヨーコ。とっても素敵だよ」そう言って私の後ろに回り、アンディーにもらったダイヤのチョーカーとイヤリングを付けてくれた。

美容室の大きな鏡に写った二人はとてもゴージャスに見えた。私が言う。「この二人はいったい誰なの？」彼が答える。「李聖龍とその妻さ」私は彼の方を向いて笑う。「エディは何処へ行ったのかしら？」彼が笑う。「さあ？」

彼は私の着て来た服や靴を部屋に運ぶようにボーイに告げると、写真館へ私を連れて行った。

二人で並んで写真を撮った。彼はそれをすぐに仕上げるように言うので部屋に戻った。

三十分程で写真が出来上がり、彼はそれを金で出来た写真立てに入れ、自分で綺麗に包装した。私達は彼の用意した花束と写真立てを持ってパーティー会場へ向かった。

会場はそのホテルの最上階だった。会場には沢山の人が集まっていた。良くは判らなかったが後で聞くと延べ人数にして千五百人から二千人位の人達が集まったらしい。

私達はまずお爺さんの所へ行って挨拶した。エディは私からのプレゼントだと言って花束を渡す。写真立ては彼からのプレゼントだった。私はただ微笑んで「おめでとございます」とだけ言った。お爺さんはとても優しく笑ってくれた。そしてエディからのプレゼントの包みを開け、二人の写真をとても喜んでくれた。

次から次へと招待客が挨拶に来る。エディはその一人一人と挨拶を交わす。私はただ微笑みを絶やさないう気を付けていた。彼が教えてくれる客の肩書きは、私をうんざりさせて余り有るほどのものだった。

少し挨拶の客が途切れたところで彼は、私を従兄弟に紹介してくれた。従兄弟はインド人でアルンと言った。エディの母方の従兄弟で、彼とは年が同じだ。小さい時からとても仲が良かったらしい。

彼はエディより十センチ以上背が高く体もガッチリしている。髪は短く刈り込まれ、髭をたくわえている。顔はどことなくエディに似ていたが、受ける印象は全く違った。肌の色はよく日焼けした日本人ぐらいの色で、エディが美術の先生ならアルンは体育の先生と言った感じだ。しかし、タキシードで正装した彼はエディとはまた違ったダンディズムを感じさせた。

エディが日本語で言った。「アルン。僕の妻を紹介しよう。ヨーコだ」アルンは私の方を向いて微笑み、そして言った。「初めまして」そしてエディに向かって言った。「とても魅力的な人だ。エディ、待った甲斐があったな」そして私に手を差し出した。私は彼と握手すると。「初めまして。ヨーコです。よろしくお願いします。とても日本語がお上手なんですね」エディが言う。「アルンはもう十年も日本に住んでいるんだ。僕が日本に居た時も随分世話になったんだよ」私は頷いて言う。「二人で悪い事をいっぱいしたんでしょう？」エディは笑う。「いえ そんな事 無いです」アルンは緊張した感じで、何だか中学生のように答えた。私は笑いをこらえて尋ねる。「何時こちらへ来られたんですか？」アルンはとても実直そうに答える。「昨日、船で着きました」私はエディを見る。エディが言う。「例の船で来たのか？」アルンはほっとした様に答える。きっと私に気を使っているのだ。「とても良かったよ。客船としては超一流の物だ。快適だったよ」エディが尋ねる。「帰りはどうするんだ？」アルンが答える。「聖龍に任せるさ」私には意味が判らなかった。「ヨーコ、船で日本に行こうか？」「アルンの乗ってきた客船？」エディが頷く。「三日掛かるけどゆったりとハニムーンを楽しむって言うのも良いと思わない？」私は反対する理由もないので頷いた。エディは嬉しそうに笑うと言った。「アルン。僕達も船にするよ」アルンは頷くと私に「失礼」と言って離れて行った。

私はまたエディと一緒に沢山の人が集まっていた。言葉が解らないと言う事はこんな時笑顔を作るだけで良いのでかえって便利だった。しかし後で部屋に戻った時に私の顔は元に戻らないほど疲れていた。

三時間ほど経った後エディが言った。「ヨーコ。疲れただろう」私は素直に頷いた。

彼は私を部屋に送り届けると「まだ大切な用が有るから」と言って一人で出て行った。私はそのままベッドに倒れ込んだ。

余りにも特別すぎる。私は誰かに文句を言いたい気分だったが、疲れと眠気には勝てなかった。私はそのまま朝まで眠った。

「ヨーコ！ ヨーコ！」エディの声で目覚めた。彼はさっぱりとした顔で私の肩をゆすっていた。私が言う。「おはよう」彼はとても素敵に笑うと言った。「そのまま寝ちゃったんだ」私は頷いて言った。「とっても、とっても疲れちゃったんだもの」彼は笑顔のまま言った。「夕べ、ナーガラージャの会合で僕達のことが正式に認められたよ。みんな君の事をとっても気に入っていた。でもこの姿を見られたらダメになっちゃうかも知れないけど」私はベッドに起き上がって言った。「だって、パーティーなんて初めてだったのよ」彼は私の頭を撫でると言う。「今朝の君はとてもキュートだよ。ほら、早く着替えてシャワーを浴びておいで。食事に行こう」

私はドレスの裾をたくし上げてベッドを下り、バスルームに行った。ゆっくりと髪を洗いシャワーを浴びる。そして歯を磨き服を着て化粧をした。

リビングルームに出るとエディは煙草を吸っていた。私は瞬間的に、なんの根拠もなく彼が誰かと寝てきた事を理解した。「あなた誰かと寝て来たのね」彼は少し考えて頷く。「僕だって正常な男なんだ」私も頷いた。

何故か嫉妬心は沸いてこなかった。それより彼の浮気が判った事の方が不思議だった。私には彼がどんなふうに女の人を抱くのか想像できなかった。彼は私に対するのと同じように他の女の人にも接するのだろうか。きっと優しさは変わらないだろう。それは彼の本質だからだ。しかしどんなふうに女の人を誘うのだろうか。想像出来なかった。私はいつも彼がするように彼の心を覗いてみた。そこには、私に対する愛と思いやりが満ち溢れていた。そして後ろめたさなど何処にも無かった。私は確かに愛されている。それだけで良い様な気がした。

私は笑顔を作って言う。「食事に行きましょう？」彼も素敵に笑うと頷いた。

朝食を終えて彼が言った。「ヨーコ。僕は今日、どうしてもしなければいけない仕事があるんだ。一人で此処に居てくれるかい？」私は頷いて答える。「ええ、構わないわ。荷物をまとめたりしなくちゃならないし、部屋からの眺めもとても綺麗だから、飽きる事も無いと思う」彼は微笑んで言う。「船は夕方5時に出る。僕は3時までには戻ってくるから。食事はルームサービスを取っても良いし、此処に来て何かを頼んでも良い」私は笑って言った。「大丈夫よ。子供じゃないんだから一人でできるわ。これでも私、立派な社会人だったのよ」彼は笑って私の手に触れた。そして言う。「そう。僕のヨーコはしっかりしてるんだ。眠気には勝てないけどね」私は彼の手を握り返して言う。「でも、誰にも迷惑は掛けないわ」彼は頷いた。

彼は私を部屋へ送り届けると一人で出て行った。

私はバルコニーに出てベンチで寛ぐ。柔らかな日差しを浴びた香港の街はとても優雅

に見えた。私は一人でパリに行ってから事を、一つずつ丁寧に思い出した。何もかもが映画の中の事のように思えた。私は何処に居るのだろうか？三十年間自分だと信じていた私が、何もかも間違っていたような気がした。しかしエディの記憶だけはどんどん鮮明になって来る。彼がどんな時にどんな顔をしてどんな声で話したかまで、私には思い出せた。その記憶は立体的で手が触れられる程だった。まるで3Dの映画だ。

それで私に判った事は、ただ彼が私を愛していると言う事だけだった。そして私も彼を愛し始めていた。

彼は私の事を妻と呼んだ。私は初め冗談だと思っていた。しかし実感は無いが、私は彼の妻であるらしい。私は左手の指輪を見た。確かな存在感を持ってそれはそこにあった。それは朝の光を浴びて七色に輝いていた。私は彼の妻になってから彼を愛し始めていた。愛されることによる満足感では無く、本当に愛し始めていた。

私はしばらく愛について考えた。今まで何度か彼に愛してると言ったが、それは本当の愛だったのだろうか。彼に充たされた事を伝えなかったのではないだろうか。私は彼に嘘をついたのだろうか。いや、違う。私の中の愛と言う言葉にはそういう意味も含まれているのだ。そして今思う愛は少しそこから成長し始めている。私は彼のすべてを受け入れつつある。彼の言う龍の話も、彼に付随する色々な事も。しかしそれは彼自信を愛しているからだ。私の知っているエディリーを愛し始めているのだ。

では、私の知っているエディリーとはどんな男なのだろうか。香港の財閥でもなく、もちろんナーガラージャなんて言うものでもない。まして李聖龍なんかであるはずもない。ただ美しく繊細で脆い。そして私を全身全霊で愛してくれる。生まれる前から私を愛し続けている。私が何をしようと彼は私を受け入れるだろう。

私はそんな彼に何を返せるのだろうか。私には何も思い付かなかった。そして思った。愛に対して何かを返すべきなのだろうか。私は一人で首を振った。そんな事は出来はしない。そんな事を考える事すら間違っているように思えた。彼の愛に応えるのではなく、自分の心に忠実に彼を愛せば良い。愛は誰の問題でもなく、自分自身の問題だからだ。愛と恩は違う。恩返しとは言うけれど愛返しとは言わない。愛とは愛し合うことで、奪うものでも与えるものでもない。

私は別れた夫の事を思った。彼を私は愛していたのだろうか。彼は私を愛していたのだろうか。

今となっては思い出せもしなかった。愛のない生活だったのかも知れない。今私がエディに対して持っている気持ちが愛ならば、彼の浮気を許せなかった私は、彼を愛してはいなかったのかも知れない。人並みに恋をして結婚し一緒に生活をした。ただ知識として知っていた結婚生活を忠実に実行しただけだったのだ。

私は別れた夫に申し訳ない気持ちに成った。彼を浮気に追いやったのは私だったのだ。きっと彼も愛を求めていたのだろう。しかし彼も私を愛してはいなかった。それが今の私には理解出来る。

彼も今の私とエディのような愛があることを感付いていたのかも知れない。そしてそれを探していたのだろう。彼はもうそれを見つけたのだろうか。あの時の愛人がそうだったのだろうか。私には判らなかった。そして今はそれを知る必要もなかった。

これから何が起こるのだろうか。李聖龍とその妻。私とエディの事だ。私にはその意

味さえ理解出来ていない。パーティーに集まった沢山の人達。ナーガラージャ。そして愛によって目覚めた龍と、それを使う龍使い。

私は煙草に火を付け大きく吸い込んだ。そしてフーっと音を立てて吐き出す。

「何があっても失うのはこの命一つだけよ」私は声に出して言ってみた。そして煙草を一本吸い終わると部屋に入って荷物を片付けた。

私はエディのように才能がないのか、荷物を片付けているのか散らかしているのか判らない。何度もトランクから出したり入れたりを繰り返す。気付いたら午後1時を少し回っていた。

おなががすいたので散らかしたまま一人でレストランへ行った。そして軽く食事をしてまた部屋に戻る。

今度は巧く行きそうだった。私はエディについて考えながら荷物を詰めた。

彼はどんなふうに女性を抱くのだろうか。私はまだ知らなかった。彼に抱きしめられると私の中で何か動く。そして私はいつも彼から逃げてしまう。彼はそれを知っていてそれ以上は何もしない。

私の龍は本当に目覚めるのだろうか。私は彼にどうやって龍を目覚めさせるのか尋ねなかった。彼が龍使いなんだ。彼に任せれば良い。

そう言えば、別れた夫は私をどんなふうに抱いたのだろうか。それも良く思い出せなかった。

とても不思議な感じだ。目が覚めた後、夢の記憶がどんどん遠退くように、エディと出会うまでの私の生活の記憶がどんどん遠退いてしまう。きっとこれからの私に必要な無い事なのだろう。それで良いような気がした。もしかして私はとても楽天的な人間だったのかも知れない。今までそんなふうに思ったことなど無かったのに。エディに受け入れられている安心感のせいだろうか。

とても巧く荷物が纏まった。彼にもらった二着のドレスも巧く入った。私は一人で微笑んでトランクに鍵を架ける。その途端になんの根拠も無く、私の中から何かとても大きな不安感が沸いてきた。それは大きなショックと危機感を伴っていた。私は焦った。私は目を閉じて私の中に耳を澄ませた。逃げるべきだと思った。私は逃げる事を欲していた。

私は急いで部屋を出て廊下を走る。6機あるエレベーターの一つがゆっくり上って来ていた。私はボタンを押すのを止めた。そして非常階段で一階だけ下に降り、下りのボタンを押した。

上って来ていたエレベーターはさっきまで私の居た階に止った。そしてすぐに下りてきた。私は中に誰も居ないのを確認しエレベーターに乗り込んだ。

私達の部屋の在った階には他の客はいない。多分、今頃私を探しているのだろう。私はエレベーターの中でそう思った。エレベーターの動きがとても遅く感じられた。私は個室の中で地団駄を踏むようにしてロビーに着くのを待った。

ロビーに着いてドアが開いた時、私は大変な事に気付いた。私は逃げるべき場所を知らなかったのだ。私は取敢ずロビーの柱の影に回り、立ちすくんだ。そしてエレベーターの方を覗き見る。

五分程して私の居た階にエレベーターが止り、そしてゆっくり下りてきた。

怖かった。とても恐ろしくエレベーターから見えない方に回り、隠れた。足が震え、心臓が百メートルを全力疾走した後のように高鳴った。

私は目を閉じてエディを強く求めていた。そうする事より他に何も思い付かなかった。

「助けて。エディ！ 助けて」

突然閉じた目にエディの姿が見えた。彼は車に乗っていた。そして彼の目にはもうこのホテルが見えていた。その時、二人の白人の男が私の目の前に立った。彼らは見上げるほど大きく、私は怖じ気付いた。

「タナカヨーコさんですね」私がかぶりを振る。それに構わず「一緒に来てください」と片方の男がカタコトの日本語で言った。私はもう一度首を横に振って二人の間を擦り抜けて走った。すぐに彼らは追い掛けて来る。私は玄関を走り出た。エディの青い車がすごいスピードで入って来た。そしてキーッという音を立てて急停車すると、彼は飛び降り、私を抱きしめた。私には振り返る勇気がなかった。

彼が言った。「ヨーコ。もう大丈夫」私は彼の腕の中で震えていた。彼は大きな声で何か怒鳴った。そして抱きかかえるようにして私をロビーに連れて入るとソファーに座らせた。ボーイを呼んで飲物を運ばせる。私が落ち着く迄彼は私の肩を抱いてくれた。

「もう大丈夫よ」私がそう言うと彼は何人かの人を集め、その人達に対して広東語で怒鳴った。私はその時初めて何を恐れていたのか思い出した。それほど私は混乱していた。私を追い掛けて来たあの二人はどうしたのだろう。そう思ってロビーを見回す。しかし彼らはもう何処にもいなかった。エディの話す声が穏やかになっていた。良く見ると昨日紹介されたアルンも居た。エディは私の視線に気付くと集まっていた人達に手で「もういい」と言う素振りをして私の方に戻って来た。

私は尋ねる。「私を追い掛けて来た二人はどうしたの？」彼は言う。「気にしないで良い。それより荷物は片付いたかい？」私は頷く。彼は笑顔を作って言った。「じゃあ、港に行こうか」私はもう一度尋ねる。「さっきの人達はいったい誰なの？」彼はしようがないと言う顔でしぶしぶ答えた。「多分、加藤の組織の者だよ。アルンが追い出したからもう大丈夫さ」「どうしてアルンなの？」「彼も一緒に船に乗るのさ。日本に戻るんだ」答えに成っていない彼の言葉に私は曖昧に頷いた。エディは言う。「立てるかい？」私はもう一度頷く。そしてそっと立ち上がった。

エディはボーイに荷物を運ぶように言い、私を車に乗せた。ボーイはすぐに私のトランクとエディの荷物を持って降りて来た。それを車に積み込むと私の方を向いて笑顔を見せた。私達は沢山のホテルの人達に見送られ港へ向かった。

運転をしながらエディが言う。「ヨーコ、良く逃げられたね」私は急にとても怖くなった事や、階段で一階だけ下りてからエレベーターに乗った事、そしてエディを強く求めたら車に乗ったエディが見えた事などを話した。彼は頷くと片手で私の手を取って言った。「僕にも君の声が聞こえたよ。君が僕を求めていた」「エディ。あなたはさっき何をあんなに怒っていたの？」彼は少し照れたように言った。「あのホテルで君にあんな恐ろしい思いをさせた事を怒っていたんだよ」「どう言う事？」「あのホ

テルや、これから行くであろう僕達のホテルで、決して有ってはならない事なんだ」私には良く理解できなかつた。彼はそんな私に言う。「またゆっくり説明するよ。僕達のハニムーンの間にね。船の上で三日間はゆっくり出来るんだ」私は取敢ずそれで良いと思った。彼がそう言う限りきっとその方が良いのだ。急ぐ事は無い。そう思い、私は彼の顔を見て笑顔を作った。「あなたが居てくれて良かったわ」彼は微笑んで言う。「少し僕を見直したかい？」「ほんの少しね」彼は声を立てて笑った。そして私も笑った。

港に着くとパリでの空港の時のように彼がすべての手続きをした。私はすべてを任せていた。そして船に乗る。アルンの言ったようにとても素敵な客船だった。

案内されて私達は船室に入る。そこはエディらしくとてもゴージャスな部屋だった。私はまた立ち尽くす。彼は私の後ろで言う。「もういい加減に慣れなよ。僕と居ると仕方ない事なんだ」私は黙って頷いた。床には一目でシルクと判る段通が敷き詰められ、家具は螺鈿細工で統一されている。そしてその模様はすべて龍がモチーフになっていた。

「もしかしてこの船もあなたの物なの？」彼はすまなそうな顔で頷いた。「ナーガラージャの船さ」私は諦めてベッドルームの一つを覗く。思ったとおり、とても趣味のいいベッドルームだった。彼の選ぶ部屋はいつもゴージャスなりビングに、簡素とも言えるようなさりげなさの中にとっても機能的でかつしっかり仕事のされた家具でコーディネートされたベッドルームが付いている。私はそのことを彼に言うと彼は笑いながら言った。「それは李家の伝統さ。さっきのホテルだって、この船だって、僕一人で選んだわけじゃない。祖父と母とアンディとでいつも決めるんだ。僕一人で選んだら此処まで豪華にしたりはしない。祖父がこう言うのが好みなのさ。僕とアンディはいつもベッドルームを担当するんだ」私は頷いて言った。「でも、とても調和が取れているわ。お互いを尊重しているのね」彼は微笑む。「そんなふうに思った事なんてなかったよ。でも君の言うとおりにかも知れない」そう言ってベッドルームを改めて見回した。

「ヨーコ、取敢ず此処が僕達の新居だ。三日間だけだけれどね。でもこれからもよく似たものだと思うよ。すべてが終わるまでは移動を繰り返す事に成ると思う。でも僕達はいつも一緒だ。だから僕の居る所で寛いでくれ。そこが僕達の家なんだから」私は頷いた。「何処へ行っても驚く程豪華なんでしょうね」「君に良く似合うよ」私は驚いて言った。「まさか？」彼は笑って答えなかつた。

出航までまだ時間があった。彼は紅茶を頼んでそれを二人で飲んだ。私は紅茶を一口飲んで言った。「おいしいわ」彼は微笑む。「パリからロンドンへ飛んだ時の紅茶とどっちがおいしい？」「同じくらいよ」彼は不満そうな顔をした。「あなたと飲む紅茶はいつでも何処でも最高においしいのよ」彼は笑う。その時電話が鳴った。彼が受話器を取って英語で話す。そしてすぐに切った。彼は私に言う。「アルンが乗船したから行って来るよ。君は此処で寛いでいてくれ。出航する時には迎えに来るから」私は頷いた。

私は彼を送り出し、ソファーに戻って日本神話の本を読むことにした。しかしそれはと

ても難解で私はすぐに飽きてしまった。もう少し頭が元気な時に読もう。今日は少し疲れている。自分にそう言い聞かせると私は荷物を解いた。それなら頭を使わなくて良い。

バスルームに化粧品を並べ、クロゼットに服を掛た。そうする事で少しだけ自分の部屋と言う気になった。私は思い付いて小さめのベッドルームにあるバスルームで下着を洗濯し簡単に干した。そしてヒーターのスイッチをONにしてリビングに出て寛いだ。

しばらくしてエディが迎えに来た。私達はデッキに出る。お爺さんやお母さん、そしてアンディとその家族が見送りに来てくれていた。エディは甥や姪達に広東語で何か言う。アンディが私に「気を付けて」と日本語で言った。私は「ありがとう」と言って手を振る。

船の別れは名残惜しい。私達の乗った船は、ドラを鳴らしながらゆっくりと岸壁を離れる。私達はみんなが見えなく成るまで手を振った。

ふっと見上げた空には、夕焼けに染まった雲が真っ赤な龍の形を作っていた。

香港～神戸 1

香港の街が見えなくなると私達は船室へ戻った。

エディは私を先に部屋に入れ、自分も入るとドアを閉める。そして私をそっと抱き寄せ口付けをした。とても優しく丁寧な口付けだった。

そっと唇を離して言う。「愛してる」私は彼の暖かさに包まれ、触れ合う事の喜びを感じていた。私は彼の胸に頬を付け、心で尋ねた。「いつ私はあなたの妻に成れるの？」

彼は声を出して答えた。「今すぐにでも」そう言って彼は私を抱え上げるとベッドに運んだ。彼は私に覆い被さると強く抱きしめる。私の中でまた何かが大きく動いた。

彼はそっと体を離し横に座り私の髪に触れる。私は戸惑いを感じていた。彼は言った。「もう少し時間を掛よう」私は起き上がり、彼を押し倒して彼の胸に耳を付ける。

彼の鼓動がトクットクッと規則正しく聞こえた。彼はずっと私の髪に触れていた。

私は頭を起こし、彼の胸や肩に触れながら言った。「ねえ、龍が起きる時の事を教えて」彼は倒れたままの姿で答えた。「そうだね。多分僕達が愛し合う事で目覚めるはずだ」私は問う。「それってSEXするって言う事？」彼が答える。「多分ね。でもそれだけで完璧かどうかは判らない。そうすることで目覚めても、また眠ってしまうかも知れないから。多分完全に目覚める為には愛の深さが大切なんだと思う」「私達は愛し

合っているわ。このままSEXすればきっと目覚めるわね」 「それは判らない。僕が君を抱きしめるといつも龍が動く。その時君はどうしても心を閉じてしまう」 「怖い」 彼は頷いて言った。「判っている。そのまま僕が君を抱けばいいのかも知れない。でも僕も不安なんだ。一度起こすのに失敗した龍は巧く使えなくなる。それに僕は情熱だけでSEXするほど若くないのかも知れない」 「でも、何時かはそうしなければいけないのでしょうか？」 彼は頷く。 私が続ける。「後でトライしてみましようよ」 彼が私の顔を見る。 私は目で笑って言う。「私だって正常な女よ」 彼も笑って言った。「僕みたいに他で済ませるわけには行かないって言う事かな？」 「冗談よ」 私もちょうんと笑った。

私は今のままで充分満足していた。 生まれて初めて、他人によって満たされている。これ以上何を望むと言うのだろうか。ただエディの望むものを与えられない自分に苛立っているだけなのだ。 彼は私の心を読んでいる。

私は彼の悲しみを感じていた。 なぜ悲しむのだろう。 幾ら彼の心を探っても、その悲しみの出所は判らなかつた。 多分彼にも判らない感情なのだろう。 出逢った事を悲しんでいるのだろうか。 それとも生まれて来た事をだろうか。 これが私の知っているエディ・リーの姿だ。 この悲しみこそが彼の本質なのだ。

私は心の手で彼の悲しみにそっと触れてみた。 柔らかくて暖かい手触りだった。そしてそれはとても懐かしい香りがした。 その香りに誘われて、涙が込み上げて来る。

私は何も言わずに彼の胸に顔を埋めてしばらく泣いた。 とても幸せな涙だった。泣く事で心が解放されていた。 その後、解放された心に何かが流れ込んで来るのを感じた。

ドクドクッと規則正しく流れ込む。 赤く、暖かく、そして力強い。 血だ。 それが彼の言う龍の正体なのだろうか。 心に流れ込んだ血は私の体にも流れ込む。

彼がずっと私を見ていた。 不安はなかつた。 彼の心が私の中に居るのを感じていた。そして穏やかに見守られている。 安心感に包まれる。 どんどん私の体の中に龍の血が流れ込む。

彼が私の体を強く抱きしめた。 もう何も動かない。 私は私の龍が彼を受け入れたことを感じていた。

どの位抱き合っているのだろうか。 船窓から見える空はもう真っ暗だった。 私は起き上がって灯を付けた。 何だかとても照れ臭かった。

エディはベッドに座って目を閉じていた。 私は彼の前に屈み込み彼の両手を取った。 彼が目を開ける。 穏やかな瞳だった。 彼が言う。「ありがとう」 私は首を傾げる。「愛してる？」 私は馬鹿げた質問をした。

彼は微笑んだ。そして私を抱き起こし、抱き上げて言った。 「ヨーコ。僕は生まれ変わって本当に良かった。僕はこんなに満たされたんだ」 彼は子供のようにはしゃいで、部屋の中を私を抱いたまま歩き回った。その時、部屋の電話のベルが鳴った。

エディはその電話を受けて私に言う。「アルンが食事を一緒にしないかと言って居るんだが、どうする？」 「お化粧を直してから行くわ」彼はそれをアルンに伝えると電話を切った。 私は急いで化粧を直し、髪をチャイナ風にまとめ、パリでもらったドレスを着た。もちろんエディもタキシードを着た。

私は彼にエスコートされてレストランに入る。

アルンは窓際の席で友人と話していた。私達が席に付くと彼らは黙り込んだ。エディは微笑んで言う。「邪魔だったかな？」アルンはかぶりを振り、ゆっくりとした口調で言った。「いや、驚いていたんだ」私が尋ねる。「私達、何か変？」アルンが答える。「そうじゃない。余りにも美しいんで驚いて居るだ」私はエディの顔を見て言った。「昨日の私とそんなに違うかしら？」エディがアルンを見る。アルンが言う。「輝いてるんだ。まるで別の世界の人のように見える」エディは穏やかに笑った。私には良く判らなかった。エディがテレパシーで言う。「ヨーコの龍が目覚めかけて居るんだ」私は言った。「そう言えばアルンも昨日よりハンサムよ」私達とアルンの友人が笑った。そして雰囲気が少しカジュアルに変わった。

エディが言う。「アルン。君の友達を紹介してくれないか」アルンは頷いて言う。「沢村夫妻。こちらが一男さんで、こちらが裕美子さん。彼は若いけれどとても優秀な医者だ。そしてこちらが李聖龍とその妻、エディとヨーコさん」私達は握手を交わした。

一男さんはエディに会えた事でとても感激しているようだった。きっとエディに付随する何か彼を感激させたのだろう。取敢ず私は、日本語で話せる事でほっとしていた。

挨拶が終わるとウエイターがシャンパンを持って来てみんなのグラスに注いでくれた。それでカンパイをし、食事を始めた。

沢村夫妻は新婚旅行を兼ねてこの船に乗ったと言った。一男さんが二十八歳、裕美子さんが二十五歳。私は彼らの若さが羨ましかった。新婚の若い二人は屈託がなく、とても楽しそうに見えた。

「いいわね。新婚旅行って」私が言う。エディはあきれたように言った。「僕達だってそうじゃないか」アルンが声を立てて笑った。「エディ。お前ヨーコさんと結婚したんじゃないのか？」エディが私の方を見て言った。「ヨーコ。確か僕達は結婚したよね」私は考え込む。「ねえ、私達って何時結婚したのかしら？」エディがアルンに言う。「そう言う事なんだ。僕達はいつの間にか結婚していたものだから実感がないのさ」みんなは冗談だと思って笑った。

私も笑いながら、結婚記念日を何時にするべきか考えていた。やはりロワールからパリに戻ったあの日ののだろうか。特別なお酒で乾杯したあの夜。

私達はとても和やかに食事をした。食事を終えて沢村夫妻は引き上げて行った。

私達は三人で最上階にあるバーに移った。窓ガラスがとても良く磨き込まれていて、遠くの船の灯や、降るような星が座ったままで見えた。とてもロマンチックなバーだった。

アルンがどちらへともなく言う。「新婚の邪魔をして悪かったかな？」私は首を横に振った。エディとアルンは英語で何かしばらく話した。アルンは信じられないという顔で首を振る。そして言った。「ヨーコさん」私は言う。「ヨーコでいいわ」彼が言い直す。「ヨーコ。君は李家についてちゃんと知らないんだって？」私は答える。「エディがとてもお金持ちだって言う事を教えてくれたわ。それにナーガラージャって言う組織をお爺様が作ったって言うお話も聞いている」アルンは頷いて言う。「それに対して君

はどう思っているの？」 「どう思うって？ エディがお金持ちで、李聖龍という名前を継いで、その妻に私が成ったって言う事に対してかしら？」 アルンが頷く。 私はしばらく考え、そしてどちらへともなく言った。 「ねえ、私何もかも良く理解出来ないのよ。 今私が言ったことも理解しているのじゃなくて、ただ彼に言われた事を覚えているだけよ。 でもね、私にとってそんな事はどうでもいいことなの。 何故なら、私にはすべてが特別すぎて、何もかもが嘘だっていって言う事。 そして何もかもが本当の事でも、同じ事だわ。 巧く説明できているかしら？」 アルンが言う。「何となくだ」 私は続ける。「きっとあなた達にとってはとても大切な事なんだろうけれど、私にはどうでもいい事なの。 でもきっと私にとってとても大切な事が、あなた達には取るに足らない事だと思うわ。生きてきたシステムや価値観が違い過ぎるのよ」 アルンが尋ねる。「ではなぜ君は此処に居るんだい？」 私は微笑んでエディを見た。「彼を愛しているのよ」 アルンが言う。「知り合ってまだ一週間も経っていないのかい？」 私は大きく頷く。エディは黙って微笑んでいた。

アルンが意を決した様に言った。「僕は嘘が付けられないから本当の事を言うよ。気を悪くするかも知れないけど許してくれ」 私は首を振って言う。「大丈夫よ。気にしないわ。だからあなたの思うように言ってみて」

彼が頷いて話し始めた。「僕が知っているだけでも、エディとの結婚を望んだ女性はとても沢山居たんだ。僕には考えられない程の数だ」 私は頷いて相槌を打つ。「そうでしょうね。彼はとても素敵で、優しくって、その上大財閥の一員なのでしょう？ 女性にとってこれ以上の条件はないものね」 その後はアルンが言いにくそうなので私がかわりに言う。「私も彼の条件が気に入ったんだってあなたは思うのね？」 彼は小さく頷いた。 私は少し考える。そして言う。「だったら良かったのに」

私はそれについて考えた。しかし結論がどうしても導き出せない。私はアルンに言う。

「ねえ、それについて説明するのには、少し時間を貰えないかしら。自分でも良く判らないのよ。 私にとって今までの生活を捨ててしまう程の価値がエディにあったのかどうか。 あなたには理解できないかも知れないけれど、私、自分の生活に結構満足していたの。 自分の仕事に対しても愛情を持っていたわ。 私、働く事って大好き。 自分のした仕事誰かに認められたり、私の技術や経験を必要としてくれる人が居るって言う事に対してとても満足していたわ。 確かに離婚は辛かったけれど、悲しんだり辛がったりしている自分がいとおしくもあった。なのに何故か私はそのすべてを捨ててエディに付いて来てしまった。何故なのか自分でも本当に良く判らないのよ」

アルンが良く判らないと言う様な顔をして私を見ていた。 そんなアルンに私が尋ねる。「じゃあアルン。エディは何故そんなに沢山の女性の中から私を選んだんだと思う？」 アルンはエディの方を見る。エディは微笑んだまま何も言わない。アルンは仕方なさそうに答える。「確かにヨーコは美しい。しかし、それだけならもっと美しい女性が居たと思う」 私は頷く。それを見て彼が続ける。「それに頭もよさそうだ。でもそれにも同じ事が言える」 私はやはり頷いた。「僕には龍が居たからだとしか思えないんだ」 彼はとても正直だった。 私は微笑んで言った。「そうね。その答えはとても的を得ているわ。そしてあなたはその事を快く思っていない」 彼は困ったような顔をした。エディがアルンを助けるように言った。「アルン、ヨーコが言ったように少し時間

を掛けよう。この船が神戸に着くまでに、きっと君の納得できる答えが得られると思うよ」そう言って私の方を向いて、とても素敵に笑った。私もそれに対して笑顔を返した。

私達は話題を変えてしばらく他愛のない話をし、何杯かのお酒を飲み、とても寛いだ時間を過ごした。そしてエディは席を立つとアルンに言った。「明日また会おう」そして私の手を取って立たせるとバーを出た。

歩きながら彼は言う。「ヨーコ。アルンの事どう思う？」 私は答える。「私、彼の事好きだわ。とても正直だし、あなたの事をとても大切に思っている。良い人みたい」「Good！　素晴らしい。君は人を見る目がある」 私は笑った。「それはどうかしら？　人を見る目があったら離婚するような事にはならなかったんじゃないかしら。それにこうしてあなたと居たかどうかとも怪しいものよ」　彼は私の腰を抱いて言った。「君に人を見る目がなくて良かった」　私達は笑った。

船室に戻り私達は部屋着に着替えて寛いだ。彼がお風呂の用意をしてくれた。「あなたって本当に良く気が付くし良く動くのね」　「君に任せるときっとお湯を溢れさせたり、栓を忘れてたりしそうだからね」　「かも知れない。でも、多分私にも出来ると思うわ」　「じゃあ今度頼もうか」　「でも面倒臭そうだからやっぱりあなたに任せるわ」

「ほらね。やってみる前からもう面倒臭いって言ってるよ」　「ねえ、あなたが居るとメイドもいらないわね」　「僕は二人だけで居るのが好きなんだ。でも何時か一所に落ち着いたらちゃんとメイドも置けばいいよ」　私は驚いて言う。「いやよ。私、自分の事ぐらい自分で出来るわ。それにそんな大きな家に住むのなんていや」　彼が言う。「寂しいから？」　私は頷いた。　彼は微笑んで私の肩を抱き、頬に口付けするとバスルームのお湯を止めに行った。そして戻って来ると嬉しそうに言った。「完璧だったよ。やっぱり僕はお風呂の用意をするのに向いているのかも知れない」　私は笑った。　彼が言う。「一緒に入ろうか」　私は迷った。　彼が私の手を取ってバスルームへ連れて行く。「一緒に入ろう！」

彼の声に急かされ、私は服を脱いで先にバスタブに入った。彼は後から入って来て隣に座る。二人並んで入ってもゆったりとしているぐらい大きなバスタブだった。　私が尋ねる。「このバスは誰が選んだの？」　「母だ」　「素敵なお母様だったわね。あなたもアンディも、目がお母様に良く似ていたわ」　彼は頷く。「でも彼女はとても可愛そうな人だ。龍に夫を奪われた」　私は何も言えなかった。彼は私を抱き寄せると言った。

「僕は君にそんな思いをさせないで済む。良かった」　「だって私が龍ですもの」　そう言ってくすつと笑った。

彼はいつものオイルマッサージをしてくれた。　「お姫様の気分よ。もしかしたらこれのせいであなたに付いて来たのかも知れないわね」　「明日アルンにそう言ってやれば？」　私は笑いながら言った。「彼、きっと真っ赤になるわよ」　エディも笑いながら言った。「はい」

お風呂を終えて私達はリビングで寛いだ。　私は彼に尋ねる。「あなたさっきアルンと

何を話したの？」 彼が首を傾げる。「あなたが何か言ってからアルンが質問を始めたのよ」 彼は頷いて言った。「アルンは君の事を知りたがっていたんだ。だから君と会って二日目には結婚を決めていた事や、君は僕の事を何も知らずに僕に付いて香港まで来た事を言ったんだよ」「それに対してあなたはなんの説明もしなかったのね」 彼は頷く。「本当に変よね。アルンじゃなくたって変だって思うわ。でも私達は愛し合う為に生まれて変わって来たんですもの、当たり前的事だったのよね」「はい。龍のせいじゃない。龍が僕達の愛を利用したんだ」 私は頷く。そして考えた。

アルンはいったいどんな答えを求めて私に質問したのだろうか。私はエディの心を覗いてみた。ホテルで彼を強く求めてから、彼の心を覗く事が簡単になっていた。彼の心はとても穏やかに澄んでいた。それを知って私は考える事を止めた。きっと答えは向こうからやって来るだろう。それを待ってアルンに伝えよう。

私は少し疲れていた。「エディ。私眠いわ」

彼が立ち上がるとベッドの用意をしてくれた。私はベッドに滑り込む。彼が言う。「僕は向こうの部屋で寝ようか？」 私は首を横に振って言う。「此処で寝て」彼は微笑み頷いた。

「じゃあ先に寝てなさい。後で僕も来るから」そう言ってリビングへ出て行った。

しばらくして彼がベッドに入って来た。私達は抱き合い、そして口付けをして眠った。完璧な眠りだった。

朝私は何処に居るのか判らなかった。隣で美しい東洋人の男が眠っていた。エディ。私はそっとベッドを降りてシャワーを浴びた。

バスルームを出ると彼はローブをはおって煙草を吸っていた。「おはよう」私は言った。「おはよう。今日は早起きだったんだね」彼が言う。「あなたの寝顔が見たかったのよ」彼が笑う。「どうだった？」「朝起きたら、隣にとっても美しい東洋人の男の人が寝てたわ」彼は吸っていた煙草にむせて咳き込んだ。私は言う。「おじさん大丈夫？」彼は煙草を消して私の後ろに回ると私の首に腕を回して言った。「おじさんはないんじゃないの？」私は笑って言う。「お兄さんだったかしら？でもアンディの子供達はおじさんって呼ぶんでしょう？」彼は腕を解いて言った。「みんなエディって呼ぶよ」「それってバカにされてるんじゃないの？」「かも知れない。頼りないおじさんだからね」私は大きく頷いた。彼は大きな声で言った。「ヨーコ！」私は彼から逃げ出して言う。「頼りにしてるわ。エディおじさま！」

彼は諦めてバスルームへ行った。私は朝からとても元気だった。きっと良く眠れたせいだ。

エディがシャワーを終えるのを待って、私達はレストランへ行った。窓際の席に座り海を眺めた。とても穏やかな海。この先に日本が、そして新しい自分の生活がある。

私が尋ねる。「ねえ、どうしてこの船はこんなに穏やかで安全なの？」彼はそれに答

える。「この船に乗っている人達すべてがナーガラージャ達だからだよ」 私は驚いて言う。「みんなそうなの？」 「違うのは君一人だ。君は龍だからね。乗務員も乗客もみんなそうだよ。だってこの船は祖父のパーティーに出席する人の為の船だったんだもの」

「だったらおじいさまが突然パーティーの日取りを繰り上げて、大変だったんじゃないの？」 「多分ね。でも、タイロンのためだったらみんなどんなことでもするよ。それに僕の結婚披露があるって噂が立って、初めの予定より沢山集まったらしい」 「みんな忙しい人なのに？」 「それがナーガラージャって言うものなんだ」 私は心の中で『大変なことになった』と思ったが、そのことについて深く考えるのはやめた。

「じゃあ、私はパーティーでみんなに会って居るのね」 「はい。だけど人が多すぎて僕だってほとんど覚えていないけどね」 私は溜息をついた。彼は微笑むと食事を続けた。私はしばらくしてまた彼に尋ねる。「ねえ、そんなに沢山のナーガラージャが居るのになぜ一般の人達はその事を知らないのかしら？」 彼は言葉を選びながらゆっくり答える。「それはナーガラージャ、つまり龍神族の歴史について説明しなければ解らない事だ。何時か加藤が話した事と重複すると思うけど、虐げられた者たちの歴史なんだ」 何だか暗い話になりそうなので聞くのが面倒に思えた。「エディ。私それについて知る必要があるかしら？」 彼は首を横に振った。そして言う。「ヨーコは知らなくてもいい事だ」 「じゃあ、一度に聞くのは止めましょう。私はあなたやアルンを信じるわ。そしてあなたの尊敬するお爺様が作った組織ですもの、きっと必要があって作られたんでしょう？」 彼が頷き、言った。「そうだ。ヨーコは何も心配する必要はない。僕が今その話をして君の心に悪い感情が芽生えたりしない方が良い。君は愛によって龍を目覚めさせるんだ。必要な事は必要な時期が来れば自然に判るさ。ただこれだけは知っておいてくれないか。ナーガラージャはとても大きな組織だ。そして力もある。しかし犯罪やそれに準ずる行為は全く無い。だから安心して」 私は頷いた。何となくそんな物が在っても良いような気になっていた。彼は穏やかに微笑むと私に向かって頷いた。

私は質問を変える。「エディ、あなたは愛についてどう考えるの？」 彼は窓の方を向いて考えた。私はお茶を飲みながら答えを待つ。暫くして彼が言った。「僕にとっての愛は、君だ。君の存在が僕にとっての愛のすべてだと思う」 今度は私が考える番だった。私はどんな答えを期待して尋ねたのだろうか。優しさ、思いやり、情熱だとか忍耐、そんな言葉を期待していたのかも知れない。しかし彼は、私が愛だと言った。

私は彼の心を覗いてみた。彼の中に私が居た。彼の中で私は人間で、ただの女だった。そして彼はそれをいとおしく思っていた。私が私を思うよりもっと私を受け入れようとしていた。私の嫌いな私も、彼はいとおしく思っている。私は彼の強さを知った。そして私は言う。「エディ、あなたって強いよね」 彼は首を傾げて笑う。そして言った。「何度も何度も生まれ変わって、やっと君を手に入れたんだよ。その間に鍛えられたのさ。でも君はいつも変わらない。いつもとてもピュアで、それでいて心が強い。僕はいつも君の心に鍛えられてきたのさ」 私は尋ねる。「私の心が強いのか？」

「強いて言うという意味が少し違うかも知れないが、君の心はとても柔らかく、そして硬い。その上とても弱くてそれでいて強くもある。そして信じると言う事に長けた心だ」

「誰でもそうなんじゃないかしら？」 彼は首を振った。「ヨーコ、君は自分を一番

信じない。 僕が信じられてどうして自分が信じられないんだ？ いつもそうなんだよ君は。だから僕が君にとって必要なんだ。 君の素晴らしさを言葉では言い表すのはとても難しい。 今の僕に一つ言える事は、君は僕のエゴイズムを包み込んでくれるって言う事くらいだ」 私は問い返す。「あなたのエゴイズム？」 「そうだよ、君はいつも僕のエゴイスティックな所をちゃんと包み込んでくれる。それも何事も無かった様にだ」

私には良く判らなかつた。彼がエゴイストだなんて思った事も無かつたので、私は彼の答えに驚いていた。彼はそんな私を見て微笑んだ。そして言う。「ほらね。君はあれだけの事を、何事も無かつた様に受け入れてしまうんだ。それが君の素晴らしさなんだよ。僕はとてもエゴイスティックな男だ。それは僕が一番良く知っている。多分そのせいで今まで結婚を考えなかつたのだと思う。アルンが言った事は確かに事実だが、僕との結婚を望んだ女性と一緒にならなかつたのは、すべて僕の方のエゴイズムだったんだ。彼女達はちゃんと僕を愛してくれたし、僕にふさわしく成る為に随分努力してくれもした。僕が本当に彼女達を愛せなかつただけなんだ。僕は随分彼女達を傷付けたと思う。だけど僕にはどうしようも無かつた。君を探していたんだ。僕の魂がいつも君を求めていた。そして僕はとうとう君を見つけた。なのに僕は君をこんな危険な事に巻き込んでいる。僕は自分のエゴにうんざりさせられたよ。僕はただ君を幸せにしたかっただけなのに」そう言って彼は視線を落とした。私は彼の手を取って言う。「あなたが思った事はもう完璧よ。私は生まれて初めて幸せで満たされているわ。これ以上私は何を望めばいいのかしら。私があなたにふさわしく成る為に何か努力する必要があるのなら言って。でなければあなたが傷付けた女性達に申し訳無いわ」彼は顔を上げると言った。「何もない。僕エディの、そして聖龍のどちらの立場であっても、君は何一つ変わる必要も努力する必要もない。ただ僕が君に望むのは、君がいつまでも君のままに居続けてくれる事だけだ。僕はいつもそれを望んで来た。そして君は僕の為にいつもその魂を持って生まれ変わってくれたんだ。君はその為に随分辛い思いをしてきたじゃないか。なのに君は僕が望んだからその魂のままに生まれ変わってくれたんだよ」

私はまた何かを思い出そうとしていた。頭の中で何かが動いていた。地面から這い出た小さな虫がお日様の下でモゾモゾ動き始めた様な感じだ。

エディに言う。「部屋へ戻りましょう。私何か思い出しそうよ」彼は頷き席を立った。私は何も考えないようにして部屋に戻った。

部屋のドアを開けた途端、私は彼の心の中に加藤が居るのに気付いた。すると頭の中の虫が大きく動いた。

私はソファーに座って言った。「ねえ、加藤さんがどうしたの？」彼は私を見ると答えた。「僕はタベ夢を見たんだ。いや、夢と言うより過去を、アカシックレコードを見て来たと言った方がいいだろう」

彼はそこで言葉を切った。私は次の言葉を待った。暫くして彼が自分の手を見つめながら言った。「僕が君を殺したんだ。今の生のすぐ前の時だ。君を銃で撃った兵隊は僕だった」

彼の心にまた悲しみが満ちて来た。私は出来るだけ心を静めて彼の話を聞いた。彼が続ける。「加藤はあの時も僕の友人だった。名前はチャン。戦地で野営をしてい

た時の事だ。 僕が君を見つけた時、君は随分衰弱した様子で森の中をふらふらと歩いていた。 僕はとっさに銃を構えたんだ。でも撃つつもりなんて無かった。 その時後ろに居たチャンが僕の肩を突然掴んだ。 その瞬間、銃は発射され君に当たった。 君は力無く倒れ、そして死んだ。 僕はその瞬間自分の殺した相手が君だったと言う事を理解した。 呆然と立ちすくむ僕にチャンは『気にするな此処は戦場なんだ』と言ったんだ

私は尋ねる。「あなたは生まれ変わる度に前世の記憶を持っているの？」 「はい。でも生まれた時からじゃない。自分がなすべき事に遭遇した直前若しくは直後に思い出すようだ」 「それで私を殺した後に思い出したのね」 彼は頷く。「それでその後どうなったの？」 「何人も人を殺した」「戦争だったのよ」 彼が頷き、言った。「でも僕は君を殺してから一年後、君を撃った銃で自殺した。心が壊れてしまっていたんだ」

私はその時の事を彼の心を通して見た。「多分あなたはあの時、私を殺す為に生まれてきたのよ」 彼は判らないと言う風に首を横に振る。 私は彼の手に触れながら言う。「あなたはあの時、私を殺す事を学んだのよ。 それはあなたが聖龍になる為に必要だったからだわ。 エディ、あなたは私をこの手で殺すのよ」

彼の心の悲しみは彼から溢れ出さんばかりに満ちていた。 そして反対に私の心には喜びが満ちて来ていた。 その喜びの心を彼に伝えた。

「あなたの悲しみは愛する者をその手で殺す事だったのね」 彼は戸惑っていた。 私は尋ねる。「あなたは死を恐れる？」 彼は首を横に振る。 私は続ける。「そうよね。前世の記憶を持つ者は死を恐れないわ。 死はただの過程であって、終わりでは無い事を理解するものね。 私も恐れはしない。あなたが私に死を与えてくれるのならば、それは私にとって最上の喜びだと思える。 あなたに愛を与えられるのと、死を与えられるのは、私にとって同じ事よ。 だから悲しまないで。あなたも私に死を与える為に生まれて来た事を喜んでちょうだい」 「ヨーコ、でも残されたものは辛い」 「そうね。けれど誰もその苦しみを和らげる事なんて出来ないし、それから逃れることも出来ないのよ。 生まれてきたものは必ず死ぬわ。どれだけ愛し合っている、何時かは必ずどちらかが一人になる。 生まれてきたかぎりそれをそのまま受け入れるしか無いんじゃないかしら」 彼は大きく首を振ると、私を抱き寄せた。

「なぜ僕はこんなに君を愛してしまうのだろうか？」 私は答える。「簡単な事だわ。私達は愛し合う必要があるからよ。 元々二人は一つだったの。それが二つに分かれて生まれてしまった。 一つに戻る為には沢山の事を学ぶ必要があったんだと思うわ。 その為に何度も擦れ違いを繰り返して、加藤さんに邪魔されながら生まれ変わってきたのよ」

彼が言う。「そしてやっと結ばれる。一つに戻るんだ」 私は彼の腕の中で言った。「そう、永い時間がかかったわ」 私は彼の背中に腕を回し、抱きしめた。彼も私を抱きしめる。もう私の中で何も動かない。

私達はベッドルームに行き光の中で結ばれた。それはとても丁寧な交りだった。 龍に祝福された交りだったような気がする。 私は心と体の両方を彼に満たされていた。 それは気が遠くなる程の祝福感だった。

私達は身支度を整えとりビングのソファーに座った。彼は初めてパリで会った時と、ちっとも変わっていない。でも私は随分変わったように思える。たった一週間で何もかもが変わってしまった。

私は彼に尋ねた。「私の龍は目覚めたのかしら？」彼は微笑んで言った。「はい。とても美しい目をしている。穏やかで、それでいて力のある目だ」「私にも見せてくれない？」彼は頷いて言った。「僕の心を覗いていて」私は彼の心に目を凝らした。目を閉じて心を静める。そして彼を全身に感じる。彼の精神が集中するのを感じた。

私は彼の目で私を見ていた。テレビ画面の中のもう一つのテレビ画面を見るような不思議な感じ。彼の心に私の姿が映る。そして彼の視線が動く。龍が居た。金色に輝く黄金の龍。美しく繊細でなおかつ力強い。これが私の龍。私は目を開けた。彼の微笑みがそこにあった。私は言う。「素晴らしい」彼は頷く。

「初めからあなたには見えていたの？」「いや、君が一つづつ理解を深める度に、力強く、そして美しく成って行ったんだよ。初めはおぼろげな影の様な物だった。それが一枚づつペールを脱ぐようにはっきりと輪郭を現わし、デテールを形作り、そして輝き始めた。それは素晴らしい体験だった」「あなたはそれをずっと見ていたのね」彼は頷いて言う。「はい。龍使いとしても、ただの男としても、それはとても幸せな事だった」「これで完璧なのかしら？」彼は少し首を傾げる。「良く分からないんだ。僕は新米の龍使いだからね」そう言うと口の端を上げて笑った。

私はフォンで居た時の事を思った。「ねえ、フォンはどうして船に乗ったのかしら？」

「加藤だ。あの時も加藤が居た。あの時の名前は法蓮」私は思い出した。「そう。彼が法蓮だったの」その名前がきっかけになって私はいろんな事を思い出していた。

「奴も君の事が好きだったんだ。龍山だった僕は、あの時もあいつに相談して失敗したんだ。僕は君の事を忘れられなくてずっと塞ぎ込んでいた。そんな僕を見て奴が僕に尋ねたんだ。それで僕は君のことを話してしまった。奴は次の托鉢の時に君を見に行き、そして君に一目惚れしたんだ」私が言う。「彼が私の夫に、私とあなたが通じたと言ったのよ。私を愛していた夫には許せなかった。だから夫は龍封じの石を体にくめたと。あの時私はあなたの事がどうしても気にかかっていたわ。どうしても無くあなたの事が頭から離れなかったの。その上夫が私の体に傷を付けた。そんな時、法蓮がやって来て、あなたは私への思いが通じない事を悩んで失意のうちに日本へ帰ったと言ったの。私はいてもたっても居られなくて夫に言ったわ。『私はもうあなたを愛せない。だから日本へ行かせて』って。夫はそれで仕方なく私を船に乗せたの。だって彼は私とあなたが通じたと思いきりでいたから、もう私を抱けなかったのですもの。

その後いろんな事があって、やっと船に乗ったら法蓮が居たの。初め彼は何くれとなく面倒を見てくれたわ。日本に着いたらすぐにあなたに会えるだとか、きっと幸せに暮らせるとかって言って励ましてもくれた。私には彼がとても良い人だって思えたわ。でも私の傷が段々悪化して、高熱を出し、もう助からないと思った時に彼が言ったのよ。

『僕は死にそんな病人を連れて来てしまったのか。龍山に任せておけばよかった』とね。私は苦しい息の下で尋ねたの『龍山はどこ？』ってね。彼はそれには何も答えなかった。私はその時だまされた事を感じていたわ。そして死んだの。ひどい話よ

ね。でも私、あの時、三人もの男に愛されていたのね」 彼が頷いた。「そう、あの時も君はとてもチャーミングだった」 そう言って微笑んだ。そして続ける。「法蓮はあの時僕に言ったんだ。『あの女は止め。あの女には魔性の臭いがする。お前の手に負える女じゃ無い。それにお前は仏の道を学ぶ為に国費でここまで来たのだろう。女に現を抜かすなんてもっての外だろう』とね。その後僕は奴に推薦されて新しい修行の為に山に籠もったんだ。その間に君を連れ去られてしまった。僕はその修行を終えて、随分後に君の夫に会ったよ。彼は僕に君が僕を追って日本に渡った事を告げた。そしてなぜ僕が此処にいるのかと言ったんだ。僕は驚いて君を乗せた船の人達を探して聞いた。君が船の上で死んだ事。そして法蓮と一緒にいた事も。僕はあの時も気が狂ったようになった。そしてそのまま山に戻って二度と山を下りる事は無かった」 私は溜息をつく。「加藤さんは、ずっと生まれ変わり、死に変わって、私達の邪魔をしているのね。きっとその前もそうだったのよ」

彼は口の端を上げて笑うと、言った。「その前の話もしようか？」 私は首を振って言う。「もう沢山よ。終わった生の事より今の事の方が大切だわ。それに私、初めてあなたと一緒に成れたのよ。もう辛かった事なんてどうでもいいわ」 彼は頷いた。そして言う。「僕は君と一緒にいる為に、何百年、何千年も待ったんだ。そしてやっと君を手に入れた。だから僕はまだ君を殺したくない。もっともっと君を愛していたい」「私もそうよ。でももし、今此処であなたに殺されても構わないと思える程の幸せを、あなたに貰ったわ。本当にありがとう」 彼が笑うと言った。「ところで、おなかずかない？」 「もうお昼ですものね」 彼がレストランに誘った。私はふっと思って尋ねる。「ねえ、私の龍って、あなたにしか見えないの？」 「今の龍ならナーガラージャでありさえすれば誰にでも見えるだろう」「それって目立って仕方ないんじゃないの？」 彼は笑う。「そうだよ。団体旅行の旗みたいな物だ」 私は怒って言う。「笑い事じゃないわ。そんなのみっとも無くってよ」 彼はまだ笑いながら言った。「神が、神である事をみっとも無いなんて言ってどうするの。みんなが聞いたらがっかりするよ。だってみんな何千年も君の龍を待ち続けて居たんだよ」 確かに彼の言うとおりで。私はやりこめられてシュンとした。彼は優しく言う。「大丈夫。船を降りる迄にはちゃんとコントロールの仕方を教えてあげるから」 私は仕方なく頷いた。「ほら、お化粧を直してレストランへ行こう」 私は言われたように化粧を直すすと彼と一緒に部屋を出た。

私達がレストランに着くと、まず入口のボーイが私の方を見たまま動けなく成った。エディはそんなことには気にも止めず、私の腰に腕を回して中に入る。私はすぐにアルンの後ろ姿を見つけた。

「アルンが居るわ」 私が言うとエディはアルンの席の方へ私を誘って歩いた。私を見た人はすべてストップモーションのように止まってしまう。

エディがアルンに声をかけた。「アルン。此処に座ってもいいかい？」 アルンは「いいよ」と言って振り向いた。そして私の龍に釘付けになった。

私はエディに言う。「ねえ、これどうしたらいいのかしら。私、まるでゴーゴンになっ

た気分よ。私を見るとみんな石になっちゃうの」「みんな驚いて居るだけさ。すぐに慣れるよ」エディはそう言って私の為に椅子を引いてくれた。私はその椅子に腰掛ける。エディも隣に座るとウェィターを呼ぶ。しかし誰もが私の方を注目していれ気付かない。エディは仕方なさそうに苦笑いすると、アルンに言った。「アルン、しっかりしてくれよ」

アルンは我に返って、椅子の背もたれに体を預けて言った。「話には聞いていたが、これはすごい。すごすぎるよ」そして回りを見渡して続けた。「見るなど言う方が無理だ」

エディは頷いて、私の手を取ると、彼のくれたダイヤの指輪を内側に回し、私の手を握らせた。周りから溜息の音が聞こえた。私は訳が判らなくてエディの顔を見る。エディが言う。「そのダイヤを肌に触れさせれば良い。その石がフォンの夫がフォンの体に埋め込んだ物と同じ力を持っているんだ」「これが龍静めの石だったのね」彼は頷く。「ほんの少し触れるだけで良い」

私は握った手を少し開いてみる。そしていろいろ試してみた。それで少し斜めにしておけば日常生活に不便無く肌に触れさせておけることが判った。アルンは私の手を食い入るように見ていた。そして目を閉じて溜息をついた。エディがもう一度ウェィターを呼ぶ。今度はちゃんと来た。エディは注文を告げるとそのウェィターに尋ねる。「感想は？」彼は震える声で言った。「聖龍様。とても素晴らしく思います。そしてこの船で働けた事を誇りに思います」エディが言った。「ありがとう」ウェィターは頭を下げると立ち去った。私はエディに向かって言う。「あなたって本当に偉い人なのね」エディは笑う。「僕が偉い人な訳じゃないよ。ただ聖龍の名前が偉いのさ」私はなるほどと思って言った。「そう言う訳なんだ。何となく理解できるような気がするわ」彼は私の肩に手を回して笑った。「でも君はすごいみたいだよ」エディが肩に回した手に力を入れた。「私がすごいんじゃないくて、すごいのは龍でしょう？ ねえアルン？」アルンは曖昧に頷いた。

エディは私から手を離すと煙草に火を付けて言った。「アルン、何か言ってくれよ」アルンは龍の残像を振り払うように頭を軽く振ると言った。「もう完全なのか？」エディは煙草の煙を吐き出すと言った。「はい。でも良く判らない」「聖龍とその妻。認めざるを得ないな」「そう言う事だ。頼んだぞ」アルンが頷く。私には良く判らない会話だった。アルンが私に言う。「ヨーコ、昨日の答えはもういいよ。君達が本当に愛し合っている事がよく判った。失礼な事を言ってすまなかった」私は首を横に振って答える。「あなたは何も失礼な事なんて言って無いわよ。私が巧く説明出来なかったのがいけないの。巧く話せる様になったら聞いてね」彼はとても素敵に微笑むとゆっくりと頷いた。

エディの頼んだ物が運ばれてきた。そしてテーブルにセッティングが終わったところで船長が挨拶にやって来た。エディは座ったまま握手をする。船長は私に最大の敬意をはらうとエディに次のような意味のことを言った。素晴らしい航海になりました。この船の乗員すべてがとても喜んでいます。今夜私主催のパーティーを催しますのでぜひご出席ください・・・と。エディはその申し出を丁寧に受けると、快適な航海に対して労いの言葉などをかけた。船長はそれに感激した様子だった。最後に私に向かって丁寧に頭を下げると席を離れて行った。

私達は食事を始めた。アルンも私達の為に中断していた食事を再開する。エディとアルンは英語で何か話しながら食べていた。

私は窓から見える海を見ながら食事をした。何かが始まろうとしている。アルンはいったいどう言う立場なのだろう。エディはアルンに絶対的信頼感を持っていた。私にはそれが良く判った。エディの心を覗いてみた。彼らはこれからの計画を話している。とてもややこしくて難しい事の様だった。私はエディに任せれば良い事なので、すぐに覗くのをやめた。きっとその為に彼らは英語で話しているのだろう。彼らなりの思いやりなのだ。エディは私がおなか一杯で食べられない分まできれいにたいらげると、言った。「ヨーコ、デザートはどうする？」私はシャーベットをもらう。彼はケーキとコーヒーをもらった。アルンはうんざりした顔で食後のコーヒーを飲んでいて。私がデザートは食べないと尋ねるとアルンはこう答えた。「甘い物は苦手なんだ」普通の男の人だった。私はそう思ってエディを見ると彼はケーキを食べ終えたところだった。私はエディに言う。「もう一つ食べたいんでしょう」「大丈夫。ちゃんと頼んであるからもうすぐ運ばれてくるよ」そしてすぐにとっても甘そうなチョコレートケーキが運ばれてきた。彼は嬉しそうにそれを食べた。アルンと私は両手を挙げて肩をすくめた。エディが言う。「僕のエネルギー源なんだからそんな目で見るなよ」アルンと私は顔を見合わせて笑った。

エディは何事もなかったように食べ終わると、言った。「アルン、部屋に戻ってもう少し日本の事を説明してくれないか？」アルンは頷きコーヒーを飲み干すと立ち上がった。私達も続いて席を立ち部屋へ向かった。

部屋に戻ると船長からのプレゼントとパーティーの招待状が届いていた。プレゼントは真紅のチャイナドレスだった。それに金糸で龍が縫い取られている。私はベッドルームでそれを着てみた。サイズはピッタリだった。私はベッドルームからエディを呼ぶ。

エディは扉を開けて入って来ると私を見て言った。「素晴らしい。君の前世はきっと中国人だったんだ」「そうよ。あなた知ってるじゃない」彼は笑った。「そうだったね。でもフォンの時はもっとゆったりしたドレスだったよ。時代が違うんだ」私は頷いた。「そうね。でも私これ、とっても気に入ったわ。船長にお礼を言わなくちゃ」「今夜のパーティーで僕もお礼を言ってあげるよ」私は頷いた。彼は思い付いたように言った。「そうだ、君もアルンの話を聞かない？」「聞いて判るかしら？」「判るのは判るけどつまらなく無いかい？」「つまらない話なの？」「それは君次第だ。でもつまらなそうだと思うのならエステティックサロンに行って、その後髪をセットしてもらったらいよいよ」私は考えた。香港のホテルでももらった時にとっても気持ち良かったのを思い出していた。「でも、贅沢じゃ無くて？」彼が笑って言う。「僕の為に綺麗に成って来てくれないかい？それにこの船の上では、何をしても、何を食べてもお金はかからない。そう言うシステムなんだ。何も心配しなくていいんだよ。運動不足ならアスレチックジムも、プールだってある。好きなように振る舞えばいい。少なくともこの船の上には敵は居ないから。こんな状況って今だけしか無いかも知れないよ」私はそれを聞いて少し心が動いた。「ねえ、水着はどこで買えるかしら？」彼が言

う。「泳ぐの？」 私は頷く。「案内させるから付いて行けばいいよ。それで伝票に君の名前をサインすればいい」 私は頷いた。そして言う。「少し泳いでからサロンで綺麗にしてもらうわ。それでいいかしら？」 彼は微笑んで言う。「Good! それでいい」 そう言うと電話でボーイを呼んだ。

私は急いで服を着替える。「迷子になったら大きな声で僕を呼ぶんだよ。スーパーマンみたいに飛んで行くから」「この船では日本語が通じるんでしょう。大丈夫よ」 アルンがベッドルームのドアをノックする。そして言った。「誰か来たよ」 私は急いで出た。

エディが後ろから言う。「気を付けるんだよ。溺れない様にね」 私は振り向かずには手だけ振った。

きちんと制服を着た二十歳ぐらいの男の子が、私をショップがある場所へ案内してくれた。私は彼にプールの場所を聞いてからチップを渡してお礼を言った。彼は恐縮していたが、とても素敵に笑うと帰って行った。

私はなるべくシンプルな形の水着の中から綺麗なサファイヤブルーの物を選び、エディが言ったように伝票にサインをして包んでもらった。それを持ってプールに行った。

プールに他の客は居なかった。私はゆっくりと何も考えずにただ泳いだ。初めは続けて何本か泳ぎ、そして少し休んだ。その後は泳いでは休み、休んでは泳ぐ。心地よい疲労感が私を包むまで泳いだ。水の中に居ると、まるで本当の龍になった様な気がした。一時間ほど経った頃、私は泳ぐのを止めてサウナルームへ入った。しばらく其処で汗を流し、ジャグジーバスを使った。体がとても軽くなったような気がした。私はその後髪をセットしてもらうために美容院へ行った。美容院の場所はすぐに判った。ガラスで出来た大きな扉を開けて中に入ると、受付に女性が居た。私はセットをして貰えるか尋ねた。彼女は予約で一杯なので待ち時間がかなり有るので、名前とルームナンバーを書いて行けば後で電話をくれると言った。私は出された紙に名前を書いた。彼女は途中で中から呼ばれて居なくなった。私は名前を書いた後困ってしまった。ルームナンバーを知らなかったのだ。私は彼女の出て来るのを少し待ったが彼女はなかなか出て来なかった。私は諦めて書いた名前を横線で消すと美容院を後にした。

私は一人で船内を歩いた。自分の部屋が判らなくなっていた。しばらく歩くと大きなロビーに出た。そこには案内所があったので私は尋ねることにした。「すみません。エディリーの部屋へはどう行けばいいのですか？」 きちんと制服に身を包んだ三十歳位の男性が丁寧に應對してくれた。彼はしばらく下を向いて探したが、エディの名前はみつからなかった。「申し訳ございませんが、そのような名前の方はご乗船いただいております」 私は困ってしまった。そしてもう一度言った。「私は田中陽子と言います。李聖龍に連絡して貰えませんか？」 彼は困った顔で言った。「申し訳ございません。それは出来ない事になっております」 私はもう一度言ってみた。「私の部屋へ帰りたんです。アルンにも電話は繋いでもらえませんか？」 彼は言う。「隊長ですか？」 私は判らない。「アルンでも聖龍でもいいから連絡して欲しいの。私帰れなくなったの」 彼が言う。「ルームナンバーをお教えいただければご案内いたしますが」 「ルームナ

ンバーを知らないのよ。ドアには何も書いてなかったし。ずっと夫について来ただけだから何も知らないの」彼は困ったように言った。「奥様。ご主人様のお名前をお教えいただけますか？」私は泣きそうな声で言う。「だからエディリー 李聖龍だと言っているじゃないの」彼は慌ててどこかに電話をかけた。そして私に受話器を渡すと言った。「奥様。聖龍様です」私は受話器に向かって言う。「エディ、帰り道が判らなくなっちゃったの」彼は受話器の向こうで笑いながら言った。「だから大きな声で僕を呼びなさいって言ったろう」「どうすればいいの?」「其処がどこか判るかい?」私は船員に聞こうとした。すると彼が言った。「今の人に替わって」私は船員に受話器を渡した。「夫が替わるようにって」彼が受話器を取って何か話した。そしてもう一度私に受話器を渡す。エディが言った。「今の人が案内してくれるからついておいで」私は「判った」と言って受話器を返した。

船員の彼はカウンターから出てくると私に丁寧に謝った。「奥様。失礼いたしました。申し訳ございません。私は吉田と申します。ご案内いたしますのでこちらへどうぞ」

「お手数をお懸けます。私が不注意だったんです。ルームナンバーも知らずに出て来てしまって。本当にすみません」私達は歩きながら話していた。吉田さんが言う。「いえ、御存じ無いのは当たり前なのです。オーナーズルームにナンバーはございませんので」私はなるほどと思った。幾つかの角を曲がり、階段を昇った所に部屋はあった。彼がソックをした。エディが返事をしてドアを開けた。吉田さんはエディにも丁寧に失礼の有ったことを謝った。エディが言う。「妻はそんな事を気にしたりしないよ。それに迷惑を懸けたのは妻の方なんだから気にしないでくれ。それよりも仕事中に悪かったね」そう言ってチップを渡し「ありがとう」と言って握手をした。吉田さんは感激した様子だった。やはりエディに付随するものに感激したのだろう。私も丁寧に礼を言った。彼はドアをそっと閉めて帰って行った。

アルンはテーブル一杯に拡がっていた資料の様な物を片付けた。そして私に言う。「帰って来てよかったですね」私は頷いて言った。「だって、この船とても大きいんですもの」彼は笑って頷いた。そしてエディに向かって言う。「続きは明日にしよう。僕もパーティーの用意をしなくちゃ」エディが言う。「そうしてくれ」

私は使っていない方の寝室のバスルームへ行って昨日の洗濯物を片付け、水着を洗って乾かした。リビングに戻ると、アルンはもう居なかった。エディが言う。「ヨーコ、沢山泳いだの?」「ええ。とても久しぶりで気持ち良かったわ。何も考えないでただ泳いだの」彼は頷くと言った。「それは良かったね。ところで髪はどうするの?」私は美容院での事を話した。彼は笑いながら言った。「みんなパーティーの為に予約していたんだ。でも今頃君の名前を見てあわてているよ。オーナーを追い返しちゃった訳だから」そんな事を言っている時に電話が鳴った。エディが出る。しばらく話して彼が振り返ると言った。「ヨーコ。すぐに髪をセットしてくれるって言ってるよ。どうする?」

「このままじゃまずいかしら?」彼はウインクをして見せると言った。「行っておいでよ。船長のドレスに合わせてもらえば?」私は頷いた。彼は電話の相手に迎えに来るように言って電話を切った。そして言った。「ほらね。言った通りだろう?」私は苦笑した。「私そんなに偉くなってるのに。なんか特別扱いみたいで嫌だわ」彼は後ろから私の両肩に手を置くと言った。「構わないんだよ。君は特別なんだ。あんなに

すごい龍を背負っていて特別じゃない方がおかしいだろう。でも僕は特別じゃない普通の君が好きなんだから。ちょっと目を離すと帰って来れなくなる、普通よりもっと頼りない君の事を愛してるんだよ。だからみんなの好意に甘えていけばいいじゃないか。だって君は彼らにとって神様なんだ。さっき君が思ったように、みんなは僕に付随した何かに感激しているんだ。そして君に付随する龍をみんながありがたがって居るんだから、それは君のせいでも何でもないんだ。良くしてもらったらありがとうと言えばいいんだよ」そう言って彼は後ろから覆い被さるように私を抱きしめた。私は彼の腕の中で頷いた。彼が言う。「ドレスを持って行った方がいいよ」

私は彼の腕の中から抜け出してベッドルームで靴を履き替えドレスを持って来た。迎えの人はすぐに来た。そしてまた、先程は失礼しましたと言って私に謝った。私は微笑んで首を横に振る。そして言った。「宜しくお願いします」エディは「僕も用意してから迎えに行くから帰りは心配しないでいいよ」そう言って笑って見せた。

私は案内された美容室でチャイナドレスに合うように、前のパーティーの時より小さく髪を結い上げてもらった。そして化粧もしてもらい、ドレスに着替えた。前の時よりすこしキュートな感じになっていた。

エディが迎えに来てイヤリングを付けてくれた。彼が言った。「とても良く似合うよ。本物のチャイニーズみたいだ。写真を撮って祖父に送ろうよ。きっと喜ぶから」「そうね。お爺様はきっと中国人のお嫁さんを望んでいたんでしょうね」彼は微笑んで言う。「でも君だって前世は中国人だ。そして僕が日本人だったんだ。仕方ないじゃないか。でも君のこの姿を見れば間違いなく喜ぶよ」「写真を撮ってもらいましょう。そしてお爺様に送って」エディは頷いて言った。「そうしよう」

私達はパーティー会場へ行った。会場は随分賑わっていた。彼は船長の所へ行ってドレスの礼と、招待に対しても礼を言った。私も笑顔で礼を言った。

エディが私の手を取って指輪を外に回す。周りの空気が一瞬のうちに変わった。船長はしばらく私の龍を見つめてから私の手に口付けすると言った。

「この船に船長として乗せていただいた事を感謝します。そして今まで生きていた事をこれほど嬉しく思った事はありません。この船のすべての乗員を代表してお礼を言います。ありがとうございます。本当に美しい。例え様も無い程、穏やかで、高貴で、そして力強い。自分の想像力の貧困さを思い知らされた思いです。今まで私が夢見ていた龍の姿が余りにも貧相だったように思います。この龍は必ず私達ナーガラージャを救ってくれるでしょう」私の龍を見て静まり返った会場で、エディが言う。

「船長。妻の龍は目覚めたばかりです。私にも何が出来るかはまだ判りませんが、必ず何かを成し遂げてくれるでしょう。しかし御存じの通り龍は急激な変化を望みません。

時間がかかるのです。だから覚えておいてください。そして語り継いでください。この龍の素晴らしさを」船長の目が潤んでいるように見えた。そして会場から拍手が起こっていた。エディは拍手をする人達に対して笑顔に向けた。私もそれにならって笑顔を作った。エディは船長と握手をすると「ではまた」と言って彼から離れた。

エディは慣れた感じで沢山の人の間を挨拶をしながら渡り歩いた。その間にバイ

キング形式の料理を取り分けて食べる。私は彼にすべてを任せてついて歩いた。

私は途中で窓際のソファーに腰掛けた老婦人に気付いた。私はとても彼女が気にかかったのでエディから離れて彼女のそばに行った。「マダム、お楽しみですか？」彼女に声をかける。彼女は驚いて私の方を振り向くと大きく目を見開いて食い入るように見、そしてフーツを大きく息を吐くと笑顔を作った。「ええ、とても楽しんでるわ」私は微笑みを作る。彼女の目が何かを語ろうとしていた。私はしばらく彼女が語り始めるのを待った。少し間を置いて、彼女が話始めた。「あなたの龍は本当に素晴らしいわ」「ありがとうございます」彼女が続ける。「私、ヒットラーの龍を知っているのよ」私は驚いて尋ねる。「アドルフヒットラーですか？」彼女は頷く。「そうよ。彼も龍を背負っていたの」「その龍は私の龍と同じですか？」彼女は大きく首を横に振ると言った。「似ても似つかないわ。彼の龍は黒くてもっと凶暴な目をしていました。本当は私、もう龍なんて生まれなければ良いと思っていたのよ。だって本当に怖ろしかったんですもの。でもあなたの龍を見て、それが取り越し苦労だった事が解ったわ。あなたの龍はとても穏やかな目をしている。聖龍の愛を受けたのね」私は頷いて言った。「何時か、私の龍もヒットラーの龍のようになるのでしょうか？」彼女は答える。「いいえ、大丈夫だと思うわ。あなたの龍はもう大分育っているし、聖龍が付いているもの」私はホッとして笑顔で頷いた。

彼女の知り合いが彼女のための飲物を持ってそばに来たので私は「マダム、どうもありがとうございました」と言って私は彼女のそばを離れた。

エディは相変わらずいろいろな人の間を渡り歩いていた。私はアルンが座っているのを見つけたので彼のそばに行って少し休む事にした。

「アルン。私、疲れちゃった。ここに座ってもいいかしら」私は少し蓮っ葉な言い方でそう言った。彼は笑顔で頷いた。そして私のために飲物を注文してくれた。

彼がエディを目で追うと言う。「奴は本当にタフだな」私もエディを見ながら言う。「本当に。それにとっても慣れているわ」彼が頷く。「随分永く日本に住んでるんですってね。どこに居るの？」「芦屋だよ」私は思わず言う。「すごい！」彼は片目をつぶってみせた。「僕は君の方がすごいと思うけれどな」私は笑う。「そうだったわ。でも私すぐに忘れちゃうのよ。だってこんな状況に居た事なんて無かったし、三十年間、本当に普通に暮らしてきたの。芦屋に住むなんて言ったら夢のまた夢だったのよ」

彼は頷いて、言った。「でもこれからは君の望むものはすべて手に入るよ。芦屋の豪邸だって、コンコルド飛行機だって、スペースシャトルさえ聖龍は買ってくれるだろう」私は首を横に振って言った。「何も欲しくなんてないわ。私の住んでいるマンションは1LDKで古いけれど私だけのお城なの。それに友達から安く譲ってもらった車は、1リッターで小さいけれど私のために良く走ってくれる。もちろん空を飛んだりはしないけどね。でも飛行機が欲しいと思った事なんて一度もないわ。それに私目がいいから星まで行かなくてもちゃんと見えるの。だからスペースシャトルは必要ないわ。私はただ、毎日が平凡に暮らせれば幸せだと思っていたの」彼が言う。「君は本当に普通の人なんだね。でも平凡って言うのが一番難しい。でも、いや、だからそれが幸せの本質なのかも知れない」私はグラスを見つめながら頷いた。彼が続ける。「なのに君は、龍を背負って生まれてきてしまった。可愛そうなヨーコ」「ありがとう。でも私は代わ

りにエディを手に入れたわ」彼は笑う。そして自分に言い聞かせるようにゆっくりと言った。「そうだね。君はとても面白い発想をする。君が聖龍を手に入れたのか」私はエディの姿を目で追いながら言う。「そうよ。でも、私が手に入れたのはエディ・リー。パリで拾ったの。とても美しく神秘的で、そして繊細で傷つきやすい。それに何よりも彼は私を愛してくれるわ」アルンもエディを目で追いながら言う。「確かに君の言うとおりの男だ。しかし彼は李聖龍だ」肯定とも否定ともとれる言い方だった。私も曖昧に頷いた。

私が尋ねる。「アルン。あなた女性を愛した事がないんじゃない？」彼の表情が曇る。私は慌てて謝った。「ごめんなさい。失礼な事を言っちゃったわね。そんな訳ないわよね」彼は首を横に振って言った。「いや、構わない。そのとおりなのだから。僕だって恋をする事だってあるし、肉体的な欲求だってある。しかし何故か愛し始めようとすると冷めてしまうんだ。何故なんだろう？」彼は自分に問い掛けているようだった。私はそれに対する答えを一つだけ持っていた。だから私はそれを言ってみた。「アルン、あなたはまだ出逢っていないだけなのよ」

彼は私を見る。そして弾かれたように椅子の背に体を預けた。そして大きく息を吸って吐いた。そしてまた元どおりの位置に戻ると言った。「まだ出逢っていない？」私は大きく頷く。「そうよ。それだけの事なのよ」

エディが微笑みながら私の方へ歩いて来る。ずっと昔から出逢うことの決まっていた私の男。そしてやっと出逢えた。

エディがアルンの肩を叩くと言った。「どうしたアルン？」「ヨーコに人生相談に乗ってもらったのさ」「それで問題は解決したか？」「多分な。素晴らしい答えをもらったよ」「それは良かった」エディはそう言うと、私に笑いかけた。私は良く判らないままに笑った。そして言う。「エディ、あなた疲れない？私はもうくたくたよ」

彼は私の肩に手を置くと言った。「判ったよ。部屋に帰ろう」そして私の手を取った。私はアルンに向かって言う。「おやすみなさい」彼も微笑んで片手を上げて言った。「おやすみ」

私達は部屋に戻った。エディが言う。「ヨーコは本当に不思議だ」私は意味が判らない。彼が続ける。「誰もがヨーコの事を気に入ってしまう。君は何もしないのに皆が君に引かれる」私はよく判らないまま首を横に振った。しかし彼はその事を喜んでいるようだった。

私達はバスルームで長い間リラックスした。二人でお湯の中でまどろむ。そこは二人だけの世界だった。彼の体はともしなやかな筋肉で覆われ、無駄な肉など少しもない。

「あなたの食べたあのすごい量の食物は、いったいどこへ消えてしまうのかしら？」
「全部君への愛情に変わってしまうんだよ」「まさか。でもそれが本当だったら私ですぐに愛情太りしちゃうわね」彼が笑って言う。「だったら僕は愛するものが大きく成ってとても嬉しいよ」「でも抱えるのがたいへんよ」「その時の為にもっと鍛えるさ」私達は他愛のない会話を交わした。そして二人で順番に髪を洗い、体を洗った。そして簡単に体を拭いてバスローブをはおり、二人でリビングで寛いだ。

私は部屋を暗くして船窓から外を見た。真っ暗な海がそこにあった。微かにエンジンの音が響いている。空には満天の星が輝いていた。

エディがよく冷えたワインの入ったグラスをくれた。私はそれを、窓の外を見ながら一気に飲み干す。冷たいワインが火照った体に気持ち良かった。彼は私のすぐ後ろに立っていた。私は彼に体を預けると尋ねてみた。「愛してる？」彼が心で答えた。私は言う。「ちゃんと言って。普通の恋人同志のように」彼が声に出して言う。「愛してるよ。龍なんかとは無関係な、ただの女として君を愛している」彼はそう言うと、私を乱暴に抱き寄せ、激しく口付けをした。そしてそのままソファーに押し倒すととても情熱的に私を抱いた。私は持っていたグラスが床に転がるのを彼の腕の中で見ていた。

初めての時とは全く違う。それはとても動物的で、本能のままの交りだった。私は彼を受け入れていた。彼は私を求め続け、私は与え続ける。果てしのない行為だった。

すべての生きとし生けるものが繰り返している行為。抱き合い絡み合う。龍体と化した二人の交わり。向かい合って口付けをする。ジョカとフツギの姿だった。それは私には無い知識だった。エディの知識が私に流れて来ていた。元ターフだったのだ。薄れ行く意識の中でそんな事を思っていた。

香港～神戸 2

朝目覚めると私はベッドの上に居た。エディは居なかった。私はそっと起き上がりローブをまといベッドルームの扉を開けた。彼はソファーに座って本を読んでいた。

「おはよう。早起きね」私が声を掛けると、彼は顔を上げて言った。「おはよう。気分はどう？」私はくしゃくしゃに成った髪を掻き上げて言った。「まずまずよ」

彼は読んでいた本をテーブルに臥せると私の方へ歩いて来た。そして私の髪を指でとかし、額に口付けすると言った。「シャワーを浴びておいで」

私はバスルームへ行きシャワーを浴びた。

身繕いを済ませリビングに出ると、彼は朝食をルームサービスにしていた。テーブル一杯に並んだ料理の前で、彼は紅茶を飲んでいた。私が席に付くと彼は私のカップにも紅茶を注いでくれた。私達は朝の日差しの中でゆっくりと朝食を楽しんだ。

彼が言う。「今日一日は何をしたい？」私は考える。彼が言う。「プールは楽しかったかい？」「ええ、とっても」「じゃあ、今日も泳ぐかい？」私は少し考えて言っ

た。「そうね。少し泳ごうかしら」 彼は微笑んで頷いた。「だったら、僕も少し付き合うよ。また君が道に迷っちゃうと困るからね」 私は頷いて言う。「そうして貰えると助かるわ。実を言うと私、ここを出るとまたここにたどり着く自信がなかったのよ」 二人で笑った。

私達は食事を済ませると水着を持って部屋を出た。彼の水着も昨日と同じお店で買い、プールへ行った。

プールには誰も居なかった。私達はゆっくり泳いだ。エディはとてもきれいなフォームで泳ぐ。まるで二頭の龍が泳いでいるようだった。私達は心地好い疲れを感じるまで泳いだ。彼はプールを上がると言った。「ヨーコは思っていたより上手に泳ぐね」 「水の中に居るととても自由な感じがして気持ちいいのよ。そう、体が浮く感じが好きなの」 彼は微笑んで言った。「重力からの解放感かな」 「かも知れないわ」

私達はしばらくプールサイドで休んでからもう一度泳いだ。途中で沢山の人が入って来たので私達は泳ぐのを止めてプールを出た。

服を着替えて彼が船内を案内してくれた。それで私は船内の事が凡そ判った。

「エディ、これでもう迷わないで帰れると思うわ」 彼は笑って言った。「そうだね。でも昨日のパーティーでみんな君の事を知ったから迷ってもすぐに連れて来てくれるさ」

私も笑った。「みんな知ってるから迷子になるとカッコ悪いんじゃない」 彼は言った。「なるほど」 ほとんど船内を一週して、部屋に戻った。扉を開けると、電話が鳴っていた。エディが受話器を取る。そして言った。「アルンからだよ」

私は頷いて見せ、バスルームに行行って水着を洗って乾した。それを終わって出て来ると電話を終えたエディが言った。「ヨーコ、これからアルンと打ち合わせがあるんだ。君はどうする？」 私は尋ねる。「難しい話なんでしょう？」 彼は微笑んで頷く。「多分ね」 「私、少しベッドルームで休むわ」 彼は頷いて言った。「気が向いたら出て来ればいい」 私も頷いた。

私はベッドに寝そべて本を読んだ。日本の神話についての本だった。読めば読むほど判らなくなる。日本の神々について、まるで理解させることを拒んでいるようだった。

天照大神とスサノオについての話が特に良く判らなかった。それに三貴子として天照大神と共に生まれたはずの月読の命はそれだけの記述で後は全然出てこない。スサノオはとても荒くれ者かと思えば、突然人が変わったように良い神になってしまうし、ニギの命は出雲に降臨するのかと思えば突然日向に降りてしまった。大和には神武より先に正当な神が居たようなのに、簡単に神武に政権を渡してしまっている。私は同じところを何度も読み返しながら先に進む。それでもなかなか理解出来なかった。私はパリで加藤の言った事を思い出していた。制服者は自分達の都合の良いように歴史を書き換えてしまう。きっと神々の名もその時に奪われたり変えられたりしたのだろう。この神々の中に龍はどれだけ居るのだろうか。

エディは言った。ナーガラージャは虐げられた者たちの末裔だと。そして龍を待ち続けているのだとも。私はこの神話の中に龍を蘇らせることが出来るのだろうか。い

や、皆はそれを望んでいるのだろうか。私にはそれすら判らなかつた。今リビングへ行けば、エディとアルンが教えてくれるだろうか。きっと教えてくれるだろう。でもエディはどちらでも良いと言う。必要な時には判るのだろう。私は昨夜エディの知識が私に流れ込んで来たのを思い出した。古い道教の神の名前だった。ジョカとフツギ。人頭蛇身の対なる神だった。宇賀神。私はその神の日本名も知っていた。とても不思議だった。しかし不思議はとても沢山有った。今更驚く事でもないように思えた。私は本を読みながらいつの間にか眠っていた。

途中でエディが様子を見て来たのを感じた。彼は読みかけていた本を片付けると、私を上向きに寝かせ、毛布を掛けてくれた。そして音を立てないようにドアを閉めた。私は夢うつつの中でそれを感じていた。毛布の暖かさの中で私は眠りに引きずり込まれるように落ちて行った。

とても長い夢を見ていた。エディに揺り起こされた時私は、自分が誰でどこにいるのかも判らない状態だった。

「ヨーコ。ヨーコ起きて」美しい男の顔が目の前にあった。私は言ってみた。「ヨーコ」しばらくしてそれが自分の名前、私を呼んだのがエディである事が理解出来た。

私は言った。「エディ。私とても長い夢を見てたの」

彼は微笑んで頷くと、椅子を持って来てベッドの傍に腰かけた。私は話し始める。

「あなたが私を殺した時の事だったわ。私はとても疲れていて怪我もしていたの。それに何日も何も食べていなかった。とても寒くて、体が氷のように冷たかったわ。

でも何かに引き寄せられるように歩いていたの。フラフラとね。そして敵の兵隊であるあなたに出逢った。でもあなただと気付いたのは死の瞬間だったわ。昨日あなたが言ったように、あなたは何も知らずに私を撃ったのよ。誰かに肩を掴まれて。あれは事故だったわ。でも私は暗やみの中であなたを感じたの。銃口から吹き出した火花に照らされたあなたの顔が、私の記憶を蘇らせたのよ。その瞬間物凄い衝撃が私を襲った。私は驚いて胸に手を当てたの。初めはすごい勢いで血が噴き出してたわ。その血がとても暖かかったのよ」

私は彼を見た。彼は目を閉じて私の話を聞いていた。私は続けた。

「ねえ、不思議だと思わない？ 体は冷え切っているのに血だけは暖かいの。私はその暖かさがあなただと思ってたわ。血の暖かさに触れて、とても幸せな感じがしたの。

でも血はすぐに無くなってしまったわ。ドロドロとしか出てこなくなって、次の瞬間、とてつもない痛みがやってきた。私は助けてって叫んだ」彼が低く言う。「君は何も言わなかった」私は言う。「そう。声にならなかったのね。でも叫んだつもりだったのよ。

だけどその痛みも長くは続かなかつたわ。まるで波が引くように意識と共に遠退いて行った。遠退く意識の中で私はあなたを感じていた。とても懐かしくて、とても安らいだ気持ちだった。あの血の暖かさがあなただったのね。それで、私はとても満ち足りた気持ちで死を迎えたの。それから時が経ったわ。瞬間の様な、永遠の様な時が

流れた。私は光の中にいた。どこから来るのか判らない光。色もなく、暖かさもない、純粋な光よ。ただ、安らいでいたわ。そこには安らぎ以外何も無かった。その中で私は休んだの。随分永い間考える事を止めてただ休んだ。するとどの位経ったか判らないんだけど少しずつ光が変化を始めた。どう言う風に変わっているのかは判らないんだけど、確かにその光は変化していた。私はその時、すごい早さで色々な事を理解したの。それは地球の始まりから終わりまでを理解する位の量よ。確かにあの時私は、地球の始まりから終わりまで、いやそれ以上に、なぜこの地球が創造されたのかまで理解していたと思うわ。そして、それと同じ位の量で私自身をも理解したの。

宇宙全体も、地球の一生も、人の一生も、同じ量なのよ。肉体の細胞一つ一つが生き物で、意思や感情を持っていたわ。人間一人一人に意思や感情があるのと同じ様にね。今思うと、とても不思議な事ばかりなのに、夢の中の私はすべて当たり前のように理解していた。それと同時に自分のすべきことも理解していた。でもそれが思い出せないのよ。まるで何かに邪魔されているみたいに思い出せない。でも私は確かにあの時点ですべてを理解したのよ。そして、すべきことが出来るようにちゃんとインプットし、作動させた。あの封印はもう一度あの光の中に戻らなければ解けないわ。それも理解しているの」

私は自分に言い聞かせるように言い終えるとエディを見た。

彼が尋ねる。「龍はいた？」私は首を振る。「龍も神もないわ。ただ光があっただけで、形もなければ熱もないの。そして想いも感情もない。ただ理解するだけの世界。つまり、肉体で感じるものをすべて取り払った世界なのよ」

彼は優しく私の手を取って言った。「随分遠くまで行って来たんだね」私は彼の手の温かさを感じながら言った。「あなたが私で、私があなた。個がすべてですべてが個なのよ。多分そう言う事だわ。まるでメビウスの輪のように」

「少し目を閉じて休むといいよ。君はとても遠い所まで旅をして来たんだから」

私は目を閉じて彼の手の温もりを感じていた。それはあの時の血の暖かさだった。しばらくそうしていてから、私は言った。「エディ。あなたおなかすいて居るんじゃないの？」彼は答える。「はい。もうペコペコだよ」私は笑って起き上がった。そして尋ねる。「アルンはどうしたの？」「もう帰ったよ。それで君を起こしに来たんだ」

「今何時？」彼が時計を見て答える。「2時を少し過ぎたところ」「おなかすいたわ」彼は私を起こして言った。「レストランへ行けばまだ何か食べられるよ」

私は頷いて靴を履いた。立ち上がると、未だ体と精神のバランスがよく取れていないような感じがして、少しふらつとした。彼が慌てて支えてくれた。私は言う。「きつと、おなかがすきすぎているのよ」彼は笑って言った。「ヨーコは強い」私も笑った。

私達はレストランで食事をし、デッキに出た。私達の乗った船は、白い波を立てながら進んでいた。私はこの海に眠る龍の事を思っていた。静かに眠り続けて欲しい。

私は隣で海を見ていたエディに言う。「ねえ、私夕べヒットラーの龍を知っているって言うマダムに会ったわ」「マダムローザだ。マダムと話したの？」「ええ、少しだけ」「彼女はなんて言ったの？」「ヒットラーの龍は黒くて凶暴な目をしていたっ

て。でも私の龍はあなたが居るから大丈夫だろうって言ってくれた」「そう。彼女がそう言ったの」「ええ。あなたマダムの事、よく知っているの?」「未だ僕が子供だった頃に、祖父と一緒に会った事がある」「どんな人なの?」彼は少し考えて言った。「彼女はヒットラーの龍を使う為に生まれて来たのに、間に合わなかったんだ。彼女がヒットラーを愛する前に、彼は自らの欲で龍を目覚めさせてしまった。可愛そうなマダムローザ。僕は間に合って本当に良かった」そう言って彼はとても辛そうな表情を見せた。私はそこに龍使いの悲しみを感じた。そして、その悲しみはすべてのナーガラージャ達が、多少の差はあっても持っていた。それは、この世に生まれて来た者達すべての共通の悲しみなのかも知れない。

私達は長い間風に吹かれながら海を見ていた。その海は彼の街香港にも、私の生まれた国日本にも繋がっていた。

私達は船室に戻り、エディはソファーに座って本を読む。私は日本神話の本にめげていたので、ベッドルームで荷物の整理をしたり部屋を片付けたりした。とても穏やかな時間が流れていた。

する事がなくなってリビングに出ると、エディは真剣な顔で本に没頭していた。私は彼の邪魔にならない様にそっと部屋を出て、船内を散歩する事にした。もう迷わないで戻る自信もあった。

しばらく歩くと、眺めの良いサロンに出た。そこには、窓に向かってソファーが並べられ、一人だけそのソファーに座って海を見ている人が居た。私も少し休もうと思い、ソファーの前に回る。一人で海を見ていたのはマダムローザだった。

私は彼女に声を掛けてみた。「マダム、ご一緒してよろしいですか?」彼女は私を見上げると微笑んで頷く。私は彼女のとなりに腰を下ろして海を見る。

彼女が私の方を見て行った。「ヨーコ、エディ坊やはどうしたの?」「部屋でとても難しそうな本を読んでいたの、邪魔しないように散歩に出て来たんです」彼女は微笑んだまま頷いた。私は少し考えてから、思い切って言ってみた。「もし宜しかったら、ヒットラーの龍の事を話していただけますか?」彼女は私の顔をじっと見ると言った。「もちろん構わないわよ。何を話せばいいのかしら?」

私は尋ねる。「マダムはヒットラーの龍使いだったのですか?」彼女は少しの間目を閉じた。そして言った。「エディ坊やは何て言ったの?」私は少し言い辛かったが、正直に言う事にした。「あなたはヒットラーの龍を使う為に生まれて来たのに、彼の龍の成長に間に合わなかったと」「彼はそう言ったのね。それであなたはそれにどう思うの?」

私は海の方に目をむけて考えた。そして言う。「私は。そう、私はあなたが龍使いの使命を全うしたように思います」「どうしてそう思うの?」彼女が尋ねる。「マダムの中の悲しみが余りにも大きすぎて、私にはとても哀れに思えるのです」彼女は驚いたような顔をした。私は慌てて謝る。「すみません。とても失礼な事を言ってし

まいりました。もっと適当な言葉を見つけられれば良かったのですが。本当にすみません」

彼女が言う。「構わないのよ。哀れってとても素敵な言葉だわ。つまりあなたは、私の悲しみを見て、龍使いの使命を果たしたと思ったのね」私は頷く。彼女が続ける。

「あなたは龍使いの使命が何なのか知っているの？」私はもう一度頷く。「エディ坊やに聞いたの？」私は首を横に振って言った。「マダム。龍使いが龍の事を良く知っているように、龍にも龍使いの事が判るものなのです。そして二人で最後の仕事へ向かって協力し合いながら走って行くものなのではないでしょうか」彼女は黙ってうつ向いていた。私は慌てて言う。「すみません。私、調子に乗って偉そうな事を言ってしまいました」「構わないのよ。そんな事を気にしているんじゃないんだから。ただ、あなたを見ていると、昔の事を色々思い出してしまうだけなのよ。だから気にしないで。思った様に何でも言ってちょうだい」そう言ってそっと微笑んだ。

私は何を言って良いのか判らないのでしばらく黙っていた。しばらくしてマダムローザは問わず語りに語り始めた。「初めて彼に会ったのは私が未だ小学生の頃だったのよ。父が外交官でドイツに居た時の事だったわ」彼女は一つずつ思い出す様に、そしてとても丁寧に言葉を選んで話した。「あの時、そうあれは父の主催したガーデンパーティーの時だったの。私は大人の集まりなので、自分の部屋の窓から楽しそうな大人達を見ていたのよ。その中にアドルフが居たの。彼はあまり目立つ感じじゃなくて、そうね、どちらかと言えばちょっと神経質な感じで、木にもたれてひっそりとしていたわ。その時私、彼に龍の影を見たの。それは未だ影でしかなくて輪郭さえもはっきりしていなかったわ。とってもびっくりしたわ。まるで二重写しの映像みたいな感じで、視線がある一点にある時だけそれは見えたの。初めは気のせいかと思ったのよ。でも、何度も見直して、その度にある一点に視線が合うとそれは必ず見えるのよ。それでパーティーが終わった後、私は父にその事を言ったの。父は、それがお前に見えたのならそれはお前の使う龍なのかも知れないと言ったわ」「お父様は龍についての知識がおりだったのですか？」私が尋ねた。「ええ。家は龍神族の家系だったのよ」「なのにお父様には見えずに、マダムにだけ見えたのですね」「ええそうよ。だって本当に未だ影でしかなかったのですもの」私は頷いた。「でもあの時私は本当に未だ子供だったのよ。龍使いが何をするのも知らなかったわ。それにその後すぐに父は日本に帰る事になって、私もついて帰ってしまったの。次に彼を見た時には彼はもう総督になっていたわ。影でしか無かった龍はしっかりとした質感を伴った龍に成長していたの。そして、どの角度から見てもしっかりと見えるようになっていたわ。それは思い出すだけで体がガタガタ震えるほど、怖ろしい姿をしていた。真っ黒で凶暴な目を見開いていた。エディ坊やのお爺様がナーガラージャを集めたのも、あれがきっかけだったのかも知れないわね。世界中のナーガラージャに見る事が出来る程、彼の龍はしっかりとしていた。今のあなたの龍と同じぐらい力を持っていたのよ。でもその力は神の力と悪魔の力ほど質が違ったけど」

私は尋ねる。「誰が彼の龍を育てたのかしら？」彼女は力無く首を振ると言った。「いろんな人の欲が彼自身の欲を煽ったのよ。誰も彼に愛を与えなかったの。彼の側近に火の一族に魂を売った龍使いが居た事も確かなんだけど、でもその人は龍使いの本当の仕事を知らなかったの。だから彼の龍はあなたの龍の様に成れなかったのよ」

「マダムはその後どうなされたのですか？」 「大龍、エディ坊やのお爺様に頼んでドイツに渡らせてもらったわ。そして大龍の力でアドルフに近付いたの。その時は私ももう大人に成っていたから、龍使いとして何かをしないではいられなかったの。まず香港まで船で行って、大龍にいろんな人に紹介状を書いてもらった。その上とても沢山のお金も持たせてもらったわ。大龍は私に賭けていたのよ。アドルフの龍を静められるのは私しか居ないのを知っていたのね。それで、それを持って私はまずイギリスへ渡って、その後ドイツに入ったのよ。いろんなつてを頼って、彼の、アドルフの別荘に潜り込んだの。その別荘には彼の愛人が居たのよ。エヴァと言ってとても美しい人だったわ。私は彼女の世話係としてその別荘に住み込んだ。彼女はとても彼を愛していたわ。でも彼女には龍の望む物を与えられなかった。龍に愛を与えられるのは龍使いだけよ。お互いに求めても求めても与えられる事の無い、辛い生活だったのかも知れないわね。とても悲しいことだわ」

マダムローザはとても寂しそうに言った。そして暫く目を閉じた。その後また遠くを見るような目をして話し続ける。

「そう、あれはある嵐の夜だった。エヴァが外出して別荘に居ない夜に、突然アドルフがやって来たの。とてもひどい雨で、車を止めた所から扉までの間だけでずぶ濡れになった程の雨だったわ。私はずぶ濡れになった彼に驚いたもの。私はすぐにお風呂の用意をして彼の世話をしたわ。彼はエヴァが居ないので少しがっかりしていたけれど、外はすごい嵐で戻る事も出来なかったのよ。その夜初めて私は彼の龍と話したわ。

その時彼が、疲れのせいか、雨に濡れたせいかは判らないけれど、すごい熱を出したのよ。私は一晩中付きっきりで看病しながら私は彼の龍に呼び掛けたのよ。あなたは間違っているって。あなたの本質は愛なんだって。何故か彼の龍は私の事を知っていたわ。そして寂しそうな目をして言ったのよ。真黒で、恐ろしい彼の龍の目が、とても寂しそうだっただのよ。そんな目をしながら龍は、なぜもっと早くに私の前に現われなかったんだって。私は泣いたわ。辛くって、悲しくって、胸が締め付けられる思いで泣いた。彼は自分が間違っている事を知っていたのよ。なのに彼にはどうしようも無かったのね。彼の龍は自分のして来た事を私にすべて見せたわ。私はそれをすべて受け入れようとした。それが龍の望む愛だったのよ。受け入れることが龍使いである私の愛でもあった。なのに私は彼が沢山の人を殺している所で恐ろしくなってしまったの。龍はそれをとても敏感に感じ取って私の心から去って行ったわ」

マダムは目を閉じていた。そして涙が一筋こぼれ落ちた。私は言う。「マダム。なぜ彼があんなに沢山の人を殺したと思われませんか？」彼女は黙って首を振った。

私が言う。「龍にとっては血が愛なんです」マダムは大きく目を見開くと私の顔を食い入るように見て言った。「そうだったの。それで彼はあんなに沢山の血を流す事を求めたのね。それだけ愛が欲しかったんだわ。可愛そうなアドルフ」

私は目を閉じて言う。「血は暖かさであって、そして安らぎなのです。愛に満たされていればそれが判ります。でもきっと彼にはそれが判らなかつたのでしょう。満たされない心に龍が目覚めた。龍には血を求める習性があるのかも知れません。でも、彼はその求め方を知らなかつたのでしょね」 「それで彼はあんなに人の血にこだわり、そしてあんなに沢山の血を流したのね」私は頷いた。「彼が悪かつたん

じゃなかったんだわ。なのに私は彼を受け入れられなかった」 「マダム。でも彼はその後、あなたを受け入れたんでしょう？」 彼女は小さく頷いた。そして言う。「そうね。それで彼は破滅に向かって突っ走ったのよ」 私にはその事が良く理解出来た。

「マダム。あなた今彼と一緒に居ますね」 彼女は頷いて言った。「良く判るわね。そうよ、私はいつも彼と一緒になの」 そう言ってブラウスのボタンを一つ外すと、真っ赤なルビーのペンダントを取り出し、首から外して私に手渡してくれた。それは暖かく、そして小さく脈打っていた。私は手の中にヒットラーの龍を感じていた。

彼女が言う。「最後の日に彼を訪ねたのはエヴァだけじゃなかったのよ。彼がエヴァを銃で撃った後、私がこの手で彼を撃ったの。そして彼の龍をこの石に移したのよ。その時初めて彼と私は一つに成れたの」 そう言うと彼女は自分の手を見つめながら涙を流した。

私は手の中のアドルフヒットラーに安らぎを感じていた。 「マダム。彼はとても安らいでいるわ。あなたの愛を彼は受け入れていたのね。そしてあなたも彼を愛していたのね」 私はそう言って自分の龍を解き放した。

サロンの入口をエディが走り込んで来るのを感じた。その後私はエディの目ですべてを見ていた。

私の龍が部屋の中をゆらゆらと泳ぐ。 抜け殻と化した私の体はソファーに倒れ込んで居た。 エディは私の側に走って来ると私の体を抱き起こす。 龍は穏やかに部屋の中を舞う。 入口にはアルンも居た。アルンはただ呆然と立ちすくむ。

私の龍がマダムローザのペンダントをくわえる。 そして二度三度と大きく頭を振った。 大粒の深紅のルビーから銀色の光が弾けた。 その光が龍の形をとり始める。そして私の龍とヒットラーの龍が歓喜の舞を舞う。 とても美しく、喜びに溢れていた。

それはまるで、中華街の龍踊りのように、時には激しく、時には穏やかに、懐かしさを確かめ合う様に二頭が絡み合う。 お互いに相手を確認、それに満足した二頭の龍は、しばらくの間見つめ合っていた。 そして銀色のヒットラーの龍が静かに目を閉じ、金色の私の龍の中に飲み込まれて行った。それはとても自然で、飲み込まれると言うより、ヒットラーの龍が私の龍の体内に潜り込むという感じだった。

マダムローザは大きく目を見開いてそれを見ていた。 二頭の龍は息を合わせるようにして、何度も身をくねらせながら一つになった。 最後に銀色の尾が見えなくなって、それは終わった。

金色の龍は輝きを増し、初めより少したくましさを身に付けたように思えた。 エディが私の手を取って指輪を回す。龍は音もなく空間に溶けるように消えた。

私は耳元でエディの声を聞いた。 「ヨーコ！ ヨーコ！ 大丈夫かい？」 私はゆっくり目を開ける。自分の目で周りを見た。そっと首を起こすとマダムローザが寂しそうに微笑んでいた。

私は起き上がりマダムローザに言った。「ごめんなさい。あなたのアドルフを・・・」

彼女はゆっくり首を振って言う。「構わないのよ。彼が望んだ事ですもの。それに、私もそれを望んでいたのよ。ありがとう。本当にありがとう」彼女はそう言って涙を流しながら私の手を握る。

私はその手を握り返して言った。「本当に良かったのかしら。マダムは寂しくないですか？」

彼女は少し微笑んで答える。「もちろん寂しいわ。でもこれで良かったのよ。だって彼あんなに輝いて、それにとっても喜んでいて。あの恐ろしかった暗黒の龍が嘘のようだったわ。あなたの龍に救われたのよ。きっと彼はあなたを助けてくれるわ。その為の一つに成ったのよ」

エディが床に落ちたルビーを拾い上がると、マダムに差し出した。マダムはそれを受け取る。「ありがとう。彼の抜け殻ね。やっとこれで私の仕事は終わったのね」エディが頷く。「マダム。龍使いのすべての使命を終えられたのですね。僕もマダムの様にやれるだけの事をやってみます」彼女は頷いて言う。「エディ坊や。大きくなったわね。そしてとても立派になったわ。あなたはヨーコがたとえどんな事をして、彼女を愛し続けてあげてね。そして彼女を幸せにするのよ。それが龍使いの仕事なんですからね」「はい。マダム。きっとそうします」そう言って握手を交わした。そしてマダムは私の方を見て言った。「ヨーコ。エディ坊やを信じるのよ。必ずあなたを幸せにしてくれるから。聖龍にしかあなたの求める物を与える事は出来ないのよ。だからお願いね」私は何も言わずにただ頷いた。

私はエディに抱きかかえられるようにして立ち上がった。そしてもう一度マダムローザに頭を下げた。彼女も立ち上がって私を抱きしめてくれた。淡いバラの香りでした。

私はエディに誘われてサロンを出た。彼は呆然と立ちすくむアルンの肩を叩いて言う。「アルン。しっかりしてくれよ」アルンは我に返って言う。「聖龍。大丈夫なのか？」エディが言う。「何が？」「ヨーコの事だよ。ふらふらしているじゃないか」私がふざけて言う。「アルン、大丈夫よ。少しおなかがすいただけだわ」エディが笑う。「今龍を一匹飲んだじゃないか」「でもまだ足りないのよ」アルンが隣で言葉を失っていた。「ヨーコ。アルンにジョークが通じていないよ」「アルンごめんなさい。私が悪かったわ。でも本当に大丈夫なのよ。でも何か飲物が欲しいわ」エディが言う。「部屋に戻ったら紅茶を頼んであがるよ」私は頷いた。エディがアルンに言う。「お前も一緒に来るかい？」彼は首を横に振って言った。「いや。用が有るからまたにするよ。後で会おう」そう言って私達と反対の方向へ歩いて行った。

私達は部屋に戻る。私はまだ少しふらふらした。それは寝起きの時のようで、精神と肉体のバランスが巧く取れていない感じだった。彼は私を支えながら言った。「ヨーコ。君は本当に素晴らしいよ」「素晴らしいのは私じゃなくて龍でしょう」彼は腰に回した腕に力を込めて言った。「違うよ。君が素晴らしいんだ」私は首を横に振って、言う。「でも、あなたが来てくれて良かったわ。自分で龍を解き放しても収める事は出来ないのね」彼が笑う。「そうだね。普通の時は大丈夫だけれど、さっきみたいに完全に

龍が出てしまうと、体は抜け殻になってしまうんだ。これからは僕が居る時にしか指輪を回さない様にしようね。そうすれば大丈夫だろう？」 私は頷いた。そして言う。「きっと慣れるわ。いつもこんなにふらふらしていたら大変なものね」「そうだね。だけどいつもこうして僕が支えてあげるから心配はいらないよ」 私は笑って言った。「頼りにしてるわ」「OK 任せて」

部屋について彼は私をソファーに座らせると約束どおり紅茶を注文してくれた。「アルンがとても驚いていたわね」「彼は龍について何も知らないからね」「あら、それなら私もよ」「そうか、僕も新米の龍使いだから良くは知らないんだ」 私達は笑った。

「きっと彼もすぐに慣れるわ。ずっと私達と一緒に居てくれるんでしょう？」 「そうだよ。アルンはずっと僕達を守ってくれる。頼りに成る男だよ」 私も頷いた。「そう言えば、私が迷子に成った時フロントの人がアルンの事を隊長って呼んでたわ」 彼は頷いて言う。「そうだよ。アルンは偉いんだ。龍と聖龍を守る特殊部隊の隊長さ。ナーガラージャの青年達は、みんなアルンに憧れて居るんだよ。憧れのスター。とても強くて頼りに成る」「そうなんだ。すごい！ でも、内緒の話だけど彼恋人が居ないんだって。それで悩んでたわよ」「なるほど。それでヨーコに相談してたんだ。それでなんて言ってあげたの？」「まだ出逢ってないだけよって言ったわ」「確かに。それは素晴らしい答えだ」「だって、そうとしか思えなかったんですもの」「そのとおりだ。きっと彼も僕達みたいに運命的な恋に落ちるさ」「その時が楽しみね」「はい。そうだね」

そんな話をしているうちにエディの頼んでくれた紅茶が運ばれて来た。彼は私のカップに紅茶を注いでくれる。私はその紅茶を一口飲んで言った。「おいしいわ。やっぱりあなたと飲む紅茶はいつも飛び切りおいしい。なぜかしら？」「きっと紅茶に魔法がかかって居るんだ」「龍と龍使い。それに今度は魔法使いまで出て来るの？ まるでおとぎ話ね。それに私はシンデレラみたいに突然お金持ちに成っちゃったし」「君はシンデレラなんかじゃないね。僕が思うに、多分、眠り姫の方が近いよ」「だったら、あなたのキスで目覚めたのかしら」「違ったっけ？」「そうだったかも知れないわね。でももう忘れちゃったわ」彼は笑いながらカップをテーブルに置いて私の後ろに回ると体を屈めて口付けをした。「どう？ 思い出した？」 私は笑って言った。「あら。目が覚めるんじゃないなくて眠く成って来たわよ」「変だな。そんな筈無いんだけどな」「でも何だか気が抜けたのかしら、本当に少し眠いわ」彼は私の肩を抱いて言う。「そうかも知れないね。初めて龍が抜け出しちゃったんだもの。疲れていてもおかしくないよ。少し横になって頭と体を休めるといいよ」私は頷いて紅茶を飲み干すと彼にもたれかかった。

彼は私を抱き上げるとベッドルームに運び、ベッドに横たえた。そして毛布を掛けると部屋を出て行こうとした。

「エディ、何だか寂しいの。傍に居てくれない？」彼は微笑んで戻って来た。そして椅子をベッドサイドに持って来て座った。「これでいいかい？」私は頷いて目を

閉じた。自分で思っていたより疲れていたのか、眠りはすぐにやって来た。

私は夢を見ていた。いや、それは夢じゃなかったのかも知れない。しかし私は初め、夢だと思っていた。

ベッドルームにブルーの光が満ちていた。その中心にエディが居た。ブルーの光はエディから出て居た。龍が居た。ブルーの光の中を穏やかに龍が泳ぐ。龍はエディの周りを回る。私には龍が聖龍としてのエディを試しているように思えた。私には何も聞こえない。しかし龍が何かを言うとエディの光がほんの少しだけ揺らぐ。しかしその光の強さは変わらない。

私はエディの心に耳を澄ます。私への愛を彼は龍に示していた。龍が彼を挑発する。彼はそれに動じない。そして心を開き続ける。次の瞬間彼の光が大きく揺らいだ。私は彼が大きく動揺したのを感じた。それが良く無い事だと言う事も直感的に理解した。私は焦った。彼を助けなくてはいけないと思ってもがいた。

目覚めさえすれば良いと思った。しかし私は眠りに捕われていた。体が動かない。言葉になるかどうかは分からなかったが、私は力一杯叫んだ。

「私にも見せて！」

その途端、エディの中のヴィジョンが私の中に飛び込んで来た。それは見るもおぞましい光景だった。私が大龍の上に股がり、大きなナイフで胸を切り裂いている。そして大龍の胸に手を突っ込み心臓を掴み出し、それを大きな口を開けてかぶりつく。大龍は血に塗れ、大きく目を見開いて事切れていた。私はその血を浴び、髪を振り乱し、まるで悪魔のような顔で心臓を口にしていた。

私は叫ぼうとした。「いやだ。やめて」そう叫びたかった。しかし声は出ない。私はエディに助けを求めようと彼を見た。彼は初めと同じ様子で椅子に座って居た。そして私は・・・彼が微笑むのを見た。

私は自分の悪魔のような姿よりも、彼が微笑んで居ることの方に、怖れのような感情を持った。

「どうしてなの？ 何故あなたは微笑んで居るの？」

彼は私の間に答えた。

「それもヨーコなんだよ。僕の愛するヨーコなんだ」

私は大声で叫んだ。言葉にならない叫びだった。それで眠りから逃れる事が出来た。

目覚めた時も夢の中と同じ様にエディは座って居た。私は重い体をやっとの事で操り、ベッドに起き上がって言う。

「エディ、龍はあなたに何をしたの？」

彼は夢の中と同じように、穏やかに微笑んでいた。そしていつもの彼の優しい声で言った。「君は見なくて良かったのに」

「あなたが戦っていたのに私は何も出来なかったのよ」彼は黙って首を横に振った。

私はベッドを下りて彼の側に行き、そして彼の足元にひざまづいて彼の手を取った。

「何故。何故あなたは微笑んだの？」

彼は夢の中と同じ口調で言った。

「あれもヨーコなんだ。僕の愛するヨーコなんだよ」

私は彼の手を取って泣いた。

彼はそんな私の髪を撫でて言った。「泣かないで。ほら、もう大丈夫だから」 私は彼のそこ知れぬ強さを感じていた。そして彼と出逢えた事に感謝していた。エディは龍との戦いで、しばらくは立ち上がる事も出来ない程疲れていた。

私は彼の膝に頭を乗せて彼の存在を感じていた。窓の外では真っ赤な夕日が沈もうとしていた。

夕食はルームサービスにして、二人だけでゆっくり食べた。

私が言う。「エディ。あなたが試したのね」

彼は微笑むだけで答えなかった。私はきっと彼が自分を試したのだと思った。

「ねえ、明日は何時に神戸に着くの？」 「12時だよ」 「何だか変な感じよ」 「何が？」 「良く判らないけど、日本に帰るって何だ変よ。だって、日本には私の生活があったのよ。でも明日神戸に着いても、もう私の生活は何も無いわ」 彼は少し困ったような顔をして言う。「ごめんね。僕が君の大切なものを全部壊してしまったね」

私は彼の言った大切なものについて考える。私にとって大切なものっていったい何だったのだろう。仕事？ 生活？ そんなものになんの価値があったんだろう。良く判らなくなっていた。

私は彼の顔を見た。彼は心配そうに私を見ていた。私は彼に微笑んでみせる。

「今、私にとって大切なものって、あなたしかないわ。マダムローザが言ってたじゃないの。私の望むものは、聖龍にしか与えられないって。それって素晴らしい事だわ。だってあなたと居れば、私は必ず与えられるって言う事だもの。そうでしょう？」

彼はゆっくりと頷いた。「そうだね。僕はきっと君の望むものを与えてみせるよ」

私は死について考えていた。彼に与えられる穏やかで愛に満ちた死。

「ヨーコ。もう死について考えるのは止さないか。僕達はまだ生きている。それにまだ結ばれたばかりだ。僕は君ともっと楽しみたいんだ」 そう言って立ち上がると私を後ろから抱きしめた。

私は彼の胸にもたれ掛かって、言った。

「そうね。私も、もうしばらくは生きていたいわ」 彼が言う。「僕達は良く気が合う」

私が言う。「夫婦ですもの」 彼が笑う。「そうさ。ただの夫婦だよ」

その夜私達は二人で抱き合って眠った。とても深く、そして安らかな眠りだった。

私は朝日を浴びて目覚めた。彼はもうベッドには居なかった。時計を見ると8時を回ったところだった。彼は本当にいつも早起きだ。私はベッドの上で伸びをした。手や足の先まで意識を通わせる。とても気持ちの良い朝だった。私はベッドの上で彼を呼んでみた。「エディ！」

彼がドアを開けて首を出す。「ヨーコ。おはよう。気分はどう？」 「とってもいいわ」「それは良かった」「あなた何してるの？」 「君が起きるのを待っていたんだよ」「起こせばいいのに。おなかがすいたんでしょう」「良く判るね。でも君がとても気持ち良さそうに眠っていたから、起こしたり出来なかったんだよ。それにヨーコを起こすのは大変だからね」「どうして？」 「もう忘れちゃったのかい？ ほら、パリから香港に飛んだ朝の事」「そう言えばそんな事も有ったわね」

私はベッドの上に起き上がり髪を捌いた。「私ひどい顔してない？」 彼は微笑んで答えた。「チャーミング」 私も微笑んでベッドを下りて言う。「シャワーを浴びて用意するから、もう少し待っていてね」 彼は「OK」と言ってドアを閉める。

用意がすんでベッドルームを出ると彼は電話で話していた。私は彼の電話が終わるのを待つ。彼は電話を終えると言った。「アルンが食事をしながらこれからの予定を話してくれるって」 私は頷いた。

二人でレストランへ行ってアルンを探したが、彼は未だ来ていなかった。窓際の席に座って朝食を頼んだ。

アルンはすぐに来た。私達は食べながら話す。

アルンが言う。「正午に入港して入国手続きを済ませ、神戸のホテルに案内するよ。其処で今日は一日ゆっくりしてしてくれ。それで明日の朝、高野山に向かう。聖龍、それでいいか？」 エディが頷く。私が尋ねる。「高野山で何をやるの？」 エディが答える。「偉いお坊さんにいろんな事を教えてもらうんだ」 私はよく判らないままに頷いた。エディが言う。「その日程すべて整うんだな」 アルンが頷く。「ありがとう」 エディが言った。私が尋ねる。「その後はどうするの？」 エディが答える。「琵琶湖、熊野、四国、そして出雲に行くことになるとおもうよ。でも行ってみなければ判らない。もっと行かなければならない所があるかも判らないし、行けなくなる所もあるかも知れない。でもきっと龍が教えてくれるよ」 私は首を横に振って言う。「あなた達に任せるわ。でも私の家に帰れるのかしら？」

アルンがエディの方を見る。エディが答える。「ヨーコ。しばらくは無理だと思うよ。でもどうしても帰りたいのなら何とかするよ」 私は少し考えた。まだ帰る必要に迫ら

れてはいなかったのだから私は言った。「別にいいわ。でも時間が空いたら言ってね。洋服なんかも入れ替えたいから」 エディが頷いた。

私が言う。「アルンはずっと一緒にいてくれるの？」 アルンが答える。「ああ。僕が運転手だよ。新婚夫婦の邪魔かも知れないけどね」 エディが言う。「アルンの運転はとっても安全なんだ」 私はアルンに手を差し出して言った。「よろしくお願いします」 彼はその手を握って言った。「こちらこそよろしく。栄えある役目をありがとう」 私が尋ねる。「龍には慣れそう？」 アルンが答える。「多分ね。でも昨日のには驚いたよ」「私だってそうよ。だって私はあなたより龍について何も知らないのよ。つい最近までただのおばさんだったんですもの」「それにしても落ち着いていた」「ただ気が強いだけなのよ。おばさんの凶太さかも知れないわね」

エディは笑って見ている。そしてタイミングを見計らって言った。「みんな何千年も待ち続けてたんだ。知っている人なんて誰も居ないよ。みんなが初めての事なんだ。だから慎重にやろう」 アルンが頷いた。

「どこのホテルに泊まるの？」 私が尋ねる。 アルンが答えかけるのを止めてエディが言った。「六甲山にある僕達のホテルだよ」「ナーガラージャのホテルなのね」 彼は頷いた。私はそれ以上尋ねなかった。

「高野山ってまだ雪は降っていないのかしら？」 アルンが答える。「大丈夫みたいだよ」「そう。でも寒いんでしょうね」 エディが言う。「大丈夫だよ。でも暖かい格好をして行こう」 私は頷いた。

エディがアルンに言った。「敵の状況はつかめたか？」 アルンが答える。「大体だ。船を降りれば正確な報告が出来ると思う」 エディは頷いた。

私は紅茶を飲みながら窓の外に目をやる。そこには確かに日本の風景が広がっていた。

「日本に着いちゃったわね」 私が言う。二人共窓の外を見る。

「本当だ。確かに日本に着いたようだ」 エディがそう言って私に笑顔を向けた。私は微笑み返して尋ねる。「懐かしい？」 彼は肩をすくめてみせた。「私も良くは判らないわ。何だか私の国じゃないみたいな気もするし。でも船を下りたらホッとするのも知らないわね」「少なくともみんな日本語をしゃべってるよ」「そうね。これからは微笑んでるだけでは済まないわね」 彼が笑った。「大丈夫さ。未だパーティーの予定は無いから」「良かった。でも未だ無いだけなのよね」「そうだね。でも君は多分巧くやれるよ。君は黙っていたってみんなに気に入られる」 私はアルンの方を見て言う。「アルン以外にはね」 アルンが慌てて言った。「僕はヨーコを気に入らなかったっけ？ そんな事無いだろう？」 私は笑って言う。「ただチェックが厳しかっただけよ」 エディが笑って見ている。アルンはとても困っていた。私は少し意地悪だったと反省して続ける。「アルン。気にしないで。冗談なんだから。あなたは初めからとても親切だったわよ。私はあなたの事を、とっても頼りにして居るのよ」 エディも言う。「そうさ。ヨーコは初めからお前の事をとても気に入っていたんだ。頼むぞ」 アルンが真顔で頷いた。

私達は食事を終えて部屋に戻り荷物をまとめた。私がするのをエディが横で見ている。

と言う。「ヨーコ。僕がやるよ。君に任せるともう一度香港まで戻ってしまいそうだ」
「香港までで片付けば、たいしたものよ。パリまで戻っちゃうかも知れないわ」 彼は肩
をすくめて私を退かせ荷物を詰めた。

私はバスルームの自分の化粧品などをまとめて彼の側まで運ぶ。彼はとても手際良く
それを詰め込む。私はそれを見ながら言う。「あなたってとても才能があるわ。香港の
あなたのおうちの時もそうだったし、パリで私の部屋からあなたの部屋へ移る時もそう
だった」 彼は笑いながら荷物を詰める。そして言った。「香港から出る時に一人で良く
出来たね」 「そう。あの時も途中でだめかと思ったのよ。でもお昼御飯を食べて戻っ
たら何故かとても巧く入ったの。それがとても嬉しかったわ。でもトランクケースに鍵
を掛け終えた途端にとっても怖くなったの」 「そうだったね。でも君の機転で助かっ
たんだ」 「違うわ。あなたが助けてくれたのよ」 彼は全部詰め終えてトランクケー
スを閉じた。「ほら。終わったよ」 「どうもありがとう」私が言った。彼は微笑ん
で言った。「どおいたしまして。これからも僕の仕事になりそうだね」 「その内に私も
巧く出来るように成るかも知れないわよ」 「構わないよ。上手な方がやればいいんだ。
そんなに大変な仕事じゃない」 「龍を使う事にくらべればね」 彼は笑った。彼は電
話でボーイを呼び荷物を運ばせた。

しばらくしてエンジンの音が変わり、船は静かに神戸港に接岸した。

神戸

私達の乗った船は、神戸港に着いていた。

入国手続きをエディにすべて任せて、私は一人でウェイトングループで待つ。
窓からは港の風景が見えた。 阪神高速道路、ポートタワー、そして山には神戸市の
マークが見えた。 私は確かに日本に戻っていた。 しかし船の上で感じていたように
やはり戻ったと言う実感が無い。 私はその事に少し戸惑いを感じた。 友人に電話を
しようかと思ったが、止めた。 そうしてしまうと自分の置かれた状況から逃げ出した
く成るような気がしたのだ。 それで私は戦地に着いたのだと思う事にした。 そう思う
事で少し自分の置かれた状況を認める事が出来る様な気がした。

エディは思ったより早く戻って来た。

「ヨーコ、行こうか。アルンが待っているよ」私は頷いて彼に従う。

建物を出た所に黒塗のロールスロイスが止っていた。傍らに白い手袋の運転手とアルンが立っている。運転手が恭しく扉を開ける。エディは私を先に乗せ、後ろから自分も乗り込んだ。運転手はドアを閉めて運転席に回り、乗り込んだ。

アルンは助手席に座り、運転手に「ホテルへ」と言った。

走り出した車の中で私は言う。「ねえ。信じられないかも知れないけれど、私、ロールスロイスに乗ったのって、生まれて初めてよ」エディは微笑んで言った。「それは良かった。何でも初めての事は素晴らしい」「でも、これで旅をする訳じゃないわよね」

「もちろん。なあ、アルン」エディが言った。アルンが振り返る。私はアルンに言う。「もう少しカジュアルな車だと嬉しいんだけど。何だかこの車だと私、緊張してしまうの」アルンは前を向き直って言った。「カジュアルね。女性と車はエレガントな方がいいと思うんだけど。カジュアルだったらポルシェか何かにしようか？」エディが笑いながら言う。「お前に任せるよ。ねえ、ヨーコ」私も笑いながらそれに同意した。そして付け加える。「アルン、私、エレガントじゃなくてご免なさいね」彼は両肩を上げて言った。「全然構わないさ」エディが声を上げて笑った。「君達はいいコンビだ。これからが楽しみだよ」私はアルンの真似をして肩をすくめてみせた。アルンもミラーでそれを見て笑った。

車は船のように静かに走り、そして洋館の玄関で音も無く止まった。運転手が下りて私の側のドアを開ける。

私は差し伸べられた手を取って、車を降りる。エディとアルンも車を降りた。そこはエディの香港の家の様な瀟洒な洋館だった。私にはとてもホテルには見えなかったが、それはホテルだった。

玄関には出迎えの人達が並んでいる。エディは私を誘って彼らの方へ向かって歩く。彼はみんなを知っている様だ。そして再会を喜んでいた。

彼は私を紹介した。「妻のヨーコです」私は笑顔を作って頭を下げ、言う。「よろしくお願いします」一番偉そうに見える人が恭しく頭を下げた。「奥様。ようこそお出で下さいました。私、支配人の郷田です。何なりとお申し付け下さい」

エディはボーイに荷物を運ぶ様に言うと、私を誘って中に入る。彼は振り返って言う。「ねえ郷田さん、まだ何か食べられるかな。お昼を食べ損ねちゃったんだ」

支配人が答える。「何かお部屋に運ばせます」「頼むよ。アルンの分もね」「畏まりました」

私達はボーイに案内されて歩く。ロビーも廊下もすべてがゴージャスなホテルだった。それはとても品が良く、しかもお金がかかっていることすら感じさせない。私は覚悟を決める。きっと驚くほど豪華な部屋に違いない。今度こそは何があっても驚くまいと思っていた。エディが歩きながらくすくす笑う。彼はまた覗き見をしたのだ。

ボーイが部屋のドアを開けた。しかしやっぱり私は中に入って立ちすくんだ。「これは・・・」 エディが笑う。「やっぱり驚いたね」 私は驚くと言うより、あきれていた。「龍の間だよ。香港と同じものだ」 私はこんなお金の使い方があるなんて想像したこともなかった。「あなた達っていったいどんな頭をしているの？」 彼が言う。「気に入らないかい？ 嫌だったら部屋を変えるよ」 「そう言う問題じゃ無いでしょう。あなた、日本に居たって、ここに住んでたの？」 「そうだよ。ここは僕の部屋だ」

ボーイが荷物を置いて出て行った。

私はアルンに尋ねる。「アルンもここに住んでいるの？」 「いや、僕は自分の家がある。ここから車で十分程の所だけど」 「家事はどうしているの？」 「住み込みのおばさんが居るんだ」 エディが言う。「彼女の作るカレーはとても美味しいんだよ」 「彼女は昔インドに居たんだ。だから本物の家庭のカレーを作ってくれる」 芦屋に住んでちゃんとメイドが居る。彼もお金持ちなんだ。私は考えることを諦めてソファに座る。

エディが香港から送った荷物が着いていた。私の知らない荷物もあった。彼はそれを解いた。中から三挺の銃が出て来た。私は驚いてそれを見る。エディはアルンにその中の一つを渡して言う。「これは例の銃だ。持っていてくれ」 アルンは何も言わずに頷くと受け取り、それをベルトに挟んだ。その時彼の胸に違う銃が有るのが見えた。

その後エディは、銀色で小さめの銃を私に差し出した。「何かの時の為に持っていてくれ」 私はそれを受け取る時に手が震えた。手に取るとそれは見た目よりしっかりした重みがあり、それは私自身の命の重さのような気がした。もう一挺はエディ自身の為の物だった。彼は簡単にチェックするとベルトに挟む。私はそれをしばらく手に持っていたが、諦めてバッグに入れた。その間私は一言も口をきかなかった。ここは間違いなく戦場だった。

エディの頼んだ昼食が運ばれて来て、三人でそれを食べる。私はピストルを渡された事で、少し緊張していた。アルンは食べ終わるとすぐに用が有ると言って出て行った。

私達は簡単に荷物を解き、龍の間で寛ぐ。私は靴を脱ぎソファに寝そべる。彼は何か難しそうな物を読んでいた。

「ねえ、何を読んでいるの？」 「試験に良く出る龍の使い方。これであなたも龍が使える」 「それって参考書のような物なの？」 「そう。李家に伝わるとても大切な古文書さ。ずっと一子相伝で伝わって来た物なんだ。今はアンディが管理している。でも彼は中を見た事は無い。これは龍を見つけた者だけが中を見る事が出来るんだ。そしてまた封をして次に龍を見つけた者がそれを見る」 「エディ。それってとても大切な物なんじゃないの？ でもあなたが今見ているのは、私にはコピーした物に見えるんだけど」 彼は笑って答える。「そうだよ。だってこんなに難しい物を一度見ただけじゃ覚えられないもの。内緒でコピーしたんだ」 「あなたって言う人は・・・」 私は溜息をついた。彼は悪戯っ子のように笑うと言った。「退屈なの？」 「いいえ。構わないのよ。ちゃんとお勉強して」 「大丈夫だよ。もうほとんど理解出来た。後は実戦で学ぶだけ

だ。それに不思議な事にヨーコは何も学ばなくてもちゃんと上手に龍を育てる」私は首を傾げる。彼が続ける。「君には龍使いなんて必要無かったのかも知れないね」「まさか。私は何もしないであなたに付いて来ただけよ。ちょっと勝手な事をし過ぎちゃったかも知れないけれど」彼が私の頭を撫でる。「君は好きなように振る舞えばいいんだよ。僕は君が好きなように振る舞う事が出来るように準備をする為に居るんだ。君をコントロールする為に居るんじゃない」「龍使いって龍をコントロールするんじゃないの?」「はい。龍使いはただのサポーターだよ」私は良く解らなかった。彼は笑って言った。「大丈夫。僕に任せて。ちゃんと参考書も持ってるし、それに僕は君を愛してる」「そう言う問題なのかしら?」「はい。それに何も無いよりましだろう?」「それもそうね」私はまた考える事を放棄した。

彼が思い付いた様に言う。「ヨーコ。ピストルを撃った事なんて無いよね」私は頷く。

「じゃあ一度撃ってみた方がいい」私は訳が解らなくてキョトンとしていた。彼は笑って私に手を差し伸べて立たせると言った。「ヨーコ、こっちへ来てごらん」

彼は私のバッグを持ち、手を引いてベッドルームに向かう。そしてベッドルームの中にあるクロゼットの扉を開け、その中の隠し扉を開けた。

「ここから地下に下りられるんだ。ちょっと狭いから気を付けてね」彼はそう言うと、灯りを付け、私の手を持ったまま先に下りた。私は訳が解らないまま付いて行く。

重い鉄の扉を開けると、そこはテレビで見えるような射撃の練習場に成っていた。私は彼の持っていたバッグを受け取り、さっき貰ったピストルを取り出す。彼がそれを取って弾を入れてくれた。そして私の後ろに回りヘッドフォンのような物を被せると、私に覆い被さるようにして、後ろから私の両手に銃を握らせる。冷たい銃の感覚と、暖かいエディの手に挟まれて、私の手は私の意思から遠ざかっていた。

私は的を見ていた。彼の手が私の指と一緒に引き金を引く。生まれて初めての衝撃が私の脇と肩を襲った。その衝撃は思っていたよりずっと大きくて、彼が後ろで支えていなければピストルを取り落としたに違いない。パーンと言う軽い音と共に、弾は的の中心から少し逸れた所に当たっていた。

「ワァッ」私が声を上げる。「簡単だろう?一人でやってみてごらんよ。嫌な奴を思い浮かべて引き金を引くと気持ちがすっきりするから」「ねえエディ。私今嫌な奴が思い浮かばないんだけど、どうしたらいいと思う?」「それは困ったね。じゃあ何も考えないで撃ってごらん。集中する事もストレスの解消にはなるから」私は頷いて銃を構えた。そして的に意識を集中して引き金を引く。思ったより簡単に出来た。もっと堅くて抵抗があるのかと思っていたがそんなに力はいらなかった。弾は的の端の方に当たっていた。衝撃にももう腕が慣れていた。

「エディ。これでいいのかしら」「GOOD 初めてのには上出来だ」

私は続けて撃つ。だんだん弾は中心に集まってくる。エディが弾を詰め替えてくれた。私はそれを受け取ってまた的に向かう。彼も隣で撃つ。弾が発射される時の音が私のものとは全く違った。ヘッドフォンを付けていても頭の芯まで届いて、脳を揺さぶるような音だった。そして的に開いた穴の大きさも全然違う。彼の撃った弾は的の中心に命中していた。私は自分の的を狙う。一発、二発、三発目で初めて中心に当たる。彼が驚いて見ていた。私は残りの弾もほとんど中心に集めた。

「ヨーコ。君はすごいよ。オリンピックにだって行けるかも知れない」 私は笑って言う。「これ、面白いわね。何だか007に成った気分よ」 「君は集中力があるんだね。それに体のバランスがとてもいい」 「良く判らないわ。でも本当にストレスの解消にはいいみたいよ」 彼は笑って、また弾を入れ替えてくれた。そして自分もとても怖い顔をして撃つ。私はそれを見ていた。彼が撃ち終わったところで私が言った。「あなたのそんな怖い顔って二度目だわ」 彼が首を傾げる。 私が言う。「一度目はロアールから戻る車の中で見たのよ。香港のホテルでの時は後ろ姿だったから怒った声しか知らないし」 彼は銃を置いて私の手を取って言う。「あの時そんなに怖い顔をしてたかい？」 私は頷く。

彼が続ける。「ごめんね。でもあの時僕は本当に君を失うのが恐ろしかったんだ」 私は頷いた。「いつも笑っていられるといいわね」 「ああ。大丈夫だよ。僕は君を見てるととても幸せな気持ちに成れるんだ」 私が言う。「じゃあ、あの的に私の写真を貼りましょう。そうしたら怖い顔をしなくても撃てるかも知れないわよ」 彼は困った顔で言う。「僕の悲しい顔が見たいのかい？ 心配しないで。練習しなくても大丈夫だから」 私は慌てて言った。「冗談よ。何も心配なんてしていないわ。それに私、しばらくは死について考えるのを止めたの」 「そうだったね。これはただのスポーツだ。オリンピックにだって有るからね」 「でも、銃の形が大分違うように思うけど」 「気のせいだよ」 彼はそう言うのと笑った。「そろそろ部屋に戻ろうか」 彼の言葉に私は頷いて、銃をバッグに入れる。

狭い階段を上って部屋に戻る。「ヨーコ。手を洗ってお茶にしようよ。ここの紅茶もとても美味しいんだ」 「いいわね。賛成よ」 彼は電話で紅茶を頼むと、私達は並んで手を洗った。リビングの戸棚の扉を開けるとテレビがあった。とても久しぶりに日本語の番組を見る。それはほんの少しだけ私を日常に戻してくれた。しかしどんなテレビドラマよりドラマティックな人生の中に自分が居るのを思い出すと、それはとても虚ろな感じがして、私はスイッチを切った。

紅茶が運ばれて来て彼がカップに注ぎ分けてくれた。「おいしいわ」 「ここの紅茶は僕が居なくても充分美味しいんだよ」 「あら、先に言われちゃったわね」 彼は片目をつぶって見せると紅茶を飲んだ。

窓から見える景色はまるで知らない国のように見えた。「ねえ、ここって本当に神戸なの？」 「はい」 「私の知っている事って本当に僅かな事だけだったのね。自分の国で、自分が住んで居た所のすぐ近くに、全く別の世界が有るんですもの。でもこのホテルって、どんなガイドブックにも載っていないんでしょうね」 「ナーガラージャのガイドブックにはちゃんと載っているよ。それに利用客も結構居るんだ。採算は取れているからね」 「そんなにナーガラージャって沢山居るの？」 「結構ね。でも一般の客だって居たんだよ。今は僕達が居るからだめだけど」 「あら、じゃあ赤字になっちゃうわね」 「構わないさ。もし何か有った時に一般人を巻き込みたく無いだろう」 「それにお金に困ったりしないしね」 「そのとおり。ヨーコも大分慣れたね」 「そうよ、あなたの、聖龍の妻ですもの」 そう言って私は笑ってみせた。彼も笑った。

私達は紅茶を飲み終わり、食器を片付けてもらう。そしてまた二人になって寛いだ。

私は彼にもたれて、いろんな事を思ってた。初めてエディに会った時の事や、香港の丘の上で彼が泣いた事など。まだほんの一週間前の事なのに随分昔の事のように思える。しかし、それはくっきりとした輪郭を持っていて、記憶が薄らいだせいで昔のように思えるのとは違った。沢山の事を一度に経験した為に記憶の密度が高くなっているのだ。彼は静かに私に触れていた。これからいったいどうなるのだろう。そう思ったところで彼が言った。

「ヨーコ。心配しなくていいよ。僕達に任せて」 私が尋ねる。「僕達？」 「そう、僕達だよ。アルンやナーガラージャ達の事さ」 私は頷いて目を閉じる。そして考えるのを止めた。彼の暖かさを感じているととても落ち着いた。彼は私に触れながらいろいろな事を考えていた。私はそれを見ないでうたた寝をする。知ったところで私にはどうする事も出来ないのだ。とても静かに時が流れた。それはとても幸せな時間だった。

日が落ちて外が真っ暗になった頃、二人で食事に行った。ロビーの横がレストランに成っていて、私達は窓際に席を取って夕食を頼む。

エディは入口に背を向けて座り、私は彼と向かい合って座っていた。彼の頼んだワインと幾つかの料理が運ばれて来て、私達はそれを楽しんだ。いつもの事ながらそれはとても高級な物で、それでいてあっさりとして仕上げられている。私達は料理について話しながら食べた。彼の食べ物に対する知識と情熱は、人並みはずれた物があった。しかし彼はとても楽しそうにそれを語り、そして食べる。

途中で美しい女性がレストランに入って来た。彼女は私の方をじっと見つめていた。私は指輪を確認する。それはちゃんと肌に触れていて龍は見えてないはずだった。初め船で会った人だろうと思ったが、彼女の思い詰めたような表情がとても気にかかった。

10分程経ったところ彼女のしているのが私ではなくてエディの背中だと言う事に気付いた。そして彼女の後ろに幼い龍の影も認めた。それで彼女が何時かエディの言った、日本で会った龍を背負った女性だと言うのが判った。私は彼女の姿をエディにテレパシーで送る。彼は飲みかけていたワインのグラスを置いて振り返って言った。「ミツコ」それが彼女の名前だった。

私はエディの背中に言う。「ミツコさんに謝った方がいいみたいよ。彼女、とても傷付いているわ。それにあなたをずっと待って居たみたいよ」彼は振り向いて私を見る。「ちょっと行ってくるよ」「行ってらっしゃい。そしてちゃんと彼女の思いを受け止めてあげて」彼はナフキンで口を拭くと立ち上がった。「エディ、私食べ終わったら部屋に戻っているわね」彼は頷くと、振り向いて、彼女の方へゆっくりと歩いて行った。

私はなるべく彼らを見ないようにして食事を続けた。彼女の龍は、まだ本当に幼く、後何度かは転生を繰り返さなくてはならないだろう。でも彼女の龍も私の龍に共鳴するのだろうか。私には判らない。

彼女は泣いていた。彼女を残して日本を去ったエディを責めている。彼女は確かに

エディを愛していたのだ。可愛そうに。エディが彼女を傷付けたのだ。私に何か出来る事が有るだろうか。彼女はこのホテルに来て、彼を待ち続けていたのだ。もう何年も。そしてやっと彼を見つけたと言うのに、彼は私を連れていた。

私には彼女のやり場のない悲しみが判った。私はうつ向いて涙をこらえる。悲しいのは私じゃない。彼女なんだ。そう思って涙をこらえた。エディは彼女に泣かれてオロオロしていた。

「困ったよ。ヨーコ、どうしよう」

彼の思考が届く。彼も龍以外ではただの男のようだ。私は彼に伝える。「男でしょう。しっかりしてよ。ちゃんと謝って彼女に許してもらおうのよ」そして私は席を立った。

彼の後ろを通過して出口に向かう。彼が振り向いてキーを渡してくれた。私は彼女に少し微笑んで会釈を送る。彼女はそれに対して戸惑いを見せた。私は立ち止まらずにそのままロビーに出た。

ロビーでアルンに出逢った。「ヨーコ。聖龍は？」私は彼をレストランから少し離れた所へ導いて、言った。「エディの昔の彼女と鉢合わせしちゃったのよ。彼、とても困っているわ。あなた助けてあげたら？」

彼は片目をつぶって見せるとレストランを覗きに行った。そして戻って来て言う。「美人だ。僕の手を負えそうにないよ。美人は苦手なんだ」「アルン。その割には私は大丈夫なのね」「どうして？」私達は笑った。「先に部屋に戻っていきましょう。キーは貰ったから」私は顔の前でキーを振った。

部屋に戻るとアルンはレストランに電話をかけてエディを呼び出した。そして広東語で何か話す。

電話を切って言った。「もうすぐ戻るよ。それにしても今は電話がコードレスでテーブルまで持って行っちゃうから、かえって不便だね。内緒話しが出来ない」彼はそれで広東語を使ったのだ。

「アルン、あなたは何カ国語ぐらい話せるの？」「エディと同じぐらいは何とか成ると思うよ」私はまた落ち込んだ。彼がそれを見て慰めてくれる。「僕の仕事だからね。ヨーコは日本語だけでも何も不自由しないんだから、いいじゃないか」私は言う。「ありがとう。エディもそう言って慰めてくれたわ」彼は両肩をすくめてみせた。私もそれを真似て笑った。

10分程でエディは戻って来た。「アルン、助かったよ。ありがとう」私が言う。「エディ、あなたちゃんと判って貰えたの？」「誠意を持って話して来たつもりだけど、女性の心理は難しいよ」「その事については後でゆっくり聞くわね。アルンと何か話があったんでしょう？」

エディが頷く。「報告を聞こうか」アルンが頷いて話し始めた。「まず、明日の予定だが、高野山真言宗の法院とアポイントメントが取れている。昼頃に向こうに着けばOKだ。後の事は聖龍の仕事だ」「判った。それで敵の状況はどうだ」

アルンが鞆の中から大きめの茶色い封筒を取り出して中身を拵げる。何枚かの写真だった。私はそれを手に取って見る。アルンが言う。「まずバリから追って来ている連中はたいして心配する事は無いだろう。ECの関係で6人程来ているがほとんどの連中は龍の存在を信じていない。だから半分は観光気分のような。奴等はポートピアホ

テルに滞在している。後、問題なのはロシアとアメリカだ。どちらもプロフェッショナルの諜報員が送り込まれている。まずロシアはたった一人だがイワノフと言ってかなり腕利きの男だ。そしてアメリカはスミスとモーリスの二人だ。この二人はCIAに属している。しかしありがたい事にロシアもアメリカも心霊学については全くの素人だ。ただヨーコを連れて帰れと言う指示を受けているだけだ。しかしECの連中はテレパシーのキャッチが出来る。でも今はECの連中と、ロシア、アメリカはコンタクトが取れていないのでまず安心して居られるだろう。とにかくこのホテルの外ではテレパシーは使わないようにしてくれ

私が尋ねる。「このホテルの中だとどうして大丈夫なの？」エディが答える。「このホテルの建っている場所が特殊なんだ。ここは大地の気が上に向かって流れているから、まるで壁のような役目を果たして居る。だから人の出入りだけ気を付ければ敵は防げる。この壁がなければ、エスパー達にどんな攻撃を受けるか判らない」「それってどう言う事なの？」「例えば、眠っている僕に働きかけて君を連れ出したり出来る。それよりも君自身を催眠状態にして此処から出て行くようにする事の方が簡単かも知れない。そうなったら防ぎようがない」「でも、此処は大丈夫なのね」「はい。でも外に出たときはなるべくテレパシーを使わないで。ECの奴等がどの程度の能力なのかは判らないが、ある程度の能力を持った奴等なら半径十キロ位の範囲で僕達の場所を知る事が出来るはずだ」「外で私が寝ている時は大丈夫なのかしら？」「僕が起きていれればすぐに判るから大丈夫だよ」私は頷いた。

アルンが続ける。「物理的な攻撃に関しては僕達が守れる。それにしてもロシアとアメリカはちょっと気になる存在だ。どちらも少数ながらかなりの経歴を持った奴等だ。そしてこの後どれだけ増員があるか判らない」エディが尋ねる。「肝心の日本はどうなんだ」アルンが答える。「心配はいらない。全く動く心配がないんだ。今度の事でかなり探ってはみたが、龍について知識を持っていたのは、仏教系では、明日行く高野山真言宗の最高指導者の法印と比叡山の天台宗の最高指導者の座主だけだ。後、伊勢の方はまず動くにも動く組織が無い。天理は肥大し過ぎて動けない。大本と金光はどうも龍神系の臭いがする。後は皆龍の事になど無関心だ」エディが尋ねる。「出雲はどうなんだ」「残念ながら出雲に関しては何も判らない。敵と味方が入り交じっていて見分けすらつかない。火の神にカムフラージュした龍神も居れば、その反対も居る。手が付けられないんだ。しかし混乱しているだけに攻撃を受ける可能性も少ない。いや、もう今の日本に神の為に戦う意志を持つ者は誰も居ないだろう」

エディが言う。「こっちのナーガラージャ達は何と言っている？」「出雲については誰も語らない」「判った。ありがとう」エディが言った。

私はアルンの持ってきた写真を見ていた。「アッ、この二人って香港のホテルにいた人達だわ」アルンが言う。「ECから来ているドイツ人のハインツとボルツだ。ヨーコ、あの時は悪かったね。僕達が油断して居たんだ」「構わないわ。エディが助けてくれたもの」そう言って笑った。しかしアルンはとても神妙な顔をしていた。「気にしないでね」私が言った。「あの時はまだヨーコの龍が目覚めていなかったから、緊張感が無かったんだよな」エディが言う。「本当に申し訳無い」アルンは本当にすまなさそうに言った。

エディが話題を変える。「出雲についてもう少し詳しく知りたいな」「判った。しかし時間が掛かるかも知れない」「構わないさ。龍の時間は穏やかに流れる」アルンは広げた資料を片付け「明日の朝9時に迎えに来る」と言って帰って行った。

私達はお風呂に入って寛いだ。

「エディ。あなたミツコさんの事どうするつもり？」「どうしようもないさ。だって僕はヨーコのことを愛して居るんだから」「それで済む問題なの？」「じゃあ、どうしたらいいんだ？」「あなたが傷つけたのよ。あなたが責任を持って彼女に判ってもらうしか無いんじゃないの？」「それはそうだけど。でも、ミツコは手ごわい」「私の龍より？」

彼は笑って答えない。私は大きく溜息をついて言った。

「香港でこんな事が有るんじゃないかと思っていたのに」「ごめん」私は笑う。「私に謝っても仕方が無いでしょう。ミツコさんに謝らなくっちゃ」

彼はいつものようにオイルでマッサージをしてくれた。私は考えることを止めた。考えても仕方がない。とにかく私はエディを信じていた。いや、信じるより他に出来ることがなかったと言った方が正しいかも知れない。

そのまま自分の家に帰ることも出来ただろう。そして、新しい仕事を探し、エディに出逢う前の生活に戻ればよかったのかも知れない。エディやアルンの言う敵の事など忘れてしまうことも出来たかも知れない。こんなに大層に守られてなどいなければ、敵だって私を狙ったりしないだろうとも思えた。だいたい私に彼らが言うような価値があるはずがないのだ。しかし、私は自分の元居た場所に戻ろうとは思わなかった。私の人生の歯車は、エディと出逢うことで外れたのではなく、エディという新しい歯車を得て、本来あるべき形に戻ったのだという実感があった。それに、エディはすでに私にとって掛け替えのないものに成っていた。だから、私は彼らを信じ、すべてを彼らの手に委ねるしかなかったのだ。

お風呂を終えて二人でワインを飲む。それはとても良く冷えていてお風呂で火照った体にととても気持ち良かった。彼はとてもリラックスしていた。私はそんな彼を見ているのがとても心地好い。

「ねえ、エディ」「何？」「何でもないわ。今夜はゆっくり眠れるかしら」「もちろん。此処は完璧に安全さ」

私は頷いてベッドルームに行った。そしてベッドに滑り込み目を閉じる。彼が「おやすみ」と言って額に口付けする。彼がベッドに入って来たのも気付かないぐらい、私はすぐに眠っていた。

朝目覚めると彼はもうベッドに居なかった。相変わらず早起きだ。私は寝起きでふら

つきながらベッドルームの扉を開けた。リビングでは、彼が音も無く舞っていた。何と
言う拳法なのだろうか。しかしそれは武術と言うより、私には舞っているようにしか見
えなかった。聞こえるのは呼吸の音だけで、高く跳躍しても足音すらない。しなや
かに、たおやかに舞う。まるで龍のようだった。後ろで束ねた長く豊かな黒髪が流れ
るように揺れる。目に光を宿し、体中の筋肉がバネの様になう。本当に美しい男だ。
私はしばらく見とれていたら、ベッドルームに戻りシャワーを浴びることにした。

シャワーを終えて身支度を整え、リビングを覗くと彼はソファで寛いでいた。「お
はよう」彼が言った。「おはよう」私も言う。「ねえ、さっきのアレ、何なの?」「朝
の運動さ。毎日やらないとエネルギーが不足するんだ」「毎日?」「そうだよ。ヨー
コは眠っていて気付かなかっただけさ」なるほどと思った。「エディ。荷物はどうす
ばいいのかしら?」「簡単でいいよ。でも寒いといけないから着る物は暖かい物にし
た方がいい」

私は頷いて二日分ぐらいの荷物を作った。ずっと旅行中なので迷う事も無い。トラン
クケースから小ぶりのバッグに移すだけだ。彼の荷物もよく似たものだった。

彼は電話でボーイを呼ぶと荷物を運ばせた。そして私達は朝食をとりにレストランに
下りた。

朝食が運ばれて来たところでミツコがレストランに入って来た。私はエディにそれを
告げる。彼は席を立てて彼女の元へ行く。私はその間に食事をした。ちょうど食べ終わっ
た頃彼が戻って来て言う。「ミツコが君と話したいって言ってるんだけど、いいかな?」

「構わないわよ。あなたは此処で食べて。そう、私の紅茶を向こうの席に運ばせて
くれないかしら」

エディはウェイターを呼ぶ。

私は席を立ててミツコの所へ行った。

「こんにちは。ここに座っていいかしら?」ミツコが頷く。私は彼女と向かい合っ
て座った。「私、田中陽子って言うの」彼女は消え入るような声で言った。「伊達光
子です」

ウェイターが私の紅茶を運んで来てテーブルに置く。私はそれを一口飲んで言う。
「何をお話すればいいのかしら?」彼女はしばらくうつ向いていた。そして顔を上げて
とても断定的に言う。「とても失礼なことを言います。でも許してください」私は頷
く。そして彼女が続ける。「彼を、私に返して下さい」「彼って、エディの事かし
ら?」彼女はしっかりと私の目を見つめて頷く。彼女の瞳から、彼女がしっかりした
精神の持ち主だと言う事が判った。私は彼女に好感を持った。彼女が言う。「私、夕
べ一晩彼を諦めようと努力したんです。ずっと彼だけを思って待ち続けて、やっと彼を
見つけた時にはあなたが居て、彼はあなたを心から愛している。どうしても無いで
すよね。だから諦めようと努力したんです。でも私の中の彼は、彼が居ない間にもう
私だけの彼になっていて、忘れようが無いのです。彼の声、彼の腕、彼の匂い、何もか
もが私には忘れられない。判って居るんです。判って居るんですけど心が、・・・」
そう言って彼女はうつ向いた。

私は尋ねる。「彼は、あなたに龍の話をした？」 彼女が答える。「ええ。私の龍はまだ幼いって、初めて会った時にそう言いました」 「それであなたはその話しを信じた？」

「いいえ。そんな話信じられる訳ないもの」 私は笑って言う。「そうよね。そんな馬鹿なこと無いわよね。じゃあ、あなたは彼のどこに引かれたの？」

彼女は少し考えて言う。「すべてです」

私はそれに頷いて言う。「じゃあ、今は龍の事を信じられる？」 彼女は首を横に振る。

「彼を信じていないの？」私が言った。 彼女はゆっくりと考えながら話す。「龍の事と彼を愛している事は関係無いと思うんです。 私には何故彼やあなたが龍にこだわるのかが判らない。 私の父もナーガラージャですけど、あんなのはただのおとぎ話でしかないわ。 確かに彼の部屋の龍はとても素晴らしかったけど、あれはただの絵でしかない。 私は生きている彼が好きなんです。エディを愛して居るんです」

素晴らしい答えだった。

私は溜息を付いて、エディにテレパシーで尋ねる。「エディ、今此処で龍の力を解き放つと、何か不都合があるかしら？」 彼が答える。「問題ない」 「ミツコの龍は反応する？」 「彼女の龍は幼すぎるから判らない」 「彼女も巻き込む事に成るかしら？」 「君の思うように、龍の望むようにやればいいんだ。もしそれで彼女を巻き込んだとしても、それが彼女にとって必要な事なのかも知れないからね」

ミツコが不思議そうに、テレパシーのために黙り込んだ私を見ていた。

私は意を決して言う。「ミツコさん。良く私を見てくれる？」 そして私は指輪を回した。 彼女の顔から見る見るうちに血の気が引いた。 私は慌てて立ち上がってエディを呼ぶ。エディは飛んで来て、倒れそうになったミツコを支えた。 私はまた指輪を回して龍を取めた。周りから溜息が聞こえた。私は座る。

エディが言う。「ミツコ、ヨーコが僕の龍なんだ」 彼女は戸惑いながらも頷いた。

「エディ、アルンが来たみたいよ。もう少し彼女と話したいから先に行ってくれる？」 彼は頷いて私達の席を離れた。

私は言う。「信じて貰えたかしら？ 彼の話は全部本当なの。彼が龍使いで私が龍。あなたに彼を返してあげるわけには行かないのよ。 私達は二人で一つのセットなの。あなたが彼に引かれたのは彼の龍使いの血のせいかも知れない。 何時かあなたも、あなたの龍を育ててくれる龍使いと運命的に出逢うわ。 だからゴメンなさい。あなたを傷つけた彼を許して。 信じられないかも知れないけれど、私達、何度も何度も生まれ変わって愛を育てたの。だから今の生では出逢ってからまだ十日程しか経っていないけれど、運命だったの。 どうしようもないの。私あなたの事大好きよ。だって同じ龍を背負った者同志ですもの。 彼をあなたにあげてしまってもいいと思うぐらいよ。 だって私はこの十日余りで何百年もの不幸や苦しみを埋め合わせても余る程の幸せを手に入れたのよ。 彼がその幸せを与えてくれたの。 世界中で一番の幸せだと思うわ。 もうこれ以上望むものなんて何もない。 だからあなたに彼を返してもいいと思えるのよ。 でもあなたに彼を返してもあなたが彼から貰える幸せは私がもらった幸せの何十分の一にもならないわよ。それでも普通の人の何倍もあるでしょうけど。 でも私の幸せとは比べ物にならないわ。 あなたは辛い道を行かなくっちゃならないかも知れないけど、あなたの龍使いに出逢った時には今の私と同じだけの幸せを与えられるのよ。

それを待ってもらえないかしら？ それに今はあなたにエディを返せない訳もあるの。

私達は龍と龍使いとして戦わなければいけない敵を持っているから。 でもこんな話しも信じてもらえないかも知れないわね」

彼女は静かに聞いていた。そして言う。「ヨーコさん、本当に私にも龍が居るんですか？」 私は頷いて言う。「ええ、私にも、エディにも見えるわ」

彼女は首を横に振ると言った。「私何が何だか判らなくなっていました。またお会いして貰えますか。それまでゆっくり考えてみます」 「それはいい考えよ。きっと私達いいお友達になれると思うわ。いつになるかは判らないけど、巧く時間を見つけて必ず連絡するわ」

タイミング良くアルンが私を迎えに来た。私は席を立つとミツコにアルンを紹介する。

アルンとミツコが握手をする。 アルンがミツコの龍に反応する。 こんなに小さい龍に反応するなんてミツコの龍使いはアルンなのかも知れない。 いや、多分間違いなくミツコとアルンは恋をする。 そう思うととても嬉しくなった。

私とアルンはミツコと別れてロビーに出た。私はエディに向かって走る。

「エディ、ミツコの龍はアルンの龍よ。二人はきっと恋をするわ」

エディが私の思いと体を受け止めてくれた。 私達から愛と喜びの感情が溢れだして、ホテルの中のナーガラージャに広がった。 エディが私を抱き上げると言った。

「ヨーコ。ありがとう」

アルンが玄関を出た所に車を付けていた。 真っ赤なベンツ。

私が言う。「アルン、とてもカジュアルよ」 彼は私の為にドアを開けふざけて言う。「奥様のお望みですから」

私はアルンの頬にキスをして車に乗り込んだ。エディとアルンは前の座席で、運転はアルンがした。

振り返ると、私達の居たホテルが朝日を浴びて輝いていた。

{{
-}}

龍

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
